

## 運庵普巖と『運庵和尚語録』

——虚堂智愚と石帆惟衍を育成した南宋中期の臨濟禪者——

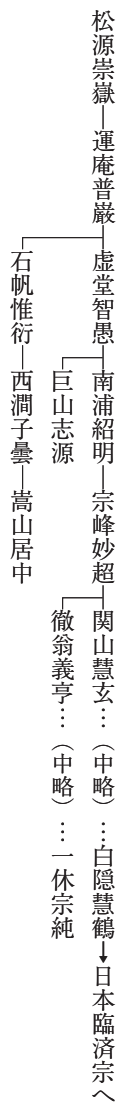
佐藤 秀孝

はじめに

臨濟宗虎丘派松源下の運庵普巖（少瞻、一一五二？—一二三二、または一一五六—一二三六）といえ、南宋中期に臨濟宗虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（崇岳とも、老贖翁、一一三二—一二〇二）の法を嗣いだ高弟の一人として知られ、江浙（江蘇・浙江地域）の禪林で活動し、法嗣に虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）と石帆惟衍（？—一二七二？）という二人のすぐれた禪者を育成したことで名高い<sup>1)</sup>。

南宋末期に至って、晩年の虚堂智愚のもとには日本から入宋求法した南浦紹明（円通大応国師、一二三五—一三〇八）と巨山志源が参学し、ともに智愚の法を嗣いで普巖の法孫に名を連ねて帰国している。一方、やはり晩年の石帆惟衍のもとに在った台州（浙江省）仙居県出身の西澗子曇（西礪とも、大通禪師、一二四九—一三〇六）は蒙古襲来（元寇）を挟んで南宋末と元初に二度の来日を果たしており、この人も普巖の法孫として鎌倉禪林に貴重な足跡を残し、相模（神奈川県）鎌倉の地で最期を迎えている<sup>2)</sup>。

日本禪宗二十四流の中で南浦紹明を派祖とする大応派（南浦派）と、西澗子曇を派祖とする大通派（西澗派）にとつて、その源流に位置する普巖の存在は自ずと注目されるようになる。とくに大応派は五山派として展開した系統とは別に、大徳寺派と妙心寺派がしだいに林下の大門派として大躍進し、やがて応燈関から江戸期の白隠慧鶴（鶴林、一六八五—一七六八）による白隠禪の形成を経て、現今の日本臨済宗に直接に連なることから、法統の祖師に当たる普巖と智愚の師資は日本臨済宗の直系の遠源として位置づけられるようになり、師資相承を重んずる禪宗において特別な立場に仰がれている。いま、普巖の門流に関わる主要な法系図を示すならば、およそつぎのごとくなるう。



紹明の系統である大応派の門流からは五山派の禪者として活躍した者も数多く輩出しているが、やがて主流となったのは大徳寺派と妙心寺派という地方展開を図った林下の二大勢力にほかならない。紹明の法を嗣いだ宗峰妙超（興禪大燈国師、一二八二—一三三七）は京都紫野の龍宝山大徳禪寺の開山始祖となり、大徳寺を本山とする大徳寺派が形成されている。また妙超の法を嗣いだ関山慧玄（無相大師、一二七七一—一三三〇）は京都花園の正法山妙心禪寺の開山始祖となり、妙心寺を本山とする妙心寺派が形成されている。大徳寺派と妙心寺派の両系統は中世後期に五山派に組せずに林下の門流として大きく躍進したことから、その源流に位置する普巖の存在もまた本師の松源崇嶽や法嗣の虚堂智愚とともに重視されるようになる。しかも応燈関の流れを汲む白隠慧鶴が江戸中期に臨済宗を再編し、やがて公案体系による白隠禪が日本の臨済宗を席卷するに及んで、直系の祖師として普巖は智愚とともに特別の存在として位置づけられている。

しかしながら、これまで運庵普巖に関する具体的かつ詳細な考察などは全くなされておらず、荻須純道『日本中世禅宗史』（木耳社刊）の「松源一流の禅と虚堂智愚」に、若干ながら普巖に触れた箇所が存している程度にすぎない。

### 古刊本『運庵和尚語録』と流布本『運菴和尚語録』

運庵普巖については、幸いにも生前のことばを門人の石帆惟衍らが編集した語録として、きわめて短編ながら宋版ないし五山版（覆宋版）の『運庵和尚語録』一卷と江戸期の流布本『運菴和尚語録』一卷が現存しており、その上堂語や偈頌などを窺い知ることができる。<sup>3)</sup> 普巖の法孫に当たたる南浦紹明が帰国に際して宋版『運庵和尚語録』を日本に持ち帰っているのか、同じく法孫に当たたる西澗子曇が来日する際に日本に将来しているのかは定かでないが、状況的に大応派か大通派に属する有縁の禅者によって、宋版『運庵和尚語録』が日本禅林に齎されているものと見てよからう。

松源崇嶽の法を嗣いだ直弟には何人かの禅者に語録が編纂刊行されたことを伝える記事が存しているが、実際に現今に残されている語録としては、普巖の『運庵和尚語録』のほかには、わずかに無明慧性（恵性、一一六〇―一二三七、または一一六二―一二三七）に『無明和尚語録』一卷が知られるのみであり、<sup>4)</sup> 『無明和尚語録』の場合も開版直後の宋版語録が法嗣の蘭溪道隆（大覚禪師、一二二二―一二七八）によって日本の鎌倉禅林に将来されたものと見てよいであろう。

現在、最も古い『運庵和尚語録』一冊は名古屋市東区徳川町の蓬左文庫（徳川美術館と並立）に所蔵される版本であって、一に朝鮮刊本とも推測されているが、おそらく宋版か覆宋版の類いではないかと目される。

表紙は淡香色または朽葉色で、縦二四・六センチ、横一七・一センチであり、貴重図書一〇四―四六として子部釈家類に分類されている。第一丁表面の右上に「御本」の印が押され、尾張徳川家初代の徳川義直（初名は義知または義利、一六〇一―一六五〇）の所蔵（駿河御讓本）であったことが知られ、無界一〇行本で、表紙を除いて一六丁より成っており、裏打ちが施されている。

また南北朝期の五山版（覆宋版）がかつて石井積翠軒文庫に所蔵されていたが、現今、この版本は駒澤大学図書館（和一八八・八四―八一七）に所蔵されており、そこには「積翠軒珍藏」と「祥雲菴常住」の印が押されている。<sup>6</sup>この度、蓬左文庫（駿河御讓本）より『運庵和尚語録』一冊の複写資料を取り寄せており、また駒澤大学図書館所蔵の五山版も併せて考察することができたので、それらの成果を基に古刊本の『運庵和尚語録』について一通りまとめておきたい。

また江戸初期の元和年間（一六一五―一六二四）の頃に刊行された古活字版の『運庵和尚語録』が鎌倉山ノ内の松岡山東慶禅寺に付置する松ヶ岡文庫と静岡県沼津市旭伝院の岸沢文庫と東京都世田谷区上野毛の大東急記念文庫に所蔵されている。また寛永一八年（一六四一）に大応派（大徳寺派）の江月宗玩（欠伸子、赫々子、一五七四―一六四三）が校訂した古活字版の重修本『運庵和尚語録』一卷も松ヶ岡文庫と、東京都文京区本駒込の東洋文庫内の岩崎文庫に所蔵されている。この松ヶ岡文庫本『運庵和尚語録』（クハ一〇五四）は表紙に「運菴語録全」とあり、右下に「運菴録、寛永旧板」と貼り紙が存する。一丁目表に「積翠軒文庫」「幽石軒」「大拙」の印が押されているから、もともと石井積翠軒文庫に所蔵されていたものである。<sup>7</sup>一丁目に「鎮江府大聖普照禅寺運庵和尚語録」とあり、以下、半丁が縦一八字、横一〇行で刻まれていることから、実際の内容は古刊本『運庵和尚語録』と同じく、道場山の語録も「安吉州道場山護聖萬歳禅寺語」となっており、他の配列も宋版や五山版と同じである。ただし、末尾にはすでに「炎宋安吉州道場山護聖萬歳禅寺運

菴禪師行実」が収められていることから、すでに古活字版に「運菴禪師行実」が存したことが判明する。さらに宗玩再版の古活字本には「運菴禪師行実」につづいて、丁を改めて大慧派の北磻居簡（敬叟、一一六四—一二四六）の記した「送<sub>三</sub>岩運菴婦<sub>二</sub>四明<sub>一</sub>」の偈頌と「岩少瞻住<sub>三</sub>其兄杜仲喬菴<sub>一</sub>疏」という疏文を載せた後、末尾につきのような宗玩の跋文が載せられている。

円通大応国師、嗣<sub>三</sub>径山虚堂、虚堂嗣<sub>三</sub>道場運菴。運菴禪師語録、世已稀。山僧再<sub>三</sub>住龍翔<sub>一</sub>之日、国師祿拾<sub>三</sub>号遺跡、以<sub>二</sub>七号修補<sub>一</sub>聚<sub>レ</sub>之。成<sub>レ</sub>編之次、此祿亦<sub>レ</sub>鉸<sub>レ</sub>木補<sub>レ</sub>不足、而寄<sub>三</sub>附于瑞鳳山<sub>一</sub>矣。荆棘林中摘<sub>レ</sub>葉、蒺藜園裡尋<sub>レ</sub>枝者乎。岩默者杜氏人也。予為<sub>三</sub>十五世之孫、欲<sub>レ</sub>売<sub>三</sub>痴默<sub>一</sub>。嗟。

寛永十八年夷則念九日、江月叟宗玩。「宗玩」「和陸之印」

他の『運庵和尚語録』には存しない貴重な跋文であり、若干ながら判読できない箇所も存するものの、一応、書き下してみるならば、およそつぎのごとくなるうか。

円通大応国師、径山の虚堂に嗣ぎ、虚堂は道場の運菴に嗣ぐ。運菴禪師の語録は、世に已に稀れなり。山僧、龍翔に再住するの日、国師が祿拾<sub>三</sub>の遺跡にして、七号の修補を以て之れを聚む。編を成すの次で、此の録、亦た木に鉸みて足らざるを補いて、瑞鳳山に寄附す。荆棘林中に葉を摘み、蒺藜園裡に枝を尋す者か。岩默は杜氏の人なり。予は十五世の孫と為りて、痴默を売らんと欲す。嗟。

寛永十八年夷則念九日、江月叟宗玩。「宗玩」「和陸之印」

これによれば、宗玩が南浦紹明（円通大応国師）ゆかりの京都紫野の瑞鳳山龍翔寺に再住した際、古活字版『運庵和尚語録』を再版して瑞鳳山に寄付したことが記されている。<sup>(8)</sup>宗玩が跋文を記したのは寛永一八年七月（夷則）二九日であったことが知られるとともに、宗玩によって「運菴禪師行実」が初めて古刊本の『運庵和尚語録』に挿入されたものと見てよいであろう。ただし、宗玩が「運菴禪師行実」を撰したと見るのは

早計であつて、宗玩より以前に何者かが「運菴禪師行実」を書き記していたと解する方が妥当かも知れない。

一方、駒澤大学図書館その他には元禄八年（一六九五）仲春に大応派（大徳寺派）の実翁宗著（一六五五—一七一六）が校讐して訓点を加え、江戸（東京都）の武城書林・中川息障軒より刊行された『運菴和尚語録』（駒大一二四—一三〇）一卷が所蔵されており、『慶應義塾大学附属研究所』斯道文庫撮影・建仁寺両足院蔵書マイクログフィルム目録初編』（斯道文庫発行）や京都国立博物館学芸部・赤尾栄慶編『建仁寺両足院聖教目録Ⅰ』（京都国立博物館発行）によれば、建仁寺両足院にも第四五函に元禄八年刊本が所蔵されている。『正統蔵経』第一二一冊に収められた『運菴和尚語録』の底本はこの元禄刊本であり、これが一般に広く流布していることから、流布本と称してよいであろう。

そこで先ず蓬左文庫所蔵本や五山版の駒澤大学図書館所蔵本および古活字版重修本の松ヶ岡文庫所蔵本など古刊本『運庵和尚語録』と、実翁宗著による流布本『運菴和尚語録』の配列を比較して示しておきたい。はじめに古刊本『運庵和尚語録』の配列を示すならば、

鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録 侍者元靖編

真州報恩光孝禪寺語 侍者智能編

安吉州道場山護聖萬歳禪寺語 侍者惟衍編

法語・賛仏祖・自賛・頌古・偈頌

となつており、蓬左文庫本の古刊本は半丁が縦一八字、横一〇行の一八〇字分で記され、他の古刊本も一字一〇行とほぼ同様である。「鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録」が四丁、「真州報恩光孝禪寺語」が一丁半、「安吉州道場山護聖萬歳禪寺語」が三丁半、「法語」が二丁半、「賛仏祖」「自賛」「頌古」「偈頌」で四丁半であり、全体で本文は一六丁分となっている。

これに對して、つぎに流布本『運菴和尚語録』の配列を示すならば、

運菴禪師肖像

運菴和尚住鎮江府大聖普照禪寺語録 侍者元靖編

真州報恩光孝禪寺語録 侍者智能編

安吉州道場山護聖万寿禪寺語録 侍者惟衍編

法語・贊仏祖・頌古・偈頌・自贊

炎宋安吉州道場山護聖万歲禪寺運菴禪師行実

宗著識語

となつており、この流布本『運菴和尚語録』は半丁が縦二〇字、横一〇行の二〇〇字分で記され、半丁につき二〇字づつ多く活字が刻まれている。「運菴禪師肖像」と内題で一丁、「運菴和尚住鎮江府大聖普照禪寺語録」が三丁半、「真州報恩光孝禪寺語録」が一丁半、「安吉州道場山護聖万寿禪寺語録」が三丁半、「法語」が二丁、「贊仏祖」が一丁、「頌古」が二丁、「偈頌」「自贊」で二丁、「炎宋安吉州道場山護聖万歲禪寺運菴禪師行実」が二丁、「宗著識語」が半丁であり、全体で本文は一九丁分と分量が増加している。

以上が古刊本『運庵和尚語録』と流布本『運菴和尚語録』の配列であるが、流布本は前後に付け足しが存して語録らしい体裁に整えられているほか、表題や各項目の順番にも若干の相違や改変が認められる。そもそも普巖の語録は本師の松源崇嶽の『松源和尚語録』二卷、法嗣の虚堂智愚の『虚堂和尚語録』一〇卷、法孫の南浦紹明の『円通大応国師語録』三卷などに比べてきわめて短編であり、辛うじて日本禅林に将来されたものであるといつてよい。以下、便宜上、普巖の語録を呼称する場合、古活字版より古い普巖の語録を指す場合には『運庵和尚語録』または単に古刊本と表記し、後世の流布本については『運菴和尚語録』または

単に流布本と表記することにした。

そこでつぎに古刊本『運庵和尚語録』と流布本『運菴和尚語録』について、その相違点を列記しておくことにしたい。まず、流布本には冒頭に『仏祖正宗道影』に載る西天東土の祖師像図に類似した木版「運菴禪師肖像」（末尾の図Ⅷ）が収められているが、古刊本にはこの肖像画（頂相）はいまだ載せられていない。上堂語の部分においては、古刊本の「鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録」の表題が流布本では「運菴和尚住鎮江府大聖普照禪寺語録」と改められており、「運庵和尚」と「運菴和尚住」の字句の表現や位置が相違している。同じように古刊本の「真州報恩光孝禪寺語」は流布本では「真州報恩光孝禪寺語録」と「録」の字が付されて整えられている。さらに注目すべきは古刊本の「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」が流布本では「安吉州道場山護聖万寿禪寺語録」となっており、寺の名称が「護聖万歳禪寺」から「護聖万寿禪寺」へと改められ、また「録」の字が付されている。

上堂語につづく箇所では、古刊本においては「仏祖贊」につづいて「自贊」一首が収められているのに対し、流布本では「自贊」は末尾に回され、新たに別の一首の自贊が追加されている。しかも追加されているのが現在は大徳寺に所蔵されている運庵普巖の自贊頂相のことばなのである。さらに流布本に載せられている「炎宋安吉州道場山護聖万歳禪寺運菴禪師行実」（以下、単に「運菴禪師行実」と略す）と「宗著識語」は当然のことながら古刊本には存していない。

もつとも残念なのは、古刊本『運庵和尚語録』にも流布本『運菴和尚語録』にも序文や跋文の類いが存しておらず、元来の宋版『運庵和尚語録』自体がいつ編集刊行されたものなのか定かでない点であろう。また三会録の上堂語にはそれぞれ編者である侍者の名が付されているが、上堂につづく「法語」「贊仏祖」「頌古」「偈頌」には編者名が記されておらず、小参・普説・題跋・小仏事などの類いは収録されていない。『運



庵和尚語録』の編集自体は普巖の生前から門人らによってなされていたわけであるが、刊行が果して普巖の示寂した直後であったのか、あるいは智愚や惟衍が名声を馳せた後であったのかは定かでない。

したがって、流布本『運菴和尚語録』冒頭の「運菴禪師肖像」と後半の「自贊」「運菴禪師行実」「宗著識語」は、元來、古活字版までの古刊本『運庵和尚語録』には存しなかったものであり、宗著が流布本『運菴和尚語録』を編集刊行した際に初めて挿入されたことが明らかである。とくに追加された「自贊」は実際に日本国内に残っていた普巖の頂相を閲覧し、新たに宗著が『運菴和尚語録』に収録したものと見られる。ただし、一つ注目されるのは「運菴禪師行実」に「炎宋安吉州道場山護聖万歳禪寺」と付されている点であって、この表記は流布本の「安吉州道場山護聖万寿禪寺語録」ではなく、古刊本の「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」という表記と一致していることであろう。このため「運菴禪師行実」は流布本『運菴和尚語録』が成立する以前にすでに何者かによって撰述されていた可能性が高いことになろうか。

さらに流布本『運菴和尚語録』には末尾に実翁宗著が記した「識語」が収められているが、そこに重要な情報が載せられていることから、つぎにこの宗著の「識語」の全文を紹介しておきたい。

天沢之道、流入<sub>三</sub>東海、汎濫浩漭、暨<sub>三</sub>于無垠者、從<sub>三</sub>我老運菴一片古帆、發<sub>レ</sub>洋出来也。其三會録、雖<sub>三</sub>旧刻較存<sub>三</sub>家  
亥漫漶、惜乎不<sub>レ</sub>与<sub>三</sub>贖翁・陳祖之語<sub>三</sub>並行也。予嘗感<sub>二</sub>一本<sub>一</sub>。爰并之江月玩公重修、自不<sub>レ</sub>揣<sub>三</sub>膚鈔<sub>三</sub>、覃<sub>三</sub>意校讐<sub>三</sub>、且  
加訓点<sub>三</sub>、以授<sub>三</sub>颯氏<sub>一</sub>。儻或有<sub>三</sub>箇漢<sub>一</sub>道<sub>三</sub>、天沢玄源、果流通也未麼<sub>一</sub>。即曰、君其問<sub>三</sub>諸水浜<sub>一</sub>。

元禄甲戌七年小至日、武丘谷安軒属末宗著、拜識。「宗著」「実翁」

この「識語」を記した実翁宗著は京都紫野の龍宝山大徳寺に第二七二世として陞住しており、『増補』龍宝山大徳禪寺世譜』によれば、

二百七十二 実翁。諱ハ宗著。徳禪ノ絶山宗信（大徳二百九世愚溪智ニ嗣グ。景德二世、祥雲寺裡香林院ヲ創

ス。二嗣グ。武州ノ人。宝永二乙酉五月十九日出世。香林二世、景德四世。正徳六丙申六月十七日示寂。世寿六十。二。大仙門下大光派。

と記され、事跡が簡略ながら知られている。宗著は武州すなわち武蔵（東京都か埼玉県）の人で、京都紫野の靈山徳禪寺で大仙門下大光派の絶山宗信（一六三八―一六八五）に参じて法を嗣ぎ、大徳寺第二〇九世の愚溪宗智（黙翁淵、一六一六―一六七七）の法孫に当たっている。宝永二年（一七〇五）五月に大徳寺に出世しているほか、武蔵の香林院二世や景德院四世などに住持している。香林院とは現在の東京都渋谷区広尾の瑞泉山祥雲寺の末寺である同地の香林院のことであり、景德院もかつて祥雲寺内に存した末庵にほかならない。

流布本『運菴和尚語録』刊行の事情を知るために、宗著の「識語」を書き下してみるならば、

天沢の道、流れて東海に入り、汜濫浩漭して、垠り無きに暨ぶは、我が老運菴の一片の古帆より洋に発し出で来たるなり。其の三会録、旧刻の較や豕亥漫漶に存すと雖も、惜むらくは贖翁・陳祖の語と並び行なわれざるなり。予、嘗て一本を蔵す。爰に并の江月玩公、重修して自ら膚鈔を搦らず、意を覃りて校讐し、且つ訓点を加え、以て剛氏に授く。儻し或いは箇の漢有りて「天沢の玄源、果して流通するや」と道わば、即ち曰わん、「君、其れ諸れを水浜に問え」と。

元禄甲戌七年の小至日、武丘容安軒の属末宗著、拝して識す。

といった具合になろう。この『運菴和尚語録』の識語は後代に付された跋文であつて、宗著が武蔵の容安軒において元禄七年（一六九四）の小至日（冬至の前日）に記しており、この人の四〇歳のときに当たっている。容安軒については明確ではないが、おそらく祥雲寺の香林院か景德院に存した子院ないし居室（方丈）の類いであろうと推測される。

ところで、文の冒頭に「天沢の道、流れて東海に入り」とあるが、天沢とは杭州餘杭県西北五〇里の径山

興聖万寿禪寺に近い直嶺下天沢塙に存した虚堂智愚の塔頭天沢庵のことであり、智愚の教えが南浦紹明によって東海の日本の地に導入され、その門葉が繁栄隆盛したことを述べている。また「我が老運菴の一片の古帆より洋に発し出で来たるなり」とあるのは、その遠源に普巖が智愚に示した「古帆未掛」の古則が存したありようを強調したものである。ついで宗著は「其の三会録、旧刻の較や豕亥漫漶に存すと雖も、惜むらくは贖翁・陳祖の語と並び行なわれざるなり」と述べており、『運菴和尚語録』の旧版が僅かながら存しているものの活字の誤刻が見られ、『松源和尚語録』や『虚堂和尚語録』に比べてほとんど世に知られていない点を惜しんでいる。ちなみに「贖翁」とは晩年に耳が不自由となつて「老贖翁」と称された松源崇嶽の渾名にはかならず、また「陳祖」とは明州象山県の陳氏の出身であつた虚堂智愚のことを指している。

さらに宗著は「爰に并の江月玩公、重修して自ら庸眇を揣らず、意を覃りて校讐し、且つ訓点を加え、以て颯氏に授く」と書き残しており、宗著より先に江月宗玩が普巖の語録を重修して訓点を加えて閲覧に便宜を与えたことなども記されており、これが先に示した岩崎文庫（東洋文庫内）や松ヶ岡文庫に所蔵される重修本『運菴和尚語録』を指している。

当然のことながら、五山版や古活字版の『運庵和尚語録』は「偈頌」までで終わっており、「行実」や「識語」は収められていない。以下、普巖の語録を文中に引用する場合、偈頌の部分までは古刊本『運庵和尚語録』を用い、必要に応じて流布本『運菴和尚語録』との異同を指摘し、流布本にしか見られない記事は『運菴和尚語録』をそのまま引用することにした<sup>10</sup>。

## 禅宗燈史に載る運庵普巖の記事

つぎに中国の禅宗燈史では運庵普巖に関して如何なる記事を載せているのか、一通りその内容を考察しておくことにしたい。その際に比較検討すべきは古刊本の『運庵和尚語録』であり、禅宗燈史に引用された普巖のことばが『運庵和尚語録』のどこから依用されているかであろう。明代初期に松源派の円極居頂（円庵、？—一四〇四）が編纂した『統伝燈録』卷三六「靈隱崇岳禪師法嗣」には、

湖州道場運菴禪師、諱普岩。題趙州像偈云、無端提起七斤衫、多少禪人著意參、尽向青州做窠窟、不知春色在江南。其下有虚空愚・石帆衍紹之。

とあり、きわめて簡略な記事しか収められていない。『統伝燈録』を通しては道号が運菴、法諱が普岩であり、崇岳に嗣法して湖州の道場山に住持した事実のほかは、わずかに「題趙州像偈」を載せるのみであり、これに門下の高弟として虚堂智愚（ただし、道号を虚空とする）と石帆惟衍の二禪者が輩出したことを伝えるにすぎない。そこに載せられた「題趙州像偈」では、唐代に活躍した南泉下の趙州從諗（眞際大師、七七八—八九七）の頂相に贊を付したかたちになっているが、実際に『運庵和尚語録』の「頌古」を窺うに、

青州布衫。

等閑提起七斤衫、多少禅和著意參。尽向青州做窠窟、不知春色在江南。

として同文の頌古が収められており、もともと趙州從諗の「青州布衫」の古則に対して普巖がなした頌古であったことが知られる。『統伝燈録』は『運庵和尚語録』「頌古」に載る「青州布衫」に対する普巖の頌古をあたかも趙州從諗に対する普巖の仏祖贊のごとくに改めて掲載していることが判明する。

つぎに同じく明代初期に大慧派の南石文秀（二三四五—一四一八）が編纂した『増集続伝燈録』卷三「靈隠松源嶽禪師法嗣」には、

湖州道場運庵普巖禪師。上堂拈、洞山冬夜喫<sub>レ</sub>果子<sub>二</sub>次、問<sub>レ</sub>泰首座<sub>一</sub>曰、有<sub>二</sub>一物<sub>一</sub>上<sub>レ</sub>拄<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>拄<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>黒似<sub>レ</sub>漆、常在<sub>二</sub>動用中<sub>一</sub>、動用中<sub>レ</sub>収<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得。且道、過<sub>二</sub>在<sub>二</sub>什麼處<sub>一</sub>。泰曰、過<sub>二</sub>在<sub>二</sub>動用中<sub>一</sub>。山曰、侍者掇<sub>レ</sub>退果卓。師頌曰、洞山点<sub>二</sub>辱家風<sub>一</sub>、首座埋<sub>二</sub>没自己<sub>一</sub>、双双綉<sub>二</sub>出鴛鴦<sub>一</sub>、千古扶持不<sub>レ</sub>起。讚<sub>二</sub>趙州和尚像<sub>一</sub>曰、無<sub>レ</sub>端提<sub>二</sub>起七斤衫<sub>一</sub>、多少禪人著<sub>レ</sub>意參、尽向<sub>二</sub>青州<sub>一</sub>做<sub>二</sub>窠窟<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知春色在<sub>二</sub>江南<sub>一</sub>。

と若干ながら記事に増加が見られるが、やはり伝記的な内容となると何も記されていない。『増集続伝燈録』を通して窺えるのは、道号が運庵、法諱が普巖と記しており、崇嶽の法を嗣いで湖州の道場山に住持した事実のほかは、わずかに「洞山冬夜喫<sub>二</sub>果子<sub>一</sub>」の古則に関する頌古と、先の「讚<sub>二</sub>趙州和尚像<sub>一</sub>」という祖賛を載せるのみである。『増集続伝燈録』で最初の「上堂」として載せられている「洞山冬夜喫<sub>二</sub>果子<sub>一</sub>」の内容は、『運庵和尚語録』「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」に、

冬夜、拈<sub>二</sub>洞山与<sub>二</sub>泰首座<sub>一</sub>喫<sub>二</sub>果子<sub>一</sub>公案。師云、老洞山玷<sub>二</sub>辱宗風<sub>一</sub>、泰首座埋<sub>二</sub>没自己<sub>一</sub>、双双綉<sub>二</sub>出鴛鴦<sub>一</sub>、千古扶持不<sub>レ</sub>起。

とある「冬夜小參」に載る偈頌に基づいている。「洞山冬夜喫<sub>二</sub>果子<sub>一</sub>」の公案とは曹洞宗祖の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）と石霜下の南嶽玄泰（泰首座）との間で交わされた問答古則であり、『運庵和尚語録』では冬夜（冬至の前夜）の小參で示されているが、『増集続伝燈録』では上堂ないし頌古のかたちに改められており、字句に若干の異同が認められる。いま一つの「讚<sub>二</sub>趙州和尚像<sub>一</sub>」は『続伝燈録』に載るものと同じであって、『続伝燈録』と『増集続伝燈録』に収められた普巖のことばは、頌古を祖賛に改め、上堂を小參に改めているものの、いずれも実際に『運庵和尚語録』から引用された普巖のことばであることが判明する。

このように『続伝燈録』と『増集続伝燈録』に収められた普巖の章では、伝記面を窺い得る内容としては、わずかに道号が運庵または運菴であったこと、法諱が普岩または普巖であったこと、松源崇嶽に参じて法を嗣いだこと、湖州（安吉州）烏程県の道場山護聖万歳禅寺（一に護聖万寿禅寺）に住持したことなどにすぎない。明末清初に陸続と編纂された禅宗燈史においても普巖の章は存しているが、『増集続伝燈録』の記事を越えるものではない。したがって、禅宗燈史を通してはほとんど何も普巖の事跡を明確に辿ることはできず、古刊本『運庵和尚語録』あるいは流布本『運菴和尚語録』が現今に残されているため、辛うじて普巖の辿った軌跡を多少なりとも解明し得るわけである。

#### 「運菴禅師行実」について

江戸期に刊行された流布本『運菴和尚語録』巻末には、実翁宗著が記した「識語」の前に「炎宋安吉州道場山護聖万歳禅寺運菴禅師行実」（以下、単に「運菴禅師行実」）が収められている。この「運菴禅師行実」によって、普巖の事跡は辛うじて概ね辿ることが可能なわけであるが、この伝記史料は撰者が誰であったのか、果たして中国で撰述されたものなのか、日本でまとめられたものかも明確にされていない。ただ、その文体などからして引用箇所を除いて後世の日本禅林で巧みに編集されたものであるかと推測され、普巖の生没年を含めて記事内容にいくつかの問題を抱えた伝記史料であると解される。

はじめに「運菴禅師行実」の全文を旧字のまま返り点のみを付して示すならば、およそつぎのようなものである。ただし、ここで定本としたのは駒澤大学図書館に所蔵される流布本『運菴和尚語録』の末尾に付される「運菴禅師行実」である。

炎宋安吉州道場山護聖萬歲禪寺運菴禪師行實。

師諱普巖、字少瞻。高宗紹興廿六年丙子、生於四明杜氏也。稍長、泊然不肯從俗屈首、亟從剃落。初與石鼓夷公、謁無用全公泊諸老。孝宗淳熙十一年甲辰春正月、松源岳禪師出世平江澄照、唱密菴之道、洗鉢衆底、參叩勤確、時年三十也。未幾、松源遷江陰之光孝、無爲之治父、師皆從。室中激揚、水乳相合。命師侍香山中也。光宗紹熙改元庚戌秋九月、董饒之薦福、引師居悅衆。解職錦旋矣。松源以偈一章贖之。治父門庭索々、東湖風波甚惡、知心能有幾人、万里秋天一鷲。松源領明之香山・蘇之虎丘・杭之靈隱・報慈、凡八會十八年、形影相從、玄微鏤盡。嘗在靈隱、分座接納。以母故回鄉。北磻簡公作長句唱出、叢林至今咏之。寧宗嘉泰二年壬申秋八月、松源臨示寂、以所傳白雲端禪師法衣再頂相授與。師却衣受像。倩破菴師叔請贊、江湖伏其識矣。師之兄喬仲、創菴于四明、即運菴也。請師居之。台州般若北磻簡公、製勸請疏。開禧二年丙寅春三月、師在蘇臺寶華、受鎮江大聖請、出世拈衣云、箇樣皮毛、千化萬變、黃梅鶯嶺、漫自流傳。後代兒孫可貴可賤。陞座拈香祝聖畢、次拈香云、此香堪笑又堪悲。剛把愁腸說向誰、治父山前曾落節、千鈞之重一毫釐。盡情拈出、供養前住臨安府景德靈隱禪寺松源老師大和尚、用酬法乳之恩。移眞之天寧・湖之道場。蓋道場開山訥禪師者、湖州許氏、目有三重瞳、垂手過膝抵豫。得心印於翠微學禪師、乃憩止于此山、薙草卓菴。參徒四至、遂成禪苑、廣闡法化。所遺壞衲三事及拄杖・木屐、現今在影堂中。嘗行道之時、猛犸之獸、馴戢如奉教。以故學世稱伏虎祖師者也。師從領寺事、宿弊爲之一革。胥曰、伏虎再來也。夢菴在居士讚師像曰、松源嫡嗣、伏虎後身、接物有驗、見地不親。叢林沾潤恩波闊、萬古雲峰翠色新。理宗寶慶二年丙戌秋八月初四日、坐化于此山。享年七十有一。請靈隱石鼓夷和尚、爲對小參云。

この「運菴禪師行実」は運庵普巖一代の事跡を知る上で基本となる伝記史料であることから、便宜上、つぎに書き下し文で示してみることにした。

炎宋安吉州道場山護聖萬歲禪寺の運菴禪師の行実。

師、諱は普巖、字は少瞻。高宗の紹興廿六年丙子、四明の杜氏に生まる。稍や長じて、泊然として俗に従い首を屈することを肯わず、亟かに剃落に従う。初め石鼓夷公と与に無用全公泊び諸老に謁す。孝宗の淳熙十一年甲辰の春正月、松源岳禪師、平江の澄照に出世し、密菴の道を唱う。鉢を衆底に洗い、參叩勤確す、時に年三十なり。未だ幾ならざるに、松源、江陰の光孝・無為の治父に遷り、師皆な従う。室中にて激揚して、水乳相い合す。師に命じて山中に待香せしむ。光宗の紹熙改元庚戌秋九月、饒の薦福を董すに、師を引いて悦衆に居せしむ。職を解きて錦旋す。松源、偈一章を以て之れに贖る、「治父の門庭は索々たり、東湖の風波は甚だ悪し、知心、能く幾人か有る、万里秋天の一鶚」と。松源、明の香山・蘇の虎丘・杭の靈隱・報慈を領すること、凡そ八会十八年、形影相い従い、玄微鑠け尽くす。嘗て靈隱に在りて、分座接納す。母の故を以て郷に回る。北磻簡公、長句を作りて唁い出だし、叢林、今に至るまで之れを咏ず。寧宗の嘉泰二年壬申の秋八月、松源、示寂に臨んで、伝うる所の白雲端禪師の法衣再びに頂相を以て授与す。師、衣を却けて像を受く。破菴師叔を倩して贊を請い、江湖、其の識に伏す。師の兄喬仲、菴を四明に創む、即ち運菴なり、師を請して之れに居せしむ。台州般若の北磻簡公、勸請の疏を製す。開禧二年丙寅の春三月、師、蘇臺の宝華に在りて、鎮江の大聖の請を受く。出世して衣を拈じて云く、「箇様の皮毛、千化万変し、黄梅・鶯嶺、漫りに自ら流伝す。後代の児孫、貴ぶべし賤しむべし」と。陞座拈香し、祝聖し畢わりて、次に拈香して云く、「此の香、笑うに堪えたり、又た悲しむに堪えたり。剛いて愁腸を把り誰にか説向かん。治父山前にて曾て落節す、千鈞の重きこと一毫釐。情を尽して拈出し、前に臨安府景德靈隱禪寺に住せる松源老師大和尚に供養し、用て法乳の恩に酬いんことを」と。真の天寧・湖の道場に移る。盖し、道場開山の訥禪師は、湖州の許氏、目に重瞳有り、手を垂れば膝を過ぐ。豫に抵りて心印を翠微の学禪師に得て、乃ち此の山に憩止し、草を薙りて菴を卓つ。参徒は四もより至り、遂に禪苑と成りて、広く法化を闡く。遺す所の壞柄・三事及び拄杖・木屐は、現今も影堂中に在り。嘗て行道の時、猛犸の獸、馴戢して教えを奉ずるが如し。故を以て世を挙げて伏虎祖師と称する者なり。師、寺事を領して従り、宿弊、之れが為めに一たび革まる。胥な曰く、「伏虎の再来なり」と。夢菴在居士、師の像に讀して曰く、「松源の嫡嗣、伏虎の後身、接物して驗有り、見地は親しからず。叢林沾



潤して恩波闊し、萬古の雲峰、翠色新たなり」と。理宗の宝慶二年丙戌の秋八月初四日、此の山に坐化す。享年七十有一。靈隱の石鼓夷和尚を請して、対小參を為すと云う。

この「運菴禪師行実」を著した撰者が果して誰であったのか、冒頭にも末尾にも撰述した年時や撰者の名などが具体的に記されておらず、実際のところ何も明らかでないのが実情である。ただ、ほかに普巖の伝記を全体的に傍証し得る史料がきわめて限られていることから、本稿においても一応は「運菴禪師行実」を基に置きながら、これに古刊本『運庵和尚語録』や流布本『運菴和尚語録』の記事その他を踏まえつつ、普巖一代の事跡をまとめざるを得ない。ただし、「運菴禪師行実」は伝記史料としてはきわめて不備なものであり、かつ諸史料からの継ぎ接ぎによってまとめられたものであるため、文体の統一がやや取れていない。しかもかなり時代を経てから、好学の禪者が諸史料を閲覧して普巖の伝記を巧みにまとめ上げた記事と見られ、おそらく日本禅林で中世末期から江戸初頭の頃に著されたものではないかと推測される。<sup>12)</sup>

### 日本で撰述された伝記史料

この「運菴禪師行実」のほかに日本で撰述された運庵普巖に関する伝記的な記載について一通り触れておきたい。建仁寺両足院に所蔵される白隠派下の高峰東峻（魯峰、一七二四—一七七九）が書写した『本邦諸師行状塔銘』下冊には「大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代敕諡大通禅師行実」が収められているが、その「大通禅師行実」の末尾部分の頭注に、

石室玖撰「松源・運菴・石帆・西潤・高山五師行状、此其一也。

という一文が付されている。これによれば、松源派金剛幢下の石室善玖（一二九三—一三八九）が松源崇嶽・

運庵普巖・石帆惟衍・西澗子曇・嵩山居中（大本禪師、一二七七一三四五）という五師について行状を撰していることになる。『大通禪師行実』そのものは入元した大通派の無極正初の依頼で曹洞宗宏智派の雲外雲岫（方巖、妙悟禪師、一二四二―一三三四）が撰したものであるが、同じ入元僧であった善玖があるいはもともとの史料である子曇の「行状」を書き記して正初とともに雲岫を訪ねているのかも知れない。<sup>13</sup> いずれにしても、鎌倉末・南北朝期の善玖が子曇のみでなく、崇嶽・普巖・惟衍・居中に關しても何らかの伝記史料も撰しているのであれば、今日に知られない貴重な内容も記されていたはずであつて、その散逸は惜しまれてならない。とりわけ、在元期間が久しかった善玖が普巖について何らかの事跡をまとめていたのであれば、その普巖の「行状」も興味深い内容が載せられていたものと推測される。

ついで大応派（妙心寺派）の東陽英朝（天道真源禪師、一四二八―一五〇四）が戦国期に撰した『宗門正燈録』卷一〇に「湖州道場山運庵普岩禪師」の章が早くに存している。英朝は大徳寺の第五三世を経て妙心寺の第一三世となつており、妙心四派の聖沢派の祖として後世の白隠下に連なる系統である。<sup>14</sup> 『宗門正燈録』は大応派（大徳寺派）の宗峰妙超（大燈国師）に至る臨濟宗直系の祖師の伝記や語要などを収録したものであり、<sup>15</sup> 運庵普巖の章にはつぎのように記されている。

湖州道場山運庵普岩禪師、嗣松源。源住治父、命師充維那（松源語録有送普岩維那之頌）。松源後住靈隱、請師首衆。北澗外集有岩首座母死、自靈隱之偈云、望斷靈山消息絶、不復倚門吹白髮、或從西向問、帰程、膺月蓮花随步発。靈山上首、途轍、臨喪不哀、非曠達、回首一会儼然在、將此深心奉塵刹。又有送岩運菴帰四明之偈云、大庾嶺頭提不起、盧老蒙山俱失利、後人不解革前非、通相欺誑真兇戲。老岩不負靈山記、颺下金襴如弊屣、直饒滅却不伝底、争似莫遭渠鈍置。破菴一語如雷霆、聾者有耳那得聞、若謂不聞越情量、蹉過堂堂大人相。題注云、松源以法衣頂相授、岩却衣受頂相、情破菴贊。

枯崖漫録曰、松源岳禪師、由二虎丘遷二靈隱、老而聵、叢林呼為二老聵翁。以三所レ伝白雲端和尚法衣、亟欲レ付レ人垂三三転語二而無二契者。留三衣塔下二曰、三十年後、有二我家子孫、來二此山一以此付レ之。遂告レ寂。石溪後亦由二虎丘奉レ旨而至二双徑、拈レ衣云、大庾嶺頭、黃梅夜半、争レ之不足、讓レ之有餘。而今公案現成、不レ免三將レ錯就レ錯。捧起衣云、敢問此衣白雲伝來、松源留下明二什麼邊事。惱二乱春風一卒未レ休。今仏海留二於双徑伝衣菴。愚以謂、直饒恁麼伝持、也是默翁三十年前弊履耳。

師初住二鎮江府之普照、次遷二真州之光孝、後居二安吉州之道場山。

後に詳しく触れるごとく、英朝は普巖に関する記事を『松源和尚語録』『北磻外集』『枯崖和尚漫録』などから探っており、その博学のさまを伝えている。上記の記事につづいて『運庵和尚語録』の「上堂」「法語」「仏祖贊」「自贊」「頌古」「偈頌」からの抜粋を順次に載せており、さらに最後に「贅語」としてつぎのような記事が載せられている。

案二伝燈録南院章、簡之太簡者矣。古尊宿録略叙云、南院郷貫・姓氏・受業不レ載。此十字豈非レ罪二宣慈乎。続伝燈者、南石琇老所レ撰、運菴伝、唯載二上堂一会頌古一首耳。不二亦太簡一也乎。且師行状不レ入二本録、別有二本一在二先師書院、心仁之乱遭二兵燹二而亡。余後他求未二再之見、誰能鍊二補天石、誠可二誓速一矣。盖夫江湖称二岩獸、乃知二蘇州人二也。又閱二道場語要、有二開山伏虎忘拈香。其語脉猶如二東山演祖之於二先五祖一、何也。或曰二師伏虎岩後身、也妄説耳。径山虎岩淨伏、嗣二度虚舟、舟嗣二通無得、無得与二運菴、同嗣二松源。伏之於二運菴、実為二姪孫、豈有二再来理二乎。盖道場訥公、時人称二伏虎和尚、詳二于伝燈第十五卷。案二枯崖漫録、載二別浦舟公住二道場二之日上堂二曰、百丈三日耳聾、馬祖有レ過無レ功。臨濟三遭二痛棒、黄檗有レ始無レ終。虎岩不レ行レ棒不レ行レ喝、成レ蛇底成レ蛇、成レ龍底成レ龍。拍レ床云、不レ見レ道、鸚遷二楊柳岸、蝶舞二海棠風。所レ謂伏虎岩者、道場山之境致、取二開山故事一以名レ之也。然伏虎再来説雖二髣髴、未二証拠一焉。熟二視而回香語、恍惚間恍、若二神出鬼没、不レ免二狐疑了一狐疑一爾耳。

蘇州人凡呼<sub>レ</sub>人為<sub>レ</sub>獸、吳俗常語也。范石湖有<sub>三</sub>禿<sub>三</sub>痴獸<sub>一</sub>詩是也。然有<sub>三</sub>兩岩獸<sub>一</sub>。枯崖漫錄下卷、平江府万寿訥堂辯禪師、寄<sub>三</sub>同參<sub>一</sub>偈曰、猿与<sub>レ</sub>鼈交割不<sub>レ</sub>開、兄呼弟応似<sub>レ</sub>忘懷、及<sub>三</sub>乎語到<sub>三</sub>諦訛処<sub>一</sub>、却道心肝不<sub>レ</sub>帶來。時亦稱<sub>レ</sub>之。後八坐道場、提唱如<sub>レ</sub>阪走<sub>三</sub>凡真<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>忝<sub>レ</sub>為<sub>三</sub>岩獸之子<sub>一</sub>・岳聾之孫<sub>一</sub>也。宗派図、万寿訥堂辯、嗣<sub>三</sub>瑞岩雲巢道岩<sub>一</sub>、岩嗣<sub>三</sub>松源<sub>一</sub>。又藏叟摘藁、天童請<sub>三</sub>石帆<sub>一</sub>諸山疏云、岳聾為<sub>レ</sub>祖、更岩獸為<sub>レ</sub>父、生兒如<sub>三</sub>祥麟行<sub>レ</sub>空<sub>一</sub>。南屏住<sub>レ</sub>湖、來<sub>三</sub>太白<sub>一</sub>住<sub>レ</sub>山、長老例<sub>三</sub>遞<sub>レ</sub>馬赴<sub>レ</sub>闕。做<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>灑瀨堆中砥柱、清<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>素娥雪裏梅花。宗派図、天童石帆惟衍、嗣<sub>三</sub>運菴岩<sub>一</sub>。道場別浦法舟、嗣<sub>三</sub>育王禿叟宗印<sub>一</sub>、印嗣<sub>三</sub>琰浙翁<sub>一</sub>。

この「贅語」では普巖の伝記的な記事が少ないのを、臨濟宗祖の臨濟義玄（慧照禪師、？―八六六）の法孫で唐末五代に活躍した南院慧顒に比して問題としている。慧顒は臨濟下の興化存奨（広濟大師、八三〇―八八八）の法を嗣いだ高弟であるが、その郷閩や俗姓あるいは受業の年時など伝記的な内容がほとんど知られておらず、慧顒と同じように普巖の事跡も定かでないとするのである。さらに「贅語」では、松源下の同門である雲巢道巖とともに普巖が「岩獸」と称せられた点や、唐代に道場山を開いた伏虎祖師如訥と、元代に活動した松源派の虎巖淨伏（天瑞老人、仏慧定智禪師、？―一三〇三）との混同などについて考証しているが、これらの考証についてはかなり問題を含むものであり、とくに道巖と普巖については後に一考を設けて私なりに検討しておきたい。ただ、一つ注目すべきは英朝が普巖の伝記史料に関して、

且つ師の行状は本録に入らず、別に一本有りて先師の書院に在り。応仁の乱に兵燹に遭いて亡ず。余して後、他をば求むるも未だ再び之れ見ず、誰か能く天石に鍊補せん。誠に警速<sub>せいそく</sub>すべし。

と書き残している点であろう。これによれば、もともと普巖には「行状」の類いが存したらしいが、それまでの『運庵和尚語録』には収められておらず、一本のかたちでかつて英朝の先師すなわち大応派（妙心寺派）の雪江宗深（仏日真照禪師、一四〇八―一四八六）の書院（方丈）に伝えられていたとされる。しかし、応仁の乱

の際、兵火によって普巖の「行状」は失われてしまい、その後、英朝はこの「行状」の別本を諸地に探し求めたようであるが、ついに得られなかったことを述懐している。この「行状」の正式な名称が如何なるものであったのか、また現今に残る「運菴禪師行実」と同じものを指しているのか、全く別個の伝記史料であったのかなどは定かでない。ただ、英朝は『宗門正燈録』の普巖章で、普巖の生没年や出身地・俗姓などについて一切書き残しておらず、また普巖を蘇州（江蘇省）の人ではないかとする推測をなしている点などを踏まえると、宗深の書院に存したとされる普巖の「行状」について、英朝はその具体的な記載内容を全く知らなかったことになろう。

一方、江戸後期にまとめられた普巖の伝記として大応派（妙心寺派）の大冥恵団（慧団とも、一七五四―一八一九）が編集した『宗門畧列祖伝』（詳しくは『本朝伝来宗門畧列祖伝』巻三「震旦」）にも「湖州道場運菴普巖禪師」の章が存している。<sup>17</sup>いま、上堂部分を略して普巖の伝記に関する箇所を示すならば、

（臨十六世）湖州道場運菴普巖禪師。師、字ハ少瞻。四明ノ杜氏ノ子ナリ。高宗ノ紹興二十六年丙子ノ年、生レ玉フ。稍長ジテ、泊然トシテ俗ニ從テ首ヲ屈スルコトヲ肯ハズ。出家受具シ、石鼓ノ夷公ト共ニ、無用ノ全等ノ諸老ニ謁シ、孝宗ノ淳熙十一甲辰ノ春、松源ノ岳、平江ノ澄照ニ出世ス。師コレニ依テ參叩勤確シ玉フ。時二年三十ナリ。尋テ松源、江陰ノ光孝、無為□冶父ニ遷ル。師皆從玉フ。室中激揚シテ、水乳相合シ、源、師ニ命ジ侍香セシム。光宗ノ紹熙改元庚戌ノ九月、源、饒ノ薦福ニ遷リ、師ヲ引テ悅衆ニ居シム。源、明ノ香山、蘇ノ虎丘、杭ノ靈隱・報慈ニ遷ル。始終八処、十八年、師ミナ從ヒ玉フ。曾テ靈隱ニ於テ、分座說法シ、母ノ故ヲ以テ、郷ニ回玉フ。北欄ノ簡、偈ヲ以テ唱出ス。叢林伝テ、コレヲ咏ズルモノ多シ。寧宗ノ嘉泰二壬申ノ年八月、源、示寂ニ臨デ、所伝ノ白雲ノ法衣並ニ頂相ヲ授与ス。師、破菴師叔ヲ倩テ贊ヲ請玉フ。師ノ兄喬仲、庵ヲ四明ニ創テ、師ヲ請シテ居シム。即チ運菴ナリ。開禧二丙寅ノ年三月、師、蘇臺ノ宝華ニ在テ、鎮江ノ大聖ノ請ヲ受テ出世シ、尋デ真ノ天寧、

湖ノ道場ニ移リ玉フ。(中略) 宋ノ理宗ノ宝慶二丙戌ノ年八月四日、道場ニ於テ坐化シ玉フ。寿七十一ナリ。語録一卷アリ。師ノ行狀ハ本録ニ入レズ、別ニ一本アリ。応仁ノ乱ニ兵燹ニ亡ズト正燈録ニ見タリ。道場ノ開山訥禪師、曾テ行道ノ時、猛摯ノ獸、常ニ馴戦スルコト、教ヲ奉ルガ如シ。故ニ世拳テ伏虎禪師ト称ス。師、道場ニ住シ玉ヒテ、宿弊皆革ル。因テ伏虎ノ再来ト称ス。夢菴在居士、師ノ像ヲ讚シテ曰、松源嫡嗣、伏虎後身、接物有驗、見地不親、叢林沾潤恩波闊、万古雲峰翠色新ト。

という内容のものである。興味深いのは後半に「語録一卷あり。師の行狀は本録に入れず、別に一本あり。応仁の乱に兵燹に亡ずと正燈録に見たり」と示されていることであり、明らかに先に示した東陽英朝の『宗門正燈録』の記載を受けていることであろう。恵団としては英朝の成果を訂正するかたちで普巖の伝記をまとめていることになり、英朝が閲覽できなかった普巖の「行狀」はともかくとして、「運菴禪師行実」を読み解くかたちで普巖の伝記をまとめている。後世の「運菴禪師行実」とは全く別個に普巖の「行狀」が存し、その伝記史料は『運庵和尚語録』に収められずに伝存していたが、応仁の乱の際に兵火に焼失したとされる。しかもその記事が『宗門正燈録』に記されていることが述べられている。果して実際に普巖に「運庵和尚行狀」といった表題の伝記史料が存していたのか否かは、いまとなつては杳として定かでない。

同じく江戸後期にまとめられた普巖の伝記に、茶人の藤野宗郁(松陰亭)が編集した『墨蹟祖師伝畧記』上巻にも「松源嶽禪師法嗣」として「安吉州道場山運菴普巖禪師」の章が存しており、<sup>18)</sup>

安吉州道場山運菴普巖禪師、字ハ少瞻。高宗紹興廿六年丙子、四明ノ杜氏ニ生ル。稍ク長ジテ、泊然トシテアヘテ俗ニシタガハズ、首ヲ屈メ、亟ニ從テ剃落ス。初、石鼓ノ夷ト与ニ無用ノ全ニ謁ス、泊諸老ニ謁ス。孝宗淳熙十一年甲辰春正月、松源岳禪師、平江澄照ニ出世シテ、密菴ノ道ヲ唱フ。洗鉢衆底、參叩勤確。時二年三十。イマダ幾クナラザルニ、松源、江陰ノ光孝、無為ノ治父ニ遷ル。師皆從フ、室中激揚、水乳相合ス。命師侍香山中。光宗

紹熙改元庚戌ノ秋九月、饒ノ薦福ヲ董ス、師ヲ引テ悅衆ニ居ラシム。職ヲ解、錦旋。松源、偈一章ヲ以、コレヲ臚ル。松源、明ノ香山、蘇ノ虎丘、杭ノ靈隱・報慈ヲ領ス、凡八会十八年、形影相從フ、玄微鏤尽ス。嘗テ靈隱ニ在テ、分座接納ス。母ノ故ヲ以、郷ニ回ル。北磻簡、長句ヲ作テ唱出ス。叢林、今ニ至テ、コレヲ咏ズ。寧宗ノ嘉泰二年壬申秋八月、松源示寂ス。伝フル処ノ白雲端禪師ノ法衣并ニ頂相ヲ以テ、師ニ授与ス。衣ヲ却ケ、像ヲ受ク。破菴師叔ヲ情テ賛ヲ請。江湖、其識ニ伏ス。師ノ兄喬仲、菴ヲ四明ニ創ス、即運菴ナリ。請師、コレニ居ラシム。台州般若北磻簡、勸請ノ疏ヲ製ス。開禧二年丙寅春三月、師、蘇臺ノ宝華ニ在テ、鎮江ノ大聖ノ請ヲ受テ出世ス、嗣香、松源ニ供養ス。真ノ天寧、湖ノ道場ニ遷ル。理宗宝慶二年丙戌秋八月初四日、此山ニ坐化。享年七十有一。

とあつて、この記事も明らかに「運菴禪師行実」を踏まえて著されており、普巖の生没年に関しても「運菴禪師行実」と同一である。ただ、『墨蹟祖師伝畧記』は『宗門畧列祖伝』と同じく文体が仮名交じり文で著されており、江戸期に「運菴禪師行実」がどのように読まれていたか、その内容を紐解く上でも貴重なものがある。本稿では「運菴禪師行実」とともに『宗門正燈録』『宗門畧列祖伝』『墨蹟祖師伝畧記』に記された普巖の記事をも参考に加えて普巖の事跡を整理していくことにしたい。

### 郷里・俗姓と出生年時

はじめに考察すべきは普巖の郷里と俗姓および出生年時に関する考察であろう。法諱は一般に「普巖」とされるが、一に「普岩」または「普崑」と記される場合も存している。普には「あまねく」とか「広く大きい」の意味が存するから、強いて言えば普巖で動かない大きな岩のことを指していよう。あるいは普巖は骨太で体格のよい大柄な人であり、その風貌を見て受業師が「普巖」という法諱を与えているのかも知れない。

また道号に關しても「運庵」と記される場合と「運菴」と記される場合が存しており、この運庵とは後に詳しく触れるごとく、俗兄の杜仲喬が普巖のために郷里に創建した草庵の名に因んでいる。ちなみに後に詳しく触れるごとく京都紫野の龍宝山大徳寺に所蔵される普巖の自賛頂相では、普巖自身が道号を「運菴」とし、法諱を「普巖」と自署している。一方、古刊本『運庵和尚語録』では「運庵」が、流布本『運菴和尚語録』では「運菴」がそれぞれ使用されている。道号の運庵ないし運菴であるが、運とは「移る」とか「巡る」の意であるから、移ろい行く庵または巡り合わせの居所といった意で用いたものであろうか。

このほかに普巖は「少瞻」という字を別に用いていたことが「運菴禪師行実」によって知られる。この点は大慧派の北磻居簡（敬叟、一六四—二四六）の『北磻文集』卷八「疏」に「巖少瞻住其兄杜仲喬菴疏」と題する疏文が収められていることによつて確かめられる。少とは「少しく」「僅かに」の意であり、瞻には「見上げる」とか「仰ぎ見る」といった意があり、仰ぎ尊ぶことである。したがつて、字の少瞻とは少し仰ぎ見る意と見られ、普巖が謙遜の意味を込めて字として用いたものであろうか。

明代初期の『続伝燈録』においては、道号を運菴とし、法諱を普岩と記しており、同じく『増集続伝燈録』においては、道号を運庵とし、法諱を普巖と伝えている。また南北朝期の『仏祖正伝宗派図』では道号を運菴とし、法諱を普崑と記しており、室町中期の『仏祖宗派図』では道号を運庵とし、法諱を普岩と記している。また江戸初期の『正誤仏祖正伝宗派図』四では道号を運菴とし、法諱を普巖と記している。このように禅宗燈史や宗派図によれば、道号については運庵と運菴が併存し、法諱については普巖・普岩・普崑が混在している。本稿では原則として運庵普巖という表記をもつて統一したいが、状況により運菴や普岩なども用いる場合が存しよう。

一方、この人の名称について「運菴禪師行実」自体はつぎのように伝えている。



師諱普巖、字少瞻。高宗紹興廿六年丙子、生於四明杜氏也。

これによれば、普巖は字を少瞻と称し、四明の杜氏に生まれたとされ、また運菴の道号が表題に付けられている。四明とは四明山を頂く明州（浙江省）の地すなわち後世の寧波府を指しており、明州は東浙（浙江省東部）に位置し、現今の寧波市一帯に当たっている。明確ではないが、おそらく普巖の生まれた杜氏の家は明州府城か府城を囲む鄞県の地に存したものでないかと推測される。

普巖が四明（明州）の出身であったことは、大慧派の北磻居簡の著作によっても確かめられる。居簡は『北磻続集』『題跋』の「跋雲頂演和尚法語」において「松源岳公在治父、四明巖少瞻、昏襖中録、得一言半句、歸澗中」と記しており、廬州無為軍（安徽省廬江県東北二〇里の治父山實際禪院（治父寺）の住持であった崇嶽のもとに普巖がおり、居簡は普巖に対して「四明の巖少瞻」と称し、また「澗中に帰る」と述べている。澗とは浙に同じく、両浙すなわち現今の浙江省の地を指しており、四明は東浙に位置している。

また居簡が参学期の普巖に対して少瞻の字を用いていることから、普巖は運庵の道号を称する以前から字として少瞻を用いていたことが知られる。さらに居簡は『北磻外集』『偈頌』においても「送巖運菴帰四明」〈松源以法衣・頂相授巖、却衣受頂相、請破菴賛〉という偈頌を残しており、そこでも「巖運菴の四明に帰るを送る」と記していることから、普巖が四明の出身であったのは疑いなからう。先の「跋雲頂演和尚法語」によつて普巖が字を少瞻と称していたことが知られ、「送巖運菴帰四明」によつて道号を運菴または運庵と称していたことが確かめられるのであつて、この点に関しては「運菴禪師行実」の記事は正しいことが判明する。<sup>19)</sup>

また普巖の俗姓が杜氏であつたことは、先に示したごとく『北磻文集』卷八「疏」に「巖少瞻住其兄杜仲喬菴疏」という疏文が存し、居簡が普巖の俗兄の名を杜仲喬と伝えていることから、普巖自身も杜氏で

あったことが確かめられる。もともと「運菴禪師行実」ではなぜか俗兄の名を「杜喬仲」と記しており、『北磻文集』が伝える「杜仲喬」と名が逆になっている。杜仲喬と杜喬仲のいずれを是とすべきかは判断に苦しむが、状況的にはより古い『北磻文集』が伝える「杜仲喬」に依るべきであろう。また「巖少瞻住<sub>三</sub>其兄杜仲喬菴<sub>二</sub>疏」によっても普巖が字を少瞻と称していたことが確かめられ、杜仲喬が後に実弟の普巖のために建てた庵名こそ連庵であったことが判明する。仲は兄弟の中の二番目を意味するから、あるいは杜仲喬にはさらに俗兄が存し、普巖は第三子以降の男子であったのかも知れない。

普巖の父親である杜氏については何らの記事も存していないことから、名も知られず早くに逝去しているものと見られ、その後は兄の杜仲喬が俗家を相続継承していたのであろう。一方、母親についても俗姓や名などは何も伝えられていないが、後に示すごとく普巖が松源崇嶽のもとで研鑽に努めていた折に母の訃報を聞いて四明に駆け付けた事跡が知られるから、普巖が出家参学して以降も母はかなりの期間にわたって健在であったものらしい。

つぎに問題とすべきは普巖の出生年時に関してであり、「運菴禪師行実」では明確に「高宗の紹興廿六年丙子」と記されており、普巖が出生した年時を南宋の初代皇帝である高宗（趙構、一一〇七―一一八七、在位は一二二七―一二六二）の紹興二六年（一二五六）であったと明記している。この点は「運菴禪師行実」を受ける『宗門畧別祖伝』や『墨蹟祖師伝畧記』も同様である。紹興二六年といえ、あたかも曹洞宗（宏智派祖）の宏智正覚（宏智禪師、隰州古仏、一〇九一―一一五七）が明州鄞県東六〇里の天童山景德禪寺で示寂する前年に当たっており、久しく梅州（広東省）に配流の身であった楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、仏日禪師、大慧普覚禪師、一〇八九―一二六三）が赦免されて自由の身となり、正覚の推挙で明州鄞県東五〇里の阿育王山広利禪寺に住持したのが紹興二六年十一月のことである。

普巖の生年に關しては、一見この「運菴禪師行実」の記述で何ら不都合が存しないかのごとくに見受けられる。しかしながら、実際には生年についてもいま一つ別の可能性が存しており、その説に基づくと普巖の生没年はそれぞれ数年づつ遡るのではないかと見られる。詳しい内容については示寂年時を考察する際に触れたいが、私は一つの新説として、普巖が出生したのを従来より数年早い紹興二二年（一一五二）ではなかつたかと推測しておきたい。

ところで、普巖は『運庵和尚語録』「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」において自らの生まれた日（誕生日）について、

開山伏虎禪師忌日拈香。老訥今朝死、老岩今日生、二俱無<sub>レ</sub>伎倆、有<sub>レ</sub>夢不<sub>レ</sub>同床。貧緣繼<sub>レ</sub>踵、香火荒涼。肝腸鏤作也須<sub>レ</sub>裂、駢屎如何比<sub>二</sub>麝香<sub>一</sub>。

という拈香を残している。これは普巖が後年に湖州烏程県の道場山護聖万歳禪寺（万寿禪寺）の住持を勤めていた際、道場山の開山始祖である青原下の道場如訥（伏虎祖師）の忌日になした拈香である。<sup>20</sup> その冒頭で普巖は「老訥は今朝死し、老岩は今日生まる、二り俱に伎倆無し、夢有りて床を同じくせず」と述べており、唐宋五代に如訥（老訥）が示寂した忌日に普巖（老巖）自らが生まれたことを明言している。また同じく『運庵和尚語録』の「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」において、

伏虎禪師忌日拈香。四年承<sub>レ</sub>云峯寺、暗写<sub>二</sub>愁腸<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>阿誰<sub>一</sub>、每<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>十一月初五<sub>一</sub>、一狐疑<sub>二</sub>一狐疑<sub>一</sub>。故我開山伏虎禪師、指<sub>レ</sub>柳罵<sub>レ</sub>楊、傷<sub>レ</sub>龜怨<sub>レ</sub>鼈。你死我活、莫<sub>レ</sub>説、莫<sub>レ</sub>説、一盃<sub>レ</sub>鹿茶一炷香、也勝<sub>二</sub>和<sub>一</sub>盲教訴瞎。

という拈香も収められており、この拈香では明確に如訥の忌日が十一月五日であったことが知られ、しかも普巖自身が「你是死し、我れは活まる」と述べていることから、先の「開山伏虎禪師忌日拈香」の記載とも合致している。これらによれば、如訥の忌日である十一月五日こそ普巖の誕生日であったことになり、道場

山に住持した際に普巖はそのことを希有なる因縁として自覚していた事実が確かめられる。

### 出家受戒から無用淨全らへの参学

四明の地に生まれた普巖が如何なる幼年期を過ごしたのか、その間の消息については何も伝えられていない。ただ、すでに触れたごとく普巖には杜仲喬（または杜喬仲）という名の俗兄が存したことが知られるから、杜氏の嫡男ではなかったことが知られ、次男または三男以下に出生しているものであろう。

やがて成長した普巖は世俗を捨てて剃髪し、出家の道を歩むことになるが、「運菴禪師行実」はその間の事情を「稍長、泊然不肯<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>俗屈<sub>レ</sub>首、亟<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>剃落」と簡略に伝えているにすぎない。普巖はやや成長してから心静かに思案し、世俗に從つて首を屈して人生を送ることを肯わず、突然に仏門に投じて出家剃髪したもののらしい。屈首とは首を曲げること、人に頭を下げる意であるから、普巖は若い頃から自己の信念を曲げて他人に屈するのを潔しとしない性格であったものと見られる。おそらく普巖は二〇歳前後になってから自らの意志で仏門に投じたようであり、出家した寺院や受業師の名なども知られていないが、状況的には明州地内の小刹において出家得度しているものであろう。このとき剃髪得度した際に、受業師から普巖または普岩あるいは普崑という法諱を授与されていることになろう。上字の「普」は系字であり、意味的には「普く」「広く行き渡っている」の義であつて、普巖とほぼ同時代の禪者として大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）が存しているが、普濟は普巖と同じ明州の人で、奉化県の張氏の出身であつたとされる。一方、下字の巖・岩・崑とは、山にある兀兀した大きな石の意であるから、おそらく受業師が普巖の頑強な体格なり風貌に因んで命名したものでなかろうか。ちなみに普巖と同時代にともに松源崇嶽の法を嗣いだ禪者とし

て雲巢道巖（巖巖）の存在が知られるが、普巖と道巖の関わりについては別に項を設けておきたい。

その後、「運菴禪師行実」によれば「初与<sub>三</sub>石鼓夷公、謁<sub>三</sub>無用全公泊諸老」と記されており、普巖が同郷の法友と見られる石鼓希夷とともに大慧派の無用浄全（越州翁大木、一一三七—一二〇七）らに参学したことが記されている。普巖は初め希夷と知り合つてともに無用浄全に謁したとされているが、希夷は浄全の法を嗣いだ高弟であり、『北磻文集』卷一〇に「夷禪師碑陰」が収められている。<sup>21</sup>「夷禪師碑陰」には希夷の行実に関するような記載は限られており、希夷には「夷禪師碑陰」に先んじて秘書侍右郎官の高似孫（字は続古、号は疎寮）という官僚が撰した塔銘（おそらく「靈隱石鼓禪師塔銘」といった表題か）が存したとされる。希夷の塔銘ないし文章の内容が残されていたならば、単に希夷の事跡が明確になるだけでなく、普巖との関わりについても何らかの情報が得られたことであろうし、希夷が曹洞宗真歇派の長翁如浄（浄長、一一六二—一二三七）とも親しいだけに如浄との関わりなども知られたことであろうが、現今に伝えられていないのが誠に惜しまれる伝記史料である。

普巖が最初に参学したとされる無用浄全に関しては、『天童寺志』卷七「塔像攷」の「無用全禪師塔」の項に、錢象祖（字は伯同、止庵居士）が撰した「塔銘」が収められており、『呉都法乘』卷五上之下にも「天童無用浄全禪師塔銘」として載せられているから、おそらく正式には「天童無用禪師塔銘」といった表題であったものと見られる。浄全は越州（浙江省）諸暨県の出身で、俗姓が翁氏であったことから、世に越州翁大木と尊称されている。いうまでもなく無用の大木に因む発想であり、浄全にはそうした規格を超えたような風貌が存したのであろう。法兄の拙庵徳光（東庵、仏照禪師、一一二一—一二〇三）に遅れて最晩年の大慧宗杲に参学した浄全は、同門の末弟として遯庵宗演などとともに晩年の宗杲の法を嗣いでいる。

淳熙一六年（一一八九）に通州（江蘇省）府治南一八里の狼山広教禪寺に開堂出世して後、浄全は蘇州（江蘇

省) 呉県の承天能仁禪寺や宣州(安徽省)宣城県(府城)北五里の敬亭山広教禪寺さらに建康府(南京)欽虹橋南の鳳台山保寧禪寺などを歴住し、明州鄞県の天童山景德禪寺に陞住している。ただ、問題なのは浄全が狼山に開堂した淳熙一六年には、普巖はすでに三〇歳を過ぎていた計算になり、初めて参学した禪者が浄全であったとするには無理が存し、浄全に参ずる以前にも当代に著名な禪者たちの門を叩いていたと解する方が妥当ではなからうか。

希夷については禅宗燈史の記述がきわめて簡略であつて、僅かに『北磻文集』卷一〇「塔銘」に「夷禪師碑陰」が存しているにすぎない。希夷の出身地や俗姓については定かでないが、無用浄全の法を嗣いで後、明州奉化県西の雪竇山資聖禪寺などに住持し、さらに杭州錢塘県西北の北山景德靈隱禪寺に遷住したことが知られている。<sup>(23)</sup> また希夷といえは、朗州(湖南省)武陵県北の梁山(陽山)観音禪寺に住持した楊岐派の廓庵師遠(則公)が詠じた『十牛図』に和韻していることでも名高い。<sup>(24)</sup> 「夷禪師碑陰」とあるから、もともと高似孫が撰した「靈隱石鼓禪師塔銘」といった表題の希夷に関する石刻史料が先に存し、その裏面に居簡が撰した「夷禪師碑陰」の文を刻んだものである。希夷と同門に当たる禪者としては、杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺や南屏山浄慈報恩光孝禪寺に住持した笑翁妙堪(笑翁、一一七七一—二四八)が名高く、また台州黄巖県の瑞巖浄土禪院(台州小翠巖か)に住持した盤山思卓(卓老)も浄全の法を嗣いでおり、この人は日本の道元(仏法房、一一〇〇—一二五三)が在宋中に参学したことで知られる。興味深いのは「夷禪師碑陰」に、

先師来<sub>二</sub>自乳竇<sub>一</sub>、喟然曰、昔問<sub>二</sub>道于是<sub>一</sub>、仏海・仏照、故家遺俗、猶有<sub>二</sub>存者<sub>一</sub>、今掃<sub>レ</sub>土矣。

という記事が存していることであり、これは希夷が明州奉化県の雪竇山資聖禪寺から杭州の靈隱寺に住持した際、自ら嘆息して「昔、道を是に問う、仏海・仏照、故家の遺俗、猶お存する者有り、今は土を掃えり」と述べたというものである。これによれば、希夷はかつて靈隱寺で楊岐派の瞎堂慧遠(仏海大師、仏海禪師、

一一〇三―一一七六）や大慧派の拙庵徳光（東庵、仏照禪師、一一二一―一二〇三）に参学した経験が存したものである。普巖が早くから希夷と班を組んで諸方を遍参していたのであれば、あるいは普巖も若くして希夷とともに慧遠や徳光に参学する機会が存し、その後に徳光と同門に当たる浄全のもとに投じたものかも知れない。

普巖が希夷とともに天童山の浄全に参学したことは、普巖が『運庵和尚語録』『安吉州道場山護聖万歳禅寺語』の「靈隠石鼓和尚至請上堂」において、

問<sub>レ</sub>仏不<sub>レ</sub>会、問<sub>レ</sub>祖不<sub>レ</sub>会、問<sub>レ</sub>向来大白無用叔祖不<sub>レ</sub>会、問<sub>レ</sub>靈隠松源先師不<sub>レ</sub>会、道場也不<sub>レ</sub>会。

と述べていることから明確に知られる。しかしながら、この記述からすれば、普巖は希夷とともに天童山（太白）において無用浄全に参学していることになり、いくぶん問題を含んでいる。浄全が天童山に住持したのが何時であったのは明確ではないが、日本の明庵栄西（千光法師、葉上房、一一四一―一二二五）が天童山の黄龍派の虚庵懐敏に随侍して帰国した紹熙二年（一一九二）ないし懐敏が日本から栄西の支援で天童山の千仏閣を重建した紹熙四年（一一九三）よりも以降であったはずである。<sup>(25)</sup> 状況的に普巖が希夷とともにそれ以前に浄全に参学したのであれば、その地は天童山ではなかったことになる。また普巖と希夷が天童山で浄全に参じたのであれば、当然のことながら紹熙四年より以降であったと解さなければならぬ。

いずれにせよ、普巖は修行時代の何れかで希夷と知り合い、ともに班を組んで浄全のもとを訪ねたものと解してよいであろう。<sup>(26)</sup> ただ、「太白<sup>(太)</sup>無用叔祖」という表現からすると、普巖が浄全に初めて参じたのは他の寺院であったとしても、その後も天童山において浄全に参学する機会が存したものと見なければならぬ。また逆をいえば、希夷も普巖の師である崇嶽に参学した経験が存したことになろう。普巖はかつて同学であった希夷とは晩年まで親しく道交を結びつづけており、やがて普巖の最期を希夷が看取ることになるが、そ

うした点については後に詳しく触れることにしたい。ちなみに『如浄和尚語録』『讚仏祖』には「無用頂相」が収められており、長翁如浄が浄全の頂相に贊を付していることが知られる。<sup>(27)</sup>如浄は浄全と同じ越州の出身であり、おそらく如浄もその参学期に浄全に随侍する機会が存したものであろう。

### 松源崇嶽への投帰と印可証明

その後、普巖は虎丘派の松源崇嶽のもとに投じて参学し、やがて崇嶽の法を嗣いで松源下の禪者として活躍することになる。「運菴禪師行実」には普巖が崇嶽のもとにおいてなした参学について、

孝宗淳熙十一年甲辰春正月、松源岳禪師出<sub>三</sub>世平江澄照<sub>三</sub>、唱<sub>三</sub>密菴之道<sub>一</sub>、洗<sub>三</sub>鉢衆底<sub>一</sub>、参叩勤確、時年三十也。未<sub>レ</sub>幾、松源遷<sub>三</sub>江陰之光孝<sub>一</sub>・無<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之治父<sub>一</sub>、師皆徒。室中激揚、水乳相合、命<sub>レ</sub>師侍<sub>三</sub>香山中<sub>一</sub>也。光宗紹熙改元庚戌秋九月、董<sub>三</sub>饒之薦福<sub>一</sub>、引<sub>レ</sub>師居<sub>三</sub>悅衆<sub>一</sub>。解<sub>レ</sub>職錦旋矣。松源以<sub>三</sub>偈一章<sub>一</sub>贐<sub>レ</sub>之。治父門庭素索、東湖風波甚惡、知心能有<sub>三</sub>幾人<sub>一</sub>、萬里秋天一鶚。松源領<sub>三</sub>明之香山<sub>一</sub>・蘇之虎丘<sub>一</sub>・杭之靈隱<sub>一</sub>・報慈<sub>一</sub>、凡八會十八年、形影相從、玄微鏤尽。

と伝えている。崇嶽については幸いに陸游（字は務観、号は放翁、一一二五—一二〇九）の『渭南文集』巻四〇「塔銘」に「松源禪師塔銘」が存し、『松源和尚語録』巻末にも「塔銘」として収められている。また『釈子稽古略』巻四の「杭州景德靈隱禪寺禪師名崇岳」の項も比較的詳しいことから、その事跡が大まかに知られる。「松源禪師塔銘」によれば、崇嶽は処州（浙江省）龍泉県松源の呉氏の出身であり、出身地の地名である松源を自号としている。長じて仏教を思慕し、二三歳のとき沙弥となつて五戒を受け、台州（浙江省）黄巖県西五〇里の靈石山教忠崇報禪寺（靈石寺）で雲門宗の癡禪元妙（一一一一—一一六四）に参じ、さらに杭州餘杭県の径山能仁禪院（後の興聖万寿禪寺）に上山して楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲に相見している。その後、



崇嶽は明州の天童山において最晩年の虎丘派の応庵曇華（一一〇三―一一六三）のもとに投じて器重せられ、隆興二年（一一六四）に三三歳でようやく杭州（臨安府）錢塘県の西湖湖畔に存した白蓮律寺で得度剃髪している。福州（福建省）侯官県の乾元禪寺において楊岐派の木庵安永（？―一二七三）に参じた後、崇嶽は衢州（浙江省）西安県の西山烏巨乾明禪院において虎丘派の密庵咸傑（一一八一―一一八六）に相見して久しく随侍し、大悟徹底して印可を得たのである。その後、崇嶽は咸傑が靈隱寺に勅住するのに随侍し、靈隱寺で第一座を勤めた後、諸刹に歴住している。

崇嶽が蘇州（江蘇省）長洲県の陽山澄照禪院（澂照禪院とも）に出世開堂したのは淳熙十一年（一一八四）一月のことであるが、「運菴禪師行実」によれば、普巖は淳熙十一年正月に崇嶽が平江府（蘇州）の陽山澄照寺に住持したのを知って、三〇歳の頃に崇嶽のもとに参じたとされる。淳熙十一年の時点で年齢が三〇歳であったとすると、普巖が出生したのは紹興二五年（一一五五）かその前年であった計算になる。その後、崇嶽は常州江陰軍（江蘇省）江陰県の君山報恩光孝禪寺、廬州無為軍（安徽省）廬江県の治父山實際禪院、饒州（江西省）鄱陽県の東湖薦福禪院、明州（浙江省）慈溪県の香山智度禪院、蘇州呉県の虎丘山雲巖禪院を歴住しており、『松源和尚語録』巻下「臨安府景德靈隱禪寺語録」によれば、慶元三年（一一九七）六月五日に勅黄を奉じて杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺に入院している。

ちなみに『松源和尚語録』巻上「無為軍治父山實際禪院語録」は「参学普巖等編」とあり、参学の普巖らによつて編集されていることが知られるから、少なくとも普巖がその前後に崇嶽の門にあつて侍者などを勤めていたらしいことが知られる。崇嶽が無為軍すなわち廬州廬江県東北二〇里の治父山實際禪院に住持した年時については、『松源和尚語録』や「松源禪師塔銘」あるいは『増集統伝燈録』などの禪宗燈史においても明記されていない。ただ、「運菴禪師行実」には「光宗の紹熙改元庚戌秋九月、饒の薦福を董し、師を引

いて悦衆に居らしむ」とあり、崇嶽が饒州の東湖薦福禪院に住持したのを紹熙元年（一一九〇）九月のことと伝えているから、これに先立つ数年前には治父山に住持しているはずであり、およそ淳熙年間（一一七四—一一八九）の末年頃に普巖は参学の侍者として治父山の上堂語の筆録編集に従事していたことなるう。<sup>(28)</sup>

普巖が崇嶽のもとで如何なる問答商量をなしたのか、残念ながら機縁の語句などは伝えられていない。

『運庵和尚語録』『頌古』には普巖の作として「世尊降生指<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>」「初祖見<sub>二</sub>梁王<sub>一</sub>」「心不<sub>二</sub>是仏<sub>一</sub>」「智不<sub>二</sub>是道<sub>一</sub>」「狗子無<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」「洗鉢孟話」「百丈野狐」「趙州百骸一物」「青州布衫」「芭蕉拄杖子」「密庵破沙盆」という一〇首の古則公案に対する頌古が収められている。この中で「趙州布衫」の頌古は『続伝燈録』や『増集続伝燈録』に収められているが、とくに「密庵破沙盆」の古則は普巖にとつて法祖に当たる密庵咸傑ゆかりの公案であるだけに、崇嶽のもとで実地に参究しているものと見てよいであろう。

幸いにも崇嶽の語録である『松源和尚語録』巻下「偈頌」には、

送<sub>二</sub>普岩維那<sub>一</sub>。

治父門庭素素、東湖風波甚惡、知心能有<sub>二</sub>幾人<sub>一</sub>、萬里秋天一鶚。

という普巖に与えた偈頌が載せられている。これは廬州治父寺の崇嶽のもとで侍者を勤めた後、饒州の東湖薦福寺で維那（紀綱）として崇嶽を助化した普巖を送る際に与えた饒別の偈頌にはかならない。維那は六知事の一つであり、寺内の修行僧を掌握管理する職位であるから、当時、崇嶽は普巖の力量を認めて維那に抜擢しているものと見られる。この偈頌は「運菴禪師行実」にも引用されており、おそらく夏安居を終えた秋の時期に何らかの理由で普巖が会下を去る際に与えられたものであろう。治父は廬州の治父寺のこと、東湖は饒州の東湖薦福寺のことを指しており、いずれも崇嶽が化導を敷いた禅刹であり、普巖がこの両寺で崇嶽に就いて参禅学道に努め、維那の要職を勤めて修行僧を束ねていたことが知られる。

治父寺では侍者として上堂語を編集しているわけであるから、普巖が維那として活躍していたのは薦福寺であつたと見てよく、何らかの事情で維那の要職を辞して席下を去るのに際し、崇嶽が饒別に詠じて送った内容ということにならう。ただ、このときはいまだ崇嶽のもとを正式に辞したのではなく、一時期、薦福寺を離れるのに際して崇嶽が普巖に与えた偈頌と見られる。崇嶽は普巖のことを「知心」すなわち我が心を知ってくれる真の知己として認めており、このときすでに普巖が崇嶽の印記を得ていたことが窺われる。また「万里秋天の一鶚」とあるから、普巖が崇嶽のもとを辞したのが秋の頃であつたことが知られ、鶚とは鳶に似て水辺に棲んで急降下して獲物の魚を取る鷲鷹目の鳥であり、その俊敏なさまに普巖を準えている。

#### 松源崇嶽の嗣法門人について

ところで、禅宗燈史や宗派図には松源崇嶽の嗣法門人をどのように伝えているであろうか。つぎに禅宗燈史や宗派図に載せられている崇嶽の嗣法門人について一通り整理しておくことにしたい。中国の禅宗燈史では明代初期の『続伝燈録』卷三六に「靈隱崇岳禪師法嗣一十二人」として、

金山善開禪師（鎮江金山善開禪師）・道場普右禪師（湖州道場蓮菴禪師）・華藏覺通禪師・龍翔希璉禪師（温州龍翔石岩禪師）・瑞岩光陸禪師（瑞岩少室光陸禪師）・天目文礼禪師（明州天童山天目禪師）・雪竇大歇謙禪師・淨慈谷原道禪師・瑞岩雲巢岩禪師・虎丘蒺藜曇禪師・北海心禪師・諾庵肇禪師。

という一二人の法嗣を挙げており、この中で天目文礼（滅翁、一一六七—一二五〇）までが見録となっている。同じく明代初期の『増集続伝燈録』卷二には「靈隱松源嶽禪師法嗣」として、

四明天童滅翁文礼禪師・湖州道場蓮庵普巖禪師・鎮江金山掩室善開禪師・華藏無得覺通禪師・温州江心石巖希璉禪

師・台州瑞巖少室光睦禪師・湖州道場北海悟心禪師・四明雪竇無相範禪師・台州瑞巖雲巢巖禪師・四明雪竇大歇謙禪師・杭州淨慈谷源道禪師・蘇州虎丘蒺藜曇禪師・諾庵肇和尚。

という一三人の法嗣を挙げて見録している。その後も明末清初に陸統として『祖燈大統』や『五燈全書』などの禪宗燈史が編纂されているが、それらにも普巖の章はそのまま継承されている<sup>30</sup>。

つぎに中国や日本に残る宗派図の類いには、崇嶽の法嗣は如何に伝えられているであろうか。無準下の東福円爾(辨円、聖一國師、二二〇二―二二八〇)が日本に将来した東福寺所藏『宗派図』(『禪宗伝法宗派図』とも)には「松源岳禪師」の法嗣として、

掩室開禪師・毒果願禪師・諾庵肇禪師・雲巢岩禪師・運庵岩禪師・無得通禪師・蒺藜曇禪師・焦山範禪師・護聖璉禪師・谷源道禪師・大歇謙禪師・道場心禪師・秋浦月禪師。

とあり、一三人の法嗣の名を挙げている中で、普巖の名は五番目に列している。ここにはいまだ天目文礼の名が見られない上に、毒果□願と秋浦□月という二禪者は逆に他の史料に一切その名が挙げられていない人であり、如何なる素性の法嗣なのかが定かでない<sup>31</sup>。

また『韓国仏教全書』第七冊には高麗国の破庵派の無学自超(溪月軒、妙巖尊者、一三二七―一四〇五)が筆写した『仏祖宗派之図』が収められているが、そこには「松源岳禪師」の法嗣として右から二段につづいて順番に、

北海心禪師・若菴肇禪師・少室睦禪師・谷源道禪師・蒺藜曇禪師・雲巢岩禪師・無礙通禪師・運菴岩禪師・石室璉禪師・天目礼禪師・大歇謙禪師・掩室開禪師。

とあり、一二人を載せる中で普巖は八番目に名が挙げられている。同じく愛知県一宮市の長島山妙興寺に所藏される南北朝後期から室町初期に著されたと見られる『仏祖宗派之図』では「松源岳禪師」の法嗣として

右から順番に、

天目札禪師・大歇謙禪師・掩室開禪師・無得通禪師・雲巢岩禪師・谷源道禪師・運菴岩禪師・北海心禪師・若菴肇禪師・少室陸禪師・蒺藜曇禪師・石室璉禪師。

とあり、その順番こそ相違するものの、自超のものと同じ一二人を載せる中で普巖は七番目に名が挙げられている。日本で著された宗派図で崇嶽の法嗣に無明慧性の名を記していないのは一見不可解であるが、韓国の『仏祖宗派之図』と同じく元代にまとめられた宗派図に基づいているのであれば、慧性や蘭溪道隆の名が見られなくとも問題はないのかも知れない。

東京都世田谷区上野毛の大東急記念文庫に所蔵される南北朝期の『仏祖正伝宗派図』には「靈隠松源崇岳」の法嗣として右から順番に、

華藏無得覺通・天童滅翁文礼・虎丘蒺藜正曇・南明不菴了悟・道場北菴悟心・道場運菴普岩・瑞巖少室光睦・瑞巖雲巢道岩・雪竇無相□範・顯慈諾菴師肇・淨慈谷源至道・金山掩室善開・江心石崑希璉・雙塔無明慧性・雪竇大歇仲謙。

とあり、一五人を載せる中で六番目に普巖の名が挙げられている。また応永二五年（一四一八）八月に夢窓派の古篆周印が刊行した『仏祖宗派図』では「靈隠松源崇岳」の法嗣として右から順番に、

華藏無得覺通・天童滅翁文礼・瑞巖少室光睦・道場運庵普岩・金山掩室善開・雪竇大歇仲謙・雙塔無明慧性。

とあり、七人を載せる中で四番目に普巖の名が記されている。一方、江戸初期の『正誤仏祖正伝宗派図』巻四では「靈隠松源崇嶽」の法嗣として右から順番に、

天童滅翁文礼（天目樵者）・雪竇無相□範・顯慈諾菴師肇・瑞岩雲巢道巖・道場北海悟心・淨慈谷源至道・合州少室光睦・江心石崑希璉・保福晦岩□暉・雪竇大歇仲謙・雙塔無明慧性・南明不菴了悟・虎丘蒺藜正曇・華藏無得覺

通・金山掩室善開・道場運菴普巖。

とあり、一六人の法嗣が列記されている中で、宗派図の記載の事情ではあるが、普巖は最後に名が挙げられている<sup>(32)</sup>。いずれにせよ、これらを総合すると、崇嶽には掩室善開・少室光睦・毒果□願・諾庵師肇・雲巢道巖・運庵普巖・無得覺通・蒺藜正曇・無相□範・石巖希璉・谷源至道・大歇仲謙・北海悟心・秋浦□月・無明慧性・滅翁文礼・不庵了悟・晦岩□暉および在俗の陸游という一九人の法嗣の名が知られ、彼らはいずれも十二世紀末から十三世紀前半に浙江や江蘇の禅林を中心に化導をなしていくわけである。

このほかに宗派図に載らない松源崇嶽の法嗣として『松源和尚語録』冒頭に載る謙令憲(回菴)の序文には「師既歿、其嗣惠足会<sub>三</sub>粹其平生之言。黄龍一翁禪師、又撮<sub>三</sub>取其玄要、集為<sub>二</sub>一編<sub>一</sub>」とあり、同じく汲郡の孟猷の後序にも「予見<sub>二</sub>松源無<sub>レ</sub>恙時<sub>一</sub>、樂<sub>レ</sub>称<sub>三</sub>參学弟子光睦与<sub>二</sub>大純惠足<sub>一</sub>。今惠足以<sub>三</sub>其師語録<sub>二</sub>来求<sub>レ</sub>序<sub>一</sub>」とあるから、崇嶽には惠足という法嗣も存し、『松源和尚語録』の編集刊行に尽力したことが知られる。ちなみに洪州(江西省)義寧州仁郷の黄龍山崇恩禪寺に住持した一翁慶如は密庵咸傑の法を嗣いでおり、崇嶽の法弟に当たる禪者であるが、惠足とともに『松源和尚語録』の編集に貢献している。

さらに大慧派の北磻居簡はその詩文集である『北磻統集』「題跋」において、

跋<sub>二</sub>雲頂演和尚法語<sub>一</sub>。

松源岳公在<sub>二</sub>治父<sub>一</sub>、四明巖少瞻、昏禊中録、得<sub>二</sub>一言半句<sub>一</sub>、帰<sub>二</sub>澗中<sub>一</sub>。后在<sub>二</sub>薦福<sub>一</sub>、成都演<sub>一</sub>、広安開、尤能大<sub>三</sub>其声<sub>一</sub>。

松源声益宏者、三禪者、為<sub>二</sub>力居多<sub>一</sub>、剡中浩然深、則用<sub>レ</sub>力多而功少、卒以不<sub>レ</sub>寿。松源働独高、適前輩掩<sub>レ</sub>光、若<sub>二</sub>日落星罔<sub>一</sub>、後生向<sub>レ</sub>明、咸所<sub>二</sub>仰止<sub>一</sub>。演与<sub>レ</sub>開、道全氣合、莫<sub>レ</sub>逆<sub>二</sub>於心<sub>一</sub>、蓋自謂、香巖・寂子不<sub>二</sub>相干<sub>一</sub>、一語諧譁、遂成<sub>二</sub>吳越<sub>一</sub>。演帰<sub>二</sub>雲頂<sub>一</sub>、開居<sub>二</sub>雲居<sub>一</sub>。蜀僧南来、詣<sub>レ</sub>演問<sub>レ</sub>津、必令<sub>レ</sub>往<sub>二</sub>雲居<sub>一</sub>。今月禪師法語在<sub>レ</sub>焉、抑知<sub>二</sub>善知識<sub>一</sub>、眼觀<sub>二</sub>東南<sub>一</sub>、意在<sub>二</sub>西北<sub>一</sub>、果安在哉。後生不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>兩公優劣<sub>一</sub>、則月公所<sub>レ</sub>藏、贓物見在。

という跋文を残しているが、そこにも貴重な普巖の動向と松源下の法嗣の一人の事跡を伝える記事が見られる。この「跋<sub>二</sub>雲頂演和尚法語<sub>一</sub>」についても書き下し文を示してみようならば、およそつぎのごとくなるろう。

松源岳公、治父に在るに、四明の巖少瞻、昏襖中に録し、一言半句を得て、澗中に帰る。后に薦福に在るに、成都の演・広安の開、尤も能く其の声を大にす。松源の声益ます宏きことは、三禪者、力の居多を為す。剡中、浩然として深ければ、則ち力を用うること多くして功少なく、卒に以て寿しからず。松源の価の独り高きは、適に前輩、光を掩い、日落ち星冏るが若し。後生、明に向かうは、威な仰止する所なり。演と開とは、道全じく気合し、心に逆らう莫し。蓋し自ら謂らく、「香巖・寂子、相い干わらず、一語の諧諱、遂に呉越と成る」と。演は雲頂に帰り、開は雲居に居す。蜀僧の南来せんとして、演に詣でて津を問わば、必ず雲居に往かしむ。今、月禪師の法語に焉れ在り。抑そも善知識を知ること、眼は東南を觀、意は西北に在らば、果して安くにか在らんや。後生にして両公の優劣を知らざれば、則ち月公の藏する所、贓物、見に在り。

これは成都（四川省）出身の□演という禪者が成都府（四川省）金堂県南五〇里の雲頂山（石城山）の雲頂禪寺に住持してなした法語に対し、同じ四川出身の居簡が寄せた跋文である。そこに松源崇嶽の門下を代表する三禪者として四明出身の少瞻□巖と成都出身の□演と広安（四川省）出身の□開の名が挙げられている。この中で少瞻巖とはいふまでもなく普巖のことであるが、広安の開とは崇嶽の高弟として名高い掩室善開のことにほかならない。一方、成都の演について詳細が何ら辿れないのは遺憾であるが、この「跋<sub>二</sub>雲頂演和尚法語<sub>一</sub>」によって普巖や善開とともに成都□演の評価もきわめて高かったことが窺われる<sup>33</sup>。

また「月禪師」とは後に善開の法を嗣いだ石溪心月（仏海禪師、一一七七？—一二五六）のことであり、『石溪和尚語録』巻下に付録される「新添」には「雲頂演和尚送<sub>二</sub>石谿出<sub>レ</sub>関見<sub>二</sub>雲居掩室和尚<sub>一</sub>法語」が収められており、その法語において、

月侍者、相從既久。一日謂予曰、近聞三衲子輒三湊雲居、亦願効三瞎驢趁隊、可否。予謂之曰、僕雖在三先師會中、与渠友善、但見其喫飯屙屎、鼻直眼横、而不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>其為<sub>二</sub>何人<sub>一</sub>也。汝若具<sub>レ</sub>眼、行自辨<sub>レ</sub>之。嘉定戊辰季秋、紫雲演老書。

と記されている。したがって、この法語を記した雲頂寺の□演とは、普巖や善開と同門に当たる松源下の紫雲□演という禪者のことであり、かつて崇嶽のもとに在った善開と紫雲演は、あたかも唐代の馮山靈祐（大円禪師、七七一―八五三）の門下に輩出した香巖智閑（襲燈禪師、？―八九八）と仰山慧寂（小釈迦、智通禪師、八〇七―八八三）の二大士に比せられている。

また嘉定戊辰の季秋とは嘉定元年（一二〇八）九月に当たっており、このとき雲頂寺の紫雲演のもとで久しく侍者を勤めていた心月は洪州（江西省）建昌県の雲居山真如禪院で善開が盛んに化導を敷いている情報聞き、善開に参禅したい旨を紫雲演に願ひ出ている。紫雲演が語るころによれば、紫雲演は善開とともに先師崇嶽のもとで法友であったことが知られ、その人となりや風貌を心月に語っており、自ら善開に参学すべきことを勧めている。おそらく紫雲演は崇嶽のもとで善開のみでなく普巖ともかなり親しい道交を結んでいたものであろう。

### 運庵普巖と雲巢道巖

いま一つ興味深い事跡として、松源崇嶽のもとに運庵普巖のほかに雲巢道巖（巖獸）という禪者があつて、ともに崇嶽の法を嗣いで活躍していることであろう。普巖と道巖であるから、両者はともに略称すれば□巖ないし□岩ということになり、単に巖禪人・巖首座などと記されている場合、両者の何れを指すのかきわめ



て紛らわしい存在であったことになろう。

普巖と道巖の両者が直接に深く関わったという記事は存していないようであるが、南宋末期に大慧派の枯崖円悟が編集した『枯崖和尚漫録』巻下「雲巢巖禪師」の項に、

雲巢巖禪師、訓学無<sub>レ</sub>倦、且能折<sub>レ</sub>節下<sub>レ</sub>士、慰藉良厚、雋彦婦<sub>レ</sub>之。開爐日示<sub>レ</sub>衆云、是句亦割、非句亦割、雪峯<sub>レ</sub>毬、睦州擔<sub>レ</sub>板。惟有<sub>二</sub>趙州老漢<sub>一</sub>、向<sub>二</sub>火爐頭<sub>一</sub>、拈<sub>二</sub>起香匙火筴<sub>一</sub>、東撥西撥、忽撥<sub>二</sub>得一塊<sub>一</sub>。恰是饒州景德、人家壁角頭、多年破磁碗、三世如来只管看。運庵曰、此語酷似<sub>二</sub>父翁松源<sub>一</sub>。

という興味深い記事が存している。ここに挙げられる雲巢巖禪師が道巖のことであり、そこに同門の普巖のことも記されているのである。便宜上、この文章の書き下しを示すならば、およそつぎのごとくなるろう。

雲巢巖禪師、訓学して倦むこと無く、且つ能く節を折りて士に下る。慰藉すること良に厚く、雋彦、之れに婦す。開爐の日、衆に示して云く、「是句も亦た割り、非句も亦た割る。雪峯は毬を輓し、睦州は板を担う。惟だ趙州老漢のみ有りて、火爐頭に向つて、香匙・火筴を拈起し、東撥西撥するに、忽ち一塊を撥い得たり。恰かも是れ饒州の景德、人家の壁角頭、多年の破磁碗にして、三世の如来、只管に看るのみ」と。運庵曰く、「此の語、酷だ父翁松源に似たり」と。

道巖はその事跡が定かでないが、蘇州（江蘇省）出身の禪者であったものらしく、参学辨道に倦むことがなく、すぐれた人物に会うと自らの殻に縛られず、謙つてこれに交わることを信念とした人であったらしい。また道巖は相手を持って成すことが懇ろであったため、多くの俊傑の学徒がその門に参集したとされる。道巖が住持した禅寺としては蘇州呉県の穹窿山福臻禅院や台州（浙江省）黄巖県の瑞巖浄土禅院が知られる。『枯崖漫録』では一〇月一日の開爐日の示衆のことばが載せられており、道巖の是非を絶したことを伝え聞いた普巖が師父崇嶽の示衆のごときであると絶賛したと伝えている。内容からすれば、普巖や道巖が開堂出世

してまもない頃の記事と見られ、道巖の示衆を普巖のもとに届けた門人が存したものであろう。おそらく普巖は崇嶽のもとに在る頃から同じく法諱の下字に「巖」の字を持つ道巖の存在を常に意識していたものと見られ、両者はあたかも松源下の「二巖」とも称すべき存在であったといえよう。

ちなみに道巖は法叔に当たる破庵祖先の『破菴和尚語録』に跋文を寄せていることが知られ、また祖先の法嗣である無準師範を高く評価して台州の瑞巖寺などにおいて門下の第一座に招いている。道巖が示寂した直後には『雲巢和尚語録』も編集刊行されており、師範が法従兄に当たる道巖の語録に跋文を寄せている。おそらく『雲巢和尚語録』には普巖との道交を伝える記事も存したものと見られ、その散逸が惜しまれてならない。

このように道巖は普巖にも勝ると劣らない禅者であったと見られるが、残念ながら日本僧や日本禅林とは直接に関わってはいない。ただ、興味深いのは『仏日庵公物目録』「一、諸祖頂相」に「雲巢へ自賛」という記載が存しており、かつて鎌倉円覚寺の仏日庵に道巖の自賛頂相が将来所蔵されていたことが知られる。おそらく松源派か破庵派の禅者の誰かによって道巖の頂相も日本禅林に将来されたものであろう。

### 参学期における諸禅者との交友

また時期については明確でないが、『運庵和尚語録』「偈頌」には普巖が参学期に詠じたと思われる偈頌として「大藏主号「鏡中」「寄「天目礼書記閩回」「寄「太白幸首座」という諸禅者との交友を伝える三首の作が載せられている。

最初の「大藏主号「鏡中」の偈頌とはつぎのような作である。

大藏主号「鏡中」。

孤光不墮<sup>三</sup>有無間、碧落衝開万象寒。撲破果然亡<sup>二</sup>朕跡、從教大地黑漫漫。

ここにいう大藏主とは大慧派の拙庵徳光の法を嗣いだ鏡中□大のことであり、その道号に因んで普巖が彼に与えた道号頌である。普巖がどこで鏡中大と知り合ったのかは定かでないが、当時、鏡中大は大刹において蔵主の要職に就いていたことが知られ、普巖はこの人の道号に因んで偈頌を詠じているわけである。普巖は「鏡中」という道号に因んで、朕迹を絶した大円鏡中のありようをもつて鏡中大を称えている。ちなみに鏡中大は台州府城の巾子山報恩光孝禅寺や蘇州呉県の虎丘山雲巖禅寺などに住持したことが知られる。<sup>(37)</sup>

第二番目の「寄<sup>三</sup>天目礼書記閩回<sup>一</sup>」の偈頌とはつぎのようなものである。

寄<sup>三</sup>天目礼書記閩回<sup>一</sup>。

爪牙消息露<sup>三</sup>三山、勸破曾郎想不<sup>レ</sup>難、一嘯帰来千嶂曉、菸菟不<sup>レ</sup>似<sup>三</sup>旧時斑。

ここにいう天目礼書記とは、普巖と同じく崇嶽の法を嗣いだ松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）のことであり、崇嶽のもとかで書記を勤めていた文礼が閩すなわち福州（福建省）の地（三山）から帰つて来たのに際し、普巖が寄せた作である。文礼は杭州臨安県の阮氏の出身で、明州阿育王山の拙庵徳光らに参学した後、饒州（江西省）の東湖薦福禅寺などで崇嶽に参じて法を嗣いでいる。文礼はさらに諸地に祖塔を巡礼した後、建康府（江蘇省）上元県東北の蒋山太平興国禅寺において大慧派の浙翁如琰（仏心禅師、一一五一—一二三五）のもとで首座として分座説法している。その間、おそらく普巖は崇嶽のもとで年少の文礼とも交友を結び、両者は互いに道交を深めていたのであろう。

第三番目の「寄<sup>三</sup>太白幸首座<sup>一</sup>」の偈頌とはつぎのような作である。

寄<sup>三</sup>太白幸首座<sup>一</sup>。

糞火堆頭潦倒身、且無<sub>レ</sub>花鳥闌<sub>レ</sub>芳春、口辺白醜心如鏡、甘作<sub>レ</sub>叢林不義人。

この偈頌は明州鄞県の太白峰すなわち天童山景德禪寺で首座を勤めていた□幸という禪者に与えたものであるが、幸首座が如何なる人物なのかはいまだ明確にしていない。あるいは普巖が希夷とともに天童山の無用淨全に参学していた頃に関わった禪者かも知れないが、大利であった天童山の首座に就いたほどの人物で普巖とも交友を結んでいたのであれば、それなりにすぐれた器量を持ち合わせていたものと見られる。

このように限られた偈頌ではあるが、普巖が大慧派の鏡中大や同門に当たる滅翁文礼らと道交を結んでいた様子が知られる。とりわけ、かつて文礼には『天目礼禪師語録』が編纂されたことが伝えられ、文礼の法嗣である冰谷□衍・石林行鞏・横川如珙・雪蓬慧明らが普巖の法嗣の虚堂智愚と関わり深いことから、『天目礼禪師語録』にもおそらく文礼と普巖との交友を伝える偈頌などが収められていたものと推測される。<sup>(38)</sup>

## 母の死と四明の運庵

ところで、「運菴禪師行実」によれば、普巖が松源崇嶽のもとで参禅学道した動向について、

普在<sub>レ</sub>靈隱、分座接納、以<sub>レ</sub>母故<sub>レ</sub>回<sub>レ</sub>郷。北磻簡公作<sub>レ</sub>長句<sub>レ</sub>唱出、叢林至<sub>レ</sub>今咏<sub>レ</sub>之。寧宗嘉泰二年壬申秋八月、松源臨<sub>レ</sub>示寂、以<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>伝白雲端禪師法衣再頂相<sub>レ</sub>授与。師却<sub>レ</sub>衣受<sub>レ</sub>像。倩<sub>レ</sub>破菴師叔<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>贊、江湖伏<sub>レ</sub>其識<sub>レ</sub>矣。師之兄喬仲、創<sub>レ</sub>菴于四明、即運菴也。請<sub>レ</sub>師居<sub>レ</sub>之。台州般若北磻簡公、製<sub>レ</sub>勸請疏。

という記事が載せられている。最初に普巖が靈隱寺の崇嶽のもとで首座（第一座）として分座説法して学人を接化したことが記されているが、この点は東陽英朝も『宗門正燈録』にて「松源後住<sub>レ</sub>靈隱、請<sub>レ</sub>師首<sub>レ</sub>衆」と記しており、普巖が崇嶽の請により靈隱寺の首座として大衆（修行僧）を指導したとする。一時期、普巖

は崇嶽のもとを辞して諸山歴遊などをなしたものの、再び崇嶽のもとに戻って随侍したことになる、崇嶽が杭州の靈隱寺に陞住した後、首座として分座説法して崇嶽の接化を支えていたことが知られる。ただし、『松源和尚語録』巻下「賛仏祖」には崇嶽が詠じた頂相の自賛がいくつか載せられているが、残念ながら普巖に付与したものは存していない。<sup>40</sup>

ついで普巖が母の死を聞いて郷里に帰ったことが記されており、帰郷に際して大慧派の北磻居簡が長編の詩句を作って弔い（唁い）の意を示したことが伝えられている。実際に居簡の法を嗣いだ物初大観（一一〇一—一二六八）が編集した『北磻外集』「偈頌」には、つぎのような興味深い偈頌が収められている。

巖首座母死、帰自靈隱、以此唁之（運菴和尚）。

望断<sub>二</sub>靈山<sub>一</sub>消息絶、不<sub>三</sub>復倚<sub>レ</sub>門吹<sub>三</sub>白髮<sub>一</sub>、或従<sub>レ</sub>西向問<sub>二</sub>帰程<sub>一</sub>、臘月蓮花随<sub>レ</sub>歩発。靈山上首翻<sub>三</sub>途轍<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>喪不<sub>レ</sub>哀非<sub>二</sub>曠達<sub>一</sub>、回<sub>レ</sub>首一會儼然在、將<sub>三</sub>此深心<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>塵刹<sub>一</sub>。

この七言八句の偈頌が「運菴禪師行実」にいう居簡が詠じた「長句」に当たるものである。この点はずでに東陽英朝も『宗門正燈録』巻一〇の「湖州道場山運庵普岩禪師」の章において、

北澗外集有<sub>二</sub>岩首座母死<sub>一</sub>、帰自靈隱、之偈云、望断<sub>二</sub>靈山<sub>一</sub>消息絶、不<sub>三</sub>復倚<sub>レ</sub>門吹<sub>三</sub>白髮<sub>一</sub>、或従<sub>レ</sub>西向問<sub>二</sub>帰程<sub>一</sub>、臘月蓮花随<sub>レ</sub>歩発。靈山上首翻<sub>三</sub>途轍<sub>一</sub>、臨<sub>レ</sub>喪不<sub>レ</sub>哀非<sub>二</sub>曠達<sub>一</sub>、回<sub>レ</sub>首一會儼然在、將<sub>三</sub>此深心<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>塵刹<sub>一</sub>。

と指摘している。靈山の上首すなわち靈隱寺の崇嶽のもとで首座を勤めていた普巖が母の死を知って首座の職位を辞し、弔いのために四明に帰省するのに際し、居簡が饞別に送った作にほかならない。普巖が靈隱寺の崇嶽のもとで首座を勤めていたのは四〇代後半の頃に当たり、しかも普巖が杜氏の嫡男でなかった点を考慮すれば、このとき母親はすでに七〇歳をかなり越えていたものと見られる。

しかも同じく北磻居簡は『北磻外集』「偈頌」において、

送<sub>三</sub>巖運菴婦<sub>二</sub>四明<sub>一</sub>（松源以<sub>レ</sub>法衣・頂相授<sub>レ</sub>巖、却<sub>レ</sub>衣受<sub>二</sub>頂相<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>破菴贊<sub>一</sub>）。

大庾嶺頭提<sub>レ</sub>不起、盧老蒙山俱失利、後人不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>革<sub>二</sub>前非<sub>一</sub>、通相欺誑真兒戲。老巖不<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>靈山記<sub>一</sub>、颺<sub>三</sub>下金襴<sub>二</sub>如<sub>二</sub>弊屣<sub>一</sub>、直饒滅<sub>二</sub>却不<sub>レ</sub>伝底<sub>一</sub>、争似<sub>レ</sub>莫<sub>二</sub>遭<sub>レ</sub>渠鈍置<sub>一</sub>。破菴一語如<sub>二</sub>雷霆<sub>一</sub>、聾者有<sub>レ</sub>耳那得聞。若謂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞越<sub>二</sub>情量<sub>一</sub>、蹉<sub>二</sub>過堂<sub>一</sub>堂大人相<sub>一</sub>。

という偈頌も残しており、この偈頌の存在もすでに英朝が『宗門正燈録』で、

又有<sub>二</sub>送<sub>二</sub>岩運菴婦<sub>一</sub>四明<sub>一</sub>之偈<sub>上</sub>云、大庾嶺頭提<sub>レ</sub>不起、盧老蒙山俱失利、後人不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>革<sub>二</sub>前非<sub>一</sub>、通相欺誑真兒戲。老巖不<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>靈山記<sub>一</sub>、颺<sub>三</sub>下金襴<sub>二</sub>如<sub>二</sub>弊屣<sub>一</sub>、直饒滅<sub>二</sub>却不<sub>レ</sub>伝底<sub>一</sub>、争似<sub>レ</sub>莫<sub>二</sub>遭<sub>レ</sub>渠鈍置<sub>一</sub>。破菴一語如<sub>二</sub>雷霆<sub>一</sub>、聾者有<sub>レ</sub>耳那得聞。若謂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞越<sub>二</sub>情量<sub>一</sub>、蹉<sub>二</sub>過堂堂大人相<sub>一</sub>。題注云、松源以<sub>レ</sub>法衣頂相授<sub>レ</sub>岩、却<sub>レ</sub>衣受<sub>二</sub>頂相<sub>一</sub>、情<sub>二</sub>破菴贊<sub>一</sub>。

と指摘しているところである。居簡の伝えるところによれば、崇嶽が自らの法衣と頂相を普巖に授けようとした際、普巖は法衣を辞退し、ただ頂相のみを受け取ったとされる。居簡は六祖慧能（盧行者、大鑑禪師、六三八―七二三）と蒙山慧明（道明、四品將軍）との大庾嶺の故事を引いており、靈山の記とはここでは靈隱寺の崇嶽が普巖に法衣を授与せんとしたことをいう。しかも普巖はこのとき崇嶽の頂相に対して贊を法叔の破庵祖先に請うたとされ、居簡の偈頌にも「破菴の一語、雷霆の如し」とあるから、居簡も祖先の贊を実際に目の当たりにしていたものらしい。ただし、残念ながら破庵祖先の『破菴和尚語録』を通して法姪の普巖が請うたような崇嶽に対する祖贊のことは載せられていない。<sup>(4)</sup>

物初大観が本師の居簡の伝記を記した『物初贖語』巻二四「北磻禪師行状」によれば、明州鄞県の阿育王山広利禪寺で東庵（東堂）の拙庵徳光や住持の秀巖師瑞（？―一二三三）に参学した記事につづいて、

已而之<sub>二</sub>靈隱<sub>一</sub>見<sub>二</sub>松源巖<sub>一</sub>・息菴観、観復命掌<sub>レ</sub>記。嘉泰三、出<sub>二</sub>世于台之般若<sub>一</sub>、瓣香供<sub>二</sub>拙菴<sub>一</sub>。

と記されており、嘉泰三年（一二〇三）に台州天台県西北二〇里の般若禪院（護国寺）に出世開堂する以前、

居簡は靈隱寺に赴いて晩年の崇嶽に参じており、さらに崇嶽の後席を継いだ楊岐派の息庵達觀（一一三八—一二二二）のもとでも書記を勤めていることが知られる。<sup>42</sup> おそらく居簡は靈隱寺の崇嶽のもとで普巖と道交を結び、縁に応じて偈頌を認めているのであろう。居簡は普巖が母の訃報を聞いて靈隱寺の崇嶽のもとを辞去する際にもその場に居合わせ、先の「巖首座母死、帰自靈隱、以此唁之（運庵和尚）」と「送巖運菴帰四明」という二首の偈頌を詠じて直接に普巖に書き与えたのであろう。

その後、俗兄の杜仲喬（喬仲とも）が創建した郷里明州（四明）の庵に居し、これを運庵と称したことから、普巖は運庵または運菴を道号として使用するようになったものらしい。「運菴禪師行実」によれば、

師の兄喬仲、菴を四明に創す、即ち運菴なり、師を請して之れに居せしむ。台州般若の北磻簡公、勸請の疏を製すとあり、台州天台県西北二〇里の般若禪院（護国寺）の住持であつた北磻居簡が勸請の疏文を製したと記している。この疏文は幸いに『北磻文集』卷八「疏」に、

巖少瞻住其兄杜仲喬菴一疏。

伯氏吹<sub>レ</sub>埴、仲氏吹<sub>レ</sub>篋、静聞<sub>レ</sub>逸響。楊氏為<sub>レ</sub>我、墨氏兼愛、横制<sub>レ</sub>頽瀾。把<sub>レ</sub>茆寄<sub>レ</sub>罔極之思、一枝託<sub>レ</sub>勸飛之翼。恭惟某人、曾分<sub>レ</sub>半座、略露<sub>レ</sub>一斑。將軍<sub>レ</sub>疾虎而不<sub>レ</sub>侯、声名益振、諸子索<sub>レ</sub>車而出<sub>レ</sub>戸、童穉何知。穉釋去<sub>レ</sub>父母之邦、落落掃<sub>レ</sub>箕裘之業。平生嫌<sub>レ</sub>仏不<sub>レ</sub>做、袖<sub>レ</sub>手藏<sub>レ</sub>鋒、行止非<sub>レ</sub>人所<sub>レ</sub>能、随<sub>レ</sub>機応<sub>レ</sub>變。

として載せられており、これは普巖がその俗兄である杜仲喬の草庵すなわち運庵に居住するのに際して居簡が寄せた疏文である。いま、これを書き下してみるならば、つぎのようにならう。

巖少瞻が其の兄杜仲喬の菴に住するの疏。

伯氏は埴を吹き、仲氏は篋を吹き、静かに逸響を聞く。楊氏は我れが為めにし、墨氏は兼愛し、横に頽瀾を制す。茆を把りて極まり罔きの思いを寄せ、一枝もて飛ぶに勸むの翼を託す。恭しく惟るに某人、曾て半座を分かち、略

は一斑を露わす。將軍は虎を舐いて侯まもせずして、声名は益ます振り、諸子は車を索めて戸を出で、童穉、何ぞ知らん。穉穉として父母の邦を去り、落落として箕裘ききゅうの業を掃う。平生は仏を嫌いて做さず、手を袖にして鋒を藏す。行止は人の能くする所に非ず、機に随い変に応ず。

問題なのは普巖の実兄の名であつて、「運菴禪師行実」では杜喬仲とあるのに対し、『北磻文集』の疏では杜仲喬と記されていて相違している。何れを是とするかは問題もあるが、より確実な『北磻文集』の杜仲喬とすべきであろう。伯氏は杜仲喬を指して頃は薰で土笛のこと、仲氏は普巖を指して篋は竹で作った横笛のことであつて、長兄と次弟が親しく笛を演奏し合っているさまに準えている。伯は長兄であり、仲は次とか二番目の意であるから、杜仲喬が家を継いで父母の業を担った長兄であり、普巖は出家して父母の邦を去った次男であつたことにならうか。この偈頌では居簡は普巖を字の少瞻をもつて称しており、靈隱寺の首座として半座を分かつて後、運庵に居住するのを拝請している。

一方、別に居簡は『北磻外集』「偈頌」においても、

寄<sub>レ</sub>巖運菴。

報慈打底錯流通、拳<sub>レ</sub>家大小都詐<sub>レ</sub>聾、人人詐得十分似、檢点将来牛馬風。阿師不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>者保社<sub>一</sub>、真尚不<sub>レ</sub>存那忍詐、正伝若在<sub>二</sub>瞎驢辺<sub>一</sub>、開<sub>レ</sub>眼堂堂誤<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。

という作を残しており、親しく運庵に居住する普巖に偈頌を寄せている。この偈頌も普巖に対する貴重な史料であり、書き下してみるならば、およそつぎのごとくならう。

巖運菴に寄す。

報慈は打底から錯つて流通し、家を挙げて大小都て聾を詐る。人人、詐り得て十分似たり、檢点し將ち來たる牛馬の風。阿師は者の保社に入らず、真は尚お存せず、那ぞ詐りを忍ばん。正伝、若し瞎驢辺に在らば、眼を開いて



堂堂として天下を誤らす。

居簡は普巖を単に「巖運菴」と称するのみで住地などを記していないことから、おそらく普巖が諸刹に住持する以前、いまだ運庵に居住していたときに寄せた作であろうと推測される。報慈とは晩年に顕親報慈禅寺の開山となった松源崇嶽（老聶翁）のことであり、最後の二句は臨濟義玄（慧照禅師、？―八六六）に因む「瞎驢辺滅却」の故事を引き、普巖が崇嶽の正伝を真に得たことを称えたものである。<sup>(44)</sup>したがって、この「寄巖運菴」の偈頌は崇嶽が顕親報慈寺の住持を経て示寂した後に、居簡が普巖に寄せた作と見られる。

### 鎮江府の大聖普照禅寺への出世

開禧二年（一二〇六）三月に普巖は鎮江府（江蘇省）の本府（丹徒県）に存した寿邱山（寿丘山）の大聖普照禅寺に開堂出世している。「運菴禅師行実」には、

開禧二年丙寅春三月、師在蘇臺宝華、受鎮江大聖請出世。拈衣云、箇様皮毛、千化万変、黄梅鷲嶺、漫自流传。後代児孫、可貴可賤。陸座拈香、祝聖畢。次拈香云、此香堪笑又堪悲。剛把愁腸說向誰、冶父山前曾落節、千鈞之重一毫釐。尽情拈出供養前住臨安府景德靈隱禅寺松源老師大和尚、用酬法乳之恩。

と記されており、このとき普巖は蘇州呉県西南三〇里の宝華山智顕禅院（宝華寺）において大聖寺入院の招請を受けたことが知られる。<sup>(45)</sup>おそらく普巖はこの頃には明州の運庵を離れて蘇州の宝華寺に入り、ときの住持の依頼で何らかの職位を勤めていたものと見られる。

乾隆一五年（一七五〇）に刊行された『鎮江府志』卷二〇「寺観」の「丹徒県」によれば、寿丘山大聖普照寺について、

普照寺。在郡城寿邱山巔。宋高宗故宅也。至陳叔<sub>二</sub>寺名<sub>一</sub>慈和、宋号<sub>二</sub>延慶。先是泗州有<sub>二</sub>僧伽塔。紹興中、寓建塔院於此山之上方、以奉<sub>二</sub>僧伽像、名曰<sub>一</sub>普照。元僧祖滿、創<sub>二</sub>楚山閣<sub>一</sub>（趙孟頫書額）。至正中、西竺僧法喜、以音吐<sub>二</sub>洪暢、賜<sub>二</sub>号<sub>一</sub>円音大師、為三十六路講師、被<sub>二</sub>命<sub>一</sub>至<sub>二</sub>寺、講<sub>二</sub>梵書、築<sub>二</sub>半山亭、扁曰<sub>一</sub>開演長生御講。明初、郡守愈淨能、命<sub>二</sub>僧曉堂<sub>一</sub>大加<sub>二</sub>修飾。正德辛未、監察御史謝琛、属<sub>二</sub>推官史魯<sub>一</sub>分<sub>二</sub>寺。後隙地建<sub>二</sub>宗忠簡公祠<sub>一</sub>、寺今廢。

と記されている。大聖普照寺は鎮江府丹徒県（郡城）の寿邱山に存しており、一時期、南宋の皇帝高宗（趙構、字は德基、一一〇七—一一八七、在位は一一二七—一一六二）の故宅であったとされる。古く南朝の陳代に伽藍が創建されて慈和寺と名づけられ、北宋代に延慶寺と号されている。寺内には泗州僧伽（証聖大師、泗州大聖、六二八—七一〇）を祀る僧伽塔が建ち、南宋の紹興年間（一一三一—一一六二）には山の上方に塔院が建てられて僧伽像も奉安されている。普巖は師の崇嶽が示寂して数年を経た開禧二年三月に招請を受けて由緒ある大聖普照寺に開堂出世しているわけである。このとき普巖はすでに五〇歳を越えており、初開堂の年齢としては若干ながら遅い感が存している。

いま、古刊本『運庵和尚語録』の侍者元靖編「鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録」の部分全文にわたって示すならば、およそつぎのようになる。ただし、（ ）内は流布本との異同を示している。

（運庵和尚住鎮江府大聖普照禪寺語録）  
鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録。

侍者元靖編。

(1) 師開禧二年三月初八日、平江府宝華山受<sub>レ</sub>請入<sub>レ</sub>寺。

三門。豁<sub>二</sub>開戶牖<sub>一</sub>、直出直入、鮎魚上<sub>二</sub>竹竿<sub>一</sub>、俊鶴越<sub>レ</sub>不及。

泗洲殿。出<sub>二</sub>現楊州<sub>一</sub>、坐<sub>二</sub>斷寿丘<sub>一</sub>、脚跟不<sub>レ</sub>点<sub>レ</sub>地、贏得<sub>二</sub>一身愁<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>是冤家<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>聚<sub>レ</sub>頭。  
方丈。日面月面、霹靂閃電、直下來也、急著<sub>レ</sub>眼看。

拈<sub>レ</sub>帖。馬頭回、牛頭没、一字入<sub>二</sub>公門<sub>一</sub>、九牛車不<sub>レ</sub>出。

拈衣。箇樣皮毛、千化万變、黃梅鷲嶺、謾自流傳。後代兒孫、可貴可賤。

法座。坐而不<sub>レ</sub>住、住而不<sub>レ</sub>坐。滴水生<sub>レ</sub>冰、因<sub>レ</sub>風吹<sub>レ</sub>火。

陞座拈香。祝聖畢、次拈香云、此香堪<sub>レ</sub>笑又堪<sub>レ</sub>悲。剛把<sub>レ</sub>愁腸說<sub>レ</sub>向誰。冶父山前曾落節、千鈞之重一毫釐。尽情

拈出、供<sub>レ</sub>養前往<sub>レ</sub>臨安府景德靈隱禪寺<sub>レ</sub>松源老師大和尚、用酬<sub>レ</sub>法乳之恩。遂就<sub>レ</sub>座。甘露諸庵肇和尚、白槌云、法

筵龍象衆、當<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>第一義。師云、鼓聲未<sub>レ</sub>動、此座未<sub>レ</sub>陞、好箇古<sub>レ</sub>樣子、莫<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>特別宜底麼。僧問、橫担<sub>レ</sub>丈、縱<sub>レ</sub>橫虎穴魔宮、倒握<sub>レ</sub>吹毛、直下殺<sub>レ</sub>仏殺<sub>レ</sub>祖、正<sub>レ</sub>麼時如何。師云、崖崩石裂。進云、今日小出大遇去也。師

云、勾賊破<sub>レ</sub>家。進云、師唱<sub>レ</sub>誰家曲、宗風嗣<sub>レ</sub>阿誰。師云、駟事未<sub>レ</sub>去、馬事到來。進云、莫<sub>レ</sub>是松源の子東山正伝

麼。師云、此去西天十萬程。進云、向上還有<sub>レ</sub>事也無。師云、一東一冬、叉手当胸。進云、学人不<sub>レ</sub>會。師云、江西

馬大師、南岳讓和尚。僧禮拜。師云、今日失利。

乃云、衝<sub>レ</sub>開碧落、万象平沈、喝<sub>レ</sub>散白雲、古今獨露。全彰<sub>レ</sub>意氣、不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>躊躇、撒<sub>レ</sub>火飛<sub>レ</sub>星、擡<sub>レ</sub>眸万里。鞠<sub>レ</sub>其趣

向、別有<sub>レ</sub>来端、妙轉綿綿、甚生標格。直得、三世諸仏・六代祖師、只眨<sub>レ</sub>得眼。到<sub>レ</sub>者裏、推不<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>前、拽不<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>後、

世出世間、承<sub>レ</sub>誰恩力。還委悉麼。万方有<sub>レ</sub>慶婦<sub>レ</sub>明主、又見黃河一度清。

復拳、閩王請<sub>レ</sub>羅山陞堂。山歛<sub>レ</sub>衣顧<sub>レ</sub>視大衆、便下座。王近前執<sub>レ</sub>山手云、靈山一会、何異<sub>レ</sub>今日。山云、將謂你

是箇俗漢。師拈云、龍驤虎驟、玉軫珠回、裂<sub>レ</sub>破古今、白珪無<sub>レ</sub>玷。雖然坐致<sub>レ</sub>太平、要且未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>剿絕。擊<sub>レ</sub>扞子。

打<sub>レ</sub>刀須<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>邠州鍊。白槌云、諦觀<sub>レ</sub>佛法、法王法如是。

(2) 当晚小參。衲僧家如<sub>レ</sub>龍似<sub>レ</sub>虎、飄風驟雲、阿誰奈<sub>レ</sub>何得<sub>レ</sub>你。有時拈<sub>レ</sub>一茎草、作<sub>レ</sub>丈六金身、有時吹<sub>レ</sub>一布毛、伝<sub>レ</sub>正

法眼。離<sub>レ</sub>四句<sub>レ</sub>絕<sub>レ</sub>百非、清寥寥<sub>レ</sub>白滴滴、直透<sub>レ</sub>方重関、不<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>青霄外。千手大悲提不<sub>レ</sub>起、爍迦羅眼莫<sub>レ</sub>能窺。至<sub>レ</sub>

於提<sub>レ</sub>一機<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>一境、崖崩石裂、百川倒流、為<sub>レ</sub>仏祖梯航、作<sub>レ</sub>人天榜樣。与麼告報、還有<sub>レ</sub>人檢点<sub>レ</sub>麼。卓<sub>レ</sub>拄杖云、

脚不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>舌。

復拳<sub>レ</sub>琅琊和尚問<sub>レ</sub>法華和尚、近離<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>公案。師拈云、尽謂<sub>レ</sub>琅琊被<sub>レ</sub>法華干戈、爭知<sub>レ</sub>法華被<sub>レ</sub>琅琊勘破。雖然、豈不

見<sub>レ</sub>道、見<sub>レ</sub>利而忘<sub>レ</sub>義、故君子之道鮮矣。

(3) 謝<sub>二</sub>両序<sub>一</sub>上堂。風雲合<sub>通</sub>、龍虎交馳、一進一退、各適<sub>二</sub>其宜<sub>一</sub>。叢林烜赫、慧命流輝、寿丘面皮厚多少、惟許通方便者知。

(4) 上堂。入院數日来、人事鬧闐闐、両脚走如<sub>レ</sub>烟、眼不見<sub>二</sub>鼻孔<sub>一</sub>。大聖国師、聞得出来、道<sub>二</sub>箇希有<sub>一</sub>。何故。過去燈明仏、本光瑞如<sub>レ</sub>此。

(5) 淮東帰上堂。帰来出去、迦葉貧、阿難富。出去帰来、南天台、北五臺。目前包裹、满面塵埃、禹力不<sub>レ</sub>到处、河声流向<sub>レ</sub>西。

(6) 上堂。挙<sub>下</sub>雲見<sub>上</sub>桃花<sub>一</sub>悟道頌、玄沙云、諦当甚諦当、敢保老兄未<sub>レ</sub>徹在。師云、同坑無<sub>二</sub>異土<sub>一</sub>、決定有<sub>二</sub>疎親<sub>一</sub>。

(7) 松源先師忌日拈香。近<sub>レ</sub>之不遜、遠<sub>レ</sub>之則怨。無<sub>レ</sub>義無<sub>レ</sub>情、可<sub>レ</sub>貴可<sub>レ</sub>賤。一年一度雪<sub>二</sub>深冤<sub>一</sub>、畢竟無<sub>レ</sub>人是<sub>レ</sub>的伝。

(8) 上堂。過去諸如来、斯門已成就、一槌擊碎。見<sub>レ</sub>在諸菩薩、今各入<sub>二</sub>円明<sub>一</sub>、風火交煎。未来修学人、当<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>如是<sub>一</sub>住<sub>上</sub>、舌拄<sub>二</sub>上齶<sub>一</sub>。寿丘与<sub>レ</sub>麼道、也是与<sub>レ</sub>賊過<sub>レ</sub>梯。

(9) 琅琊蒙谷和尚至上堂。故人方外来、相見便相悉、倒<sub>レ</sub>指三十年、道義同<sub>二</sub>一日<sub>一</sub>。鐵壁銀山、十分狼藉。直得、同声相應、同氣相求。西河師子在<sub>二</sub>汾州<sub>一</sub>。

(10) 上堂。挙、曹山因僧問、清税孤貧、乞師賑濟。山召云、税闌梨。僧<sub>レ</sub>心諾。山云、青原白家<sub>二</sub>三盞酒<sub>一</sub>、喫了猶道未<sub>レ</sub>沾<sub>レ</sub>唇。師云、毒攻<sub>レ</sub>毒、楔出<sub>レ</sub>楔、老曹山不<sub>二</sub>識警<sub>一</sub>、那裏是<sub>レ</sub>者僧喫<sub>レ</sub>酒<sub>レ</sub>处。

流布本『運菴和尚語録』では鎮江府の大聖普照禪寺における上堂語録が侍者元靖編であるが、表題が「運菴和尚住鎮江府大聖普照禪寺語録」となっており、古刊本とは相違している。『運庵和尚語録』の「鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録」を編集した侍者の元靖については、残念ながら如何なる禅者なのか定かでない。ただ、開禧二年の当時から普巖に随侍していたことになり、もっとも早くから普巖のもとに投じた門人の一人であったと見てよく、侍者として上堂語録の編集に尽力していたことになろう。

普巖は開禧二年三月八日に平江府すなわち蘇州呉県西南三〇里の宝華山(横山)に存する智顛禪院(宝華

寺)において請を受け、鎮江府の大聖普照禪寺に入寺していることが知られる。おそらく普巖はこのときすでに郷里明州の運庵を離れて宝華寺に席を置き、首座など何らかの職位を勤めていたものと推測される。鎮江の大聖寺に到った普巖は晋山開堂の式を挙行しており、入寺法語では最初に三門から法語を始めており、ついで泗洲殿・方丈と歩みを進めている。とりわけ注目されるのは二番目に泗洲殿で法語を唱えている点であって、大聖普照寺には寺名のごとく唐代初期に泗州(江蘇省)治の西の大聖普光王寺(普照寺)に住持した泗洲僧伽を祀る泗洲殿が境内の主要伽藍の一つとして存していたことが知られる。

さらに普巖は方丈での法語を経て、法堂に赴いて拈帖・拈衣の法語を唱え、須弥壇の前に到って法語を唱えている。法座の上つて祝聖の拈香をなした後、嗣承香を炷いて靈隱寺の松源崇嶽の法を嗣いだことを世間に表明している。このとき白槌師を勤めたのが同じ鎮江府丹徒県の北固山甘露禪寺の住持であった同門の諾庵師肇(元肇とも)にほかならない。『枯崖和尚漫録』巻下「諾庵元肇禪師」の項には、

昔諾庵与<sub>レ</sub>開掩室<sub>二</sub>結<sub>レ</sub>伴参<sub>三</sub>松源。源亦不<sub>レ</sub>倦<sub>二</sub>針劄、故<sub>レ</sub>尽<sub>三</sub>其妙、是不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>賢師友<sub>一</sub>也。足<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>後学法<sub>一</sub>。

とあるから、師肇は郷関や俗姓などが定かでないものの、掩室善開と伴を組んで松源崇嶽に参じ、その印可を得たことが知られる。おそらくこの頃から師肇は善開とともに普巖とも交友を結んでいたものであろう。

また(3)「謝<sub>二</sub>両序<sub>一</sub>上堂」と(8)「上堂」では普巖は自らを「寿丘」と称しているが、これは大聖普照禪寺の山号である寿丘山に因む自称にほかならない。(4)「上堂」では「入院数日来、人事鬧関関、両脚走如<sub>レ</sub>烟、眼不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>鼻孔<sub>一</sub>」と述べて住持として慌ただしい日々を送っていることを門下に告げている。(5)「淮東帰上堂」とは普巖が勧募のために淮東すなわち淮水以东の安徽・江蘇の諸地に赴き、檀信の施物を得て帰山した際になされたものであり、ここでも満面に塵埃を浴びながら勧進に邁進してきたことを述べている。(7)「松源先師忌日拈香」は先師の松源崇嶽の忌日(八月四日)になされたものである。(9)「琅琊蒙谷和尚至上堂」

は滁州（安徽省）西南一〇里の瑯琊山（琅琊山）開化禪寺（瑯琊寺）の住持であつた蒙古和尚が大聖普照寺の普巖のもとに到つて旧交を温めた際になされた上堂である。上堂の内容からすると、普巖と蒙古は三〇年来の旧知であつたことが窺われるものの、残念ながら蒙古が如何なる系統に属しているのか、法諱も定かでない。如何なる素性の禪者であつたのかなども明確でない。

一方、『運庵和尚語録』の「法語」には、守徳という禪人に示した法語が載せられている。

示<sub>二</sub>守徳禪人<sub>一</sub>。

仏祖之道、如<sub>下</sub>大日輪昇<sub>二</sub>于虚空<sub>三</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>燭。只為<sub>二</sub>情生智隔想変体殊<sub>一</sub>故、勞<sub>二</sub>我黃面老師<sub>一</sub>、四十九年東説西説、末後拈華微笑。至<sub>二</sub>於西天此土祖祖聯<sub>一</sub>芳燈燈分<sub>レ</sub>焰、無<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>提<sub>二</sub>持箇事<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>妨透頂透底、截鉄斬<sub>レ</sub>釘。可<sub>レ</sub>謂、一盲引<sub>二</sub>衆盲<sub>一</sub>、相牽入<sub>二</sub>火坑<sub>一</sub>。若是箇殺<sub>レ</sub>仏殺<sub>レ</sub>祖底漢、便乃逆風揚塵、衝波激浪、朝游<sub>二</sub>羅浮<sub>一</sub>、暮帰<sub>二</sub>檀特<sub>一</sub>。羅籠不<sub>二</sub>肯住<sub>一</sub>、呼喚不<sub>レ</sub>回<sub>レ</sub>頭、於<sub>二</sub>仏界魔界刀山火聚<sub>一</sub>、出沒變通、自由自在。滅<sub>二</sub>却臨濟正宗<sub>一</sub>、瞎<sub>二</sub>却正法眼藏<sub>一</sub>。似<sub>二</sub>与麼<sub>一</sub>操<sub>レ</sub>志立<sub>レ</sub>身、似<sub>二</sub>与麼<sub>一</sub>出家行脚、似<sub>二</sub>与麼<sub>一</sub>提<sub>二</sub>持正令<sub>一</sub>也。只救<sub>二</sub>得一半<sub>一</sub>。況或三咬兩咬咬不<sub>レ</sub>断、依前打<sub>二</sub>入骨董袋裏<sub>一</sub>去。非<sub>二</sub>唯埋<sub>二</sub>没自己<sub>一</sub>、亦乃鈍<sub>二</sub>置先宗<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>恠<sub>二</sub>寿丘多口<sub>一</sub>、你自冷地相度。

この法語の中で普巖は「寿丘の多口を恠しむこと莫かれ」と述べているから、これも寿丘山の大聖普照寺でなされた法語であることが知られる。禪人の守徳についてもその素性は定かでないが、大聖普照寺で参随していることから、最初期の参学門人ということになる。法語の内容からすると、守徳は参学がかなり進み、普巖からそれなりに期待されていたものようであるが、惜しむらくはその後の動向が伝えられていない。

同じく『運庵和尚語録』の「法語」には、

示<sub>二</sub>龍華会首韋徳通<sub>一</sub>。

抱道之士、根器不<sub>レ</sub>同、拳措有<sub>レ</sub>異、凡<sub>出</sub>言吐<sub>吐</sub>レ氣、千聖莫<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>趣向<sub>一</sub>。縦是釈迦弥勒、亦難<sub>二</sub>近傍<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>於瞥<sub>二</sub>転生死

去來・淨穢兩境・逆順是非・塵勞煩惱、転見力量弥著、確乎其不可<sub>レ</sub>拔。豈止虚而靈空而妙。如<sub>レ</sub>青天轟<sub>レ</sub>一箇霹靂、擬<sub>レ</sub>擡<sub>レ</sub>頭早覺<sub>レ</sub>他蹤跡<sub>レ</sub>不得。蓋命根一断、到<sub>レ</sub>大安樂之場<sub>レ</sub>、了無<sub>レ</sub>餘事。日銷<sub>レ</sub>万兩黄金、亦未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>三分外。喚<sub>レ</sub>什麼<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>涅槃般若、喚<sub>レ</sub>什麼<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>直指单伝、喚<sub>レ</sub>什麼<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>生死根塵、喚<sub>レ</sub>什麼<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>天堂地獄。大咲一声、天回地転。若如<sub>レ</sub>是操履、方有<sub>レ</sub>少分相應。稍胸中礙膺之物不<sub>レ</sub>除、妄相陞<sub>レ</sub>沈不<sub>レ</sub>歇、要<sub>レ</sub>擬<sub>レ</sub>向上宗乘、如<sub>レ</sub>掉<sub>レ</sub>棒打<sub>レ</sub>月。若欲<sub>レ</sub>易会、一発打<sub>レ</sub>辨精神、擯<sub>レ</sub>却旧時窠窟、一躍龍門、飛騰雲漢、至<sub>レ</sub>不可說不可說香水海、那边猶有<sub>レ</sub>餘地、豈止敵<sub>レ</sub>生死者哉。不見、蟾首座問<sub>レ</sub>洞山、仏眞法身、猶<sub>レ</sub>虚空、応物現<sub>レ</sub>形、如<sub>レ</sub>水中月、作<sub>レ</sub>麼生説<sub>レ</sub>箇<sub>レ</sub>底道理。山云、如<sub>レ</sub>驢<sub>レ</sub>覷<sub>レ</sub>井。蟾云、是則是、只道<sub>レ</sub>得八成。山云、首座作<sub>レ</sub>麼生。蟾云、如<sub>レ</sub>井覷<sub>レ</sub>驢。看他古德漆桶相挨、便乃<sub>レ</sub>生風起<sub>レ</sub>草。向<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>口以前、捏<sub>レ</sub>定咽喉、則彼此有<sub>レ</sub>光、堪<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>從上爪牙後世龜鑑<sub>レ</sub>者也。余丙寅歲季秋、來掃<sub>レ</sub>洒是刹。適<sub>レ</sub>邊事未<sub>レ</sub>寧、米価湧貴、而会中供<sub>レ</sub>辨米麦<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>輟。蓋会首処士韋德通、正因出家、正因修行、正因操履、留<sub>レ</sub>心於法門<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>年、補<sub>レ</sub>於常住<sub>レ</sub>者多矣。晚年之間、究<sub>レ</sub>竟向上一段光明、為<sub>レ</sub>敵<sub>レ</sub>生死<sub>レ</sub>照<sub>レ</sub>破昏暗<sub>レ</sub>超<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>三際<sub>上</sub>。乃是不<sub>レ</sub>虚<sub>レ</sub>出家之志、袖<sub>レ</sub>軸炷<sub>レ</sub>香、求<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>警策。書<sub>レ</sub>此昭示云。

という龍華会の首処士(会首)を勤めた韋德通という人に示した法語が収められているが、そこに「余、丙寅の季秋に、来たりて是の刹を掃洒す」と自ら述べている。丙寅の年とは普巖が大聖普照寺に入寺した開禧二年のことであり、この法語も大聖普照寺でなされたものであることが判明する。したがって、普巖が蘇州の宝華寺で請を受けたのは開禧二年三月八日のことであつたわけであるが、実際に住持として大聖普照寺に入院したのはその年の季秋九月のことであつた事実が確かめられる。龍華会とは弥勒菩薩に因む龍華三会のことであり、おそらく大聖普照寺の寺内に弥勒菩薩を祀る堂宇が存し、そこでなされた仏事法会であつたものと見られる。首処士の韋德通についてはその事跡が全く知られないが、抱道の士として仏法に深く帰依した世俗の徒で、普巖の信認も厚かつたことが窺われる。

いずれにせよ、普巖が大聖普照寺に住持していた期間が具体的にどれほどであつたのかは、『運庵和尚語

録』の「鎮江府大聖普照禪寺運庵和尚語録」がきわめて限られていることから、上堂の配列からでは明確に辿れないのが実情である。ただ、普巖が「示龍華會首韋德通」において入寺した時期を述懐していることを考慮すれば、比較的長く大聖普照寺の住持を勤めていたものと推測される。

### 真州天寧報恩光孝禪寺への入寺

ついで普巖は真州（江蘇省）儀徵県の天寧報恩光孝禪寺（天寧万寿禪寺）に住持しているが、「運菴禪師行実」には単に「移真之天寧・湖之道場」と記されているにすぎず、その間の事情については定かでない。清の光緒十六年（一八九〇）に刊行された『重修儀徵県志』卷二〇「祠祀志〈祠寺院觀庵〉」の「寺」によれば、真州の天寧報恩光孝禪寺について、

天寧万寿禪寺。申志云、在<sub>二</sub>眞治東南澄江橋西。始<sub>二</sub>自唐景龍三年、泗州僧建<sub>三</sub>仏塔七級、以鎮<sub>二</sub>白沙、創<sub>三</sub>永和庵於塔後。宋崇寧中、僧道堅復建、賜<sub>二</sub>名報恩光孝禪寺。政和中、改<sub>三</sub>天寧禪院。後有<sub>二</sub>楞伽庵、蘇子瞻嘗於此写<sub>レ</sub>経故名。西有<sub>レ</sub>井、名<sub>二</sub>慧日泉。南渡後、迭<sub>レ</sub>経<sub>二</sub>兵火、寺塔俱燬。明洪武、僧法剛復建。永樂初、智韶繼葺<sub>二</sub>宝塔、道常增<sub>二</sub>建殿堂塔廊。嘉靖中、僧会復衡重修。增<sub>二</sub>飾重門、巍<sub>二</sub>然叢林之勝。嘉靖四十四年、浮<sub>二</sub>図災。僧法成・法晟、重<sub>二</sub>加<sub>レ</sub>修造、易<sub>二</sub>以<sub>二</sub>金錫。後漸頽落。順治間、衆商江漢吉等重修。

と簡略ながら変遷が伝えられている。真州は長江を挟んで南京（建康府）の北岸に位置し、現今の南京市六合県に当たっている。この寺は真州儀徵県治東南の澄江橋の西に存したとされ、唐の景龍三年（七〇九）に泗州の僧が七層の仏塔を建て、永和庵を塔の後に創建したことに始まる。北宋の崇寧年間（一一〇二―一一〇六）に僧道堅が復建し、報恩光孝禪寺の名を賜っており、政和年間（一一一三―一一一八）に天寧禪院と改め



られている。道堅については定かでないが、あるいは臨濟宗の大滄慕喆（真如禪師、？—一〇九五）の法を嗣いだ靈泉道堅のことを指しているのかも知れない。天寧報恩光孝禪寺の後方には蘇軾（字は子瞻、東坡居士、一〇三六—一一〇二）が写経した楞伽庵があり、また寺の西には慧日泉という井戸が存したことが知られる。北宋末期から南宋初期の頃には曹洞宗の宏智正覺の高弟である長蘆道琳（道林）が住持している。宋の南遷して以降、兵火によって寺塔がともに焼失し、明の洪武年間（一三六八—一三九八）に僧法剛によって復建されたと伝えられるが、南宋代にも伽藍が維持されていたことは普巖の記事などによって判明するから、堂宇は辛うじて存続して禪寺として機能していたものであろう。

ところで、『運庵和尚語録』の「真州報恩光孝禪寺語」は侍者の智能によって編集されているが、やはり智能についてもその事跡が定かでない。ただ、普巖には虚堂智愚のほかに智密の名も知られることから、普巖が門下の学人に「智」の一字を系字として与えているものと見られ、智能も普巖の得度を受けた小師であったと推測される。

古刊本『運庵和尚語録』の「真州報恩光孝禪寺語」についてもその全文を挙げておくことにしたい。

真州報恩光孝禪寺語<sub>(語録)</sub>

侍者智能編。

(1) 拈帖。令不<sub>レ</sub>虚行、箭不<sub>レ</sub>虚発、<sub>(備)</sub>倘或躊躇、二九十八。

(2) 歳旦上堂。举、僧問<sub>二</sub>鏡清<sub>一</sub>、新年頭還有<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>也無。清云、有。僧云、如何是新年頭仏法。清云、元正啓祚、万物

咸新。僧云、謝<sub>二</sub>師答話<sub>一</sub>。清云、鏡清失利。又僧問<sub>二</sub>明教<sub>一</sub>、新年頭還有<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>也無。教云、無。僧云、年年是好年、

日日是好日、為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>却無。教云、張公喫<sub>レ</sub>酒李公醉。僧云、老老大大、龍頭蛇尾。教云、今日失利。師拈云、有

与<sub>レ</sub>無、非<sub>二</sub>意氣<sub>一</sub>、明教鏡清、二俱失利。有<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>報恩新年頭還有<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>也無<sub>一</sub>、拈<sub>二</sub>拄杖<sub>一</sub>便打。何故。<sub>(総)</sub>総不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>野

狐精見解<sub>一</sub>。

(3) 上堂。挙<sup>ナシ</sup>黄檗示<sup>樂</sup>衆云、汝等諸人、尽是墮酒糟漢公案。師拈云、洞門無<sup>ナシ</sup>鑰、劍閣崔嵬、風露高寒、且非<sup>ナシ</sup>人世。是則是、天上人間知幾幾、者僧一問不<sup>ナシ</sup>將來、黄檗通身是泥水。

(4) 冬至上堂。卓<sup>ナシ</sup>拄杖云、一陽生也、樹頭驚起双双魚、石上迸出長長筍。靠<sup>ナシ</sup>拄杖云、即日伏惟、兩序高人、現前清衆、履<sup>ナシ</sup>茲長至、倍膺<sup>ナシ</sup>馘穀。喝一喝。俗氣未<sup>ナシ</sup>除。

(5) 上堂。季春漸暄、鳥啼花笑。恒河沙數見聞覺知、悉皆了了。因<sup>ナシ</sup>甚西天老凍膿、綵被<sup>拵</sup>声色転却、致<sup>ナシ</sup>令後代兒孫一箇箇擡<sup>ナシ</sup>脚不起。且道、利害在<sup>ナシ</sup>什麼處。金屑雖<sup>ナシ</sup>貴、落<sup>ナシ</sup>眼成<sup>ナシ</sup>翳。

(6) 上堂。一葉落天下秋、一塵起大地収。臨濟掌<sup>ナシ</sup>黄檗、南泉喚<sup>ナシ</sup>趙州。開<sup>ナシ</sup>口不<sup>ナシ</sup>在<sup>ナシ</sup>舌頭上、夜濤催<sup>ナシ</sup>發<sup>ナシ</sup>海南舟。

真州の天寧報恩光孝禪寺における上堂はわずか六度しか収められておらず、普巖にとつてこの寺での住持期間はきわめて短期間に限られていたものらしい。流布本『運菴和尚語録』では「真州報恩光孝禪寺語録」となっており、明確に「語録」と記されている。

最初の(1)拈帖は入寺に際しての法語の一つであるが、真州の天寧報恩光孝寺では大部の入寺法語は略されており、わずかに帖を拈じた際の法語のみが収録されている。また天寧報恩光孝禪寺では(2)「歳旦上堂」において普巖は自ら「報恩」と称しており、「報恩」をもつて自称していたことが知られる。ただ、(2)「歳旦上堂」は一月、(4)「冬至上堂」は十一月、(5)「上堂」は季春三月、(6)「上堂」は秋になされたものであるから、上堂が年月日順に配列されているとすれば、少なくとも普巖は年末に真州の天寧報恩光孝寺に入寺してより足掛け三年にわたって住持を勤めていた計算になるうか。

いずれにせよ、真州の天寧報恩光孝寺における住持期間は「真州報恩光孝禪寺語」に依るかぎりきわめて短期に限られていたことになり、実質的に一年半あまりにすぎなかったのかも知れない。ちなみに(5)「上堂」にある「擡脚不起」という語句や(6)「上堂」にある「開<sup>ナシ</sup>口不<sup>ナシ</sup>在<sup>ナシ</sup>舌頭上」という語句は、本師の松

源崇嶽の「松源三転語」に示されることばの引用にほかならず、普巖が日頃から学人接化において「松源三転語」を意識した指導方法を用いていたことが窺われて興味深い。

### 金山龍游禪寺への遊歴と虚堂智愚の随侍

その後、普巖は真州天寧寺の住持を退き、鎮江府（江蘇省）丹徒県の金山龍游禪寺に赴いて同門の掩室善開を訪ねていることが知られる。『虚堂和尚語録』卷末「行状」によれば、

道過<sub>三</sub>金山、掩室和尚一見甚器重、通夕与語無<sub>レ</sub>倦。是時運庵師祖、謝<sub>三</sub>事真之天寧、解后語話、見<sub>三</sub>其气宇不凡。

とあり、虚堂智愚が初めて普巖と邂逅してその門に投じたときの経緯を伝えている。智愚は明州象山県の陳氏の出身であり、郷里象山県の普明律寺で出家した後、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺で曹洞宗宏智派の雪竇文煥に参じ、さらに杭州钱塘県の南屏山浄慈報恩光孝禪寺で同じく宏智派の中庵重皎に参学している。文煥は宏智下の自得慧暉（一〇九七—一一八三）の法嗣であり、重皎は同じく宏智下の石窓法恭（一一〇二—一一八一）の高弟である。その後、智愚は鎮江府丹徒県の金山龍游寺の善開のもとに投じており、善開は一見して智愚の器量を重んじ、日夜に問答商量を交わして倦むことがなかったとされる。そんな折りに普巖が真州の天寧報恩光孝寺を退いて鎮江府の金山に到り、同門の善開を訪ねたときに、そのもとに在った同じ明州出身の智愚と知り合ったわけである。このときの消息は智愚自身が『虚堂和尚語録』卷四「双林夏前告香普説」にて「後在<sub>三</sub>金山、邂逅<sub>三</sub>近運庵先師、招過<sub>三</sub>雪上<sub>二</sub>」と述懐していることによっても確かめられる。

ところで、普巖と同門に当たる松源下の掩室善開については、禅宗燈史では行実が明確ではなく、『金山志』卷三「方外」の「宋」などにも善開の項が存しているものの、伝記的な記事はほとんど存していない。<sup>49)</sup>

幸いに『枯崖漫録』卷下「鎮江府金山掩室開禪師」の項に、

鎮江府金山掩室開禪師、成都人也。遍歷講肆、忽然不樂、欲出鎮了大事。樞使安公亦勉以偈曰、吾有大患、  
為有<sub>レ</sub>身、是身假合亦非<sub>レ</sub>真、維摩示<sub>レ</sub>病元非<sub>レ</sub>病、好向<sub>二</sub>南方<sub>一</sub>更問津。室抵<sub>二</sub>番陽東湖<sub>一</sub>、值<sub>二</sub>松源開<sub>レ</sub>室。聞<sub>二</sub>拈<sub>レ</sub>明眼  
衲僧因<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>失<sub>レ</sub>却鼻孔、言下領解。一日、連<sub>レ</sub>案僧見<sub>二</sub>其看經<sub>一</sub>、問曰、向後得<sub>レ</sub>座披<sub>レ</sub>衣、如何為<sub>レ</sub>人。室將<sub>レ</sub>經度<sub>二</sub>与  
僧。僧將<sub>レ</sub>經擲<sub>二</sub>于案<sub>一</sub>。室復取、朗誦。僧休去。嘉泰辛酉、始赴<sub>二</sub>廬山雲居請<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>幾、勅補<sub>二</sub>金山<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>藍田法語<sub>一</sub>、  
皆參禪捷徑。平生所<sub>レ</sub>接<sub>レ</sub>人、獨得<sub>二</sub>弘海<sub>一</sub>、大昌<sub>二</sub>松源之道<sub>一</sub>。

という記事が存していることから、簡略ながらその事跡を窺うことができる。善開は成都府（四川省）の人であり、この点は『北磻統集』『題跋』の「跋<sub>二</sub>雲頂演和尚法語<sub>一</sub>」においても「成都演」と記されていることから確かめられる。出家して後、善開は教を学んでいたが、やがてこれを捨てて禪門に帰しており、饒州（江西省）鄱陽县城東二里の東湖薦福禪寺（薦福禪院）に到って松源崇嶽に参じ、崇嶽が「明眼の衲僧、什麼に因りて鼻孔を失却す」と挙するのを聞いて悟道したとされる。

実際に『松源和尚語録』卷上の「平江府陽山澂照禪院語録」と「江陰軍君山報恩光孝禪寺語録」には「参学善開・光睦等編」とあるから、崇嶽が蘇州（平江府）長洲県西北の陽山澂照禪院（澄照寺）と常州江陰県（江陰軍）の君山報恩光孝禪寺でなした上堂語は参学門人として善開が同門の少室光睦らとともに編集していることが知られる。同じく卷上「明州香山智度禪院語録」は「参学善開等編」とあるから、崇嶽が明州慈溪県の香山智度禪院でなした上堂も善開が中心となって編集したことが知られる。

嘉泰元年（一二〇一）に善開は洪州（江西省）建昌県の雲居山真如禪院に住持しており、翌年八月に示寂した崇嶽の遺書が雲居山の善開のもとに齎されている<sup>50</sup>。その後、善開は鎮江府丹徒県の金山龍游禪寺に遷住しており、杭州錢塘県の浄慈報恩光孝寺の住持であった曹洞宗の長翁如浄とも交流を持っている<sup>51</sup>。善開の門下

には石溪心月（仏海禪師、一一七七？—一二五六）の名のみが知られるにすぎないが、後に心月の門下から温州（浙江省）永嘉県の出身であった大休正念（仏源禪師、一二一五—一二八九）が輩出し、やがて来日して鎌倉禪林で活躍している。一方、日本の無象静照（法海禪師、一二三四—一三〇六）が入宋求法して径山の心月の法を嗣いで帰国している。いわゆる日本禪宗二十四流の中で仏源派と法海派の二系統が善開・心月の遠孫ということになる。

すでに触れたごとく『北磻続集』の「跋<sub>二</sub>雲頂演和尚法語<sub>一</sub>」によれば、善開は同じ四川の出身である紫雲□演とともに普巖を加えて松源崇嶽の門下を代表する存在であったとされる。しかも「松源禪師塔銘」によれば、崇嶽が示寂する際に同門の少室光睦とともに後事を託された高弟として善開の名が挙げられていることから、松源下では門下を代表する重要な存在であったものらしい。

#### 湖州道場山護聖万歳禪寺への遷住

その後、普巖は湖州（浙江省）烏程県南一二里の道場山護聖万寿禪寺（一に万歳禪寺とも）に遷住している。『虚堂和尚語録』巻末「行状」によれば「未<sub>レ</sub>幾赴<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>、携<sub>レ</sub>師過<sub>二</sub>書上<sub>一</sub>、薙染為<sub>二</sub>不釐務侍者<sub>一</sub>」と記されており、このとき金山で普巖と知り合った智愚が随侍して道場山に赴くこととなり、途中の書上で剃髪して不釐務侍者となったとされる。書上とは湖州呉興県治の南を流れる書溪の辺りのことであり、諸河川が合流するところである。また不釐務侍者とは侍者寮に席を置きながら侍者の実職を務めなくてよい一種の名誉職にほかならず、師匠による特別待遇の役職といつてよい。智愚のほかにも虎丘派の鉄鞭允韶が密庵咸傑のもとで不釐務侍者を勤めており、破庵派の西巖了慧（一一九八—一二六二）も無準師範のもとで不釐務侍者に充て

られた例が存しているから、普巖としてはこのとき智愚を別格で身边に随侍させたことになる。

しかも『運庵和尚語録』の「安吉州道場山護聖万歳禅寺語」には「侍者惟衍編」とあるから、普巖が湖州（安吉州）烏程県の道場山護聖万歳禅寺に住持していた際、後に普巖の法を嗣ぐことになる石帆惟衍が侍者として普巖の上堂語録を編集していることが知られる。したがって、現今に伝えられる普巖の法嗣である智愚と惟衍はともに普巖の晩年にそのもとに投じた門人であったことが知られ、若干ながら智愚の方が惟衍より参随が早かったものと見られる。

湖州烏程県の道場山は青原下の翠微無学（広照大師）の法を嗣いだ道場如訥が唐の中和年間（八八一—八八五）に開創したとされる禅寺であり、南宋末期から元代や明代にかけて禅宗十刹の第二位に列している。「運庵禅師行実」によれば、普巖と道場山との関わりについて、

移<sub>二</sub>真<sub>一</sub>之天寧・湖之道場。盖道場開山訥禅師者、湖州許氏、目有<sub>二</sub>重瞳<sub>一</sub>、垂<sub>レ</sub>手過<sub>レ</sub>膝抵<sub>レ</sub>豫。得<sub>二</sub>心印於翠微学禅師<sub>一</sub>、乃憩<sub>二</sub>止于此山<sub>一</sub>、薙<sub>レ</sub>草卓<sub>レ</sub>菴。参徒四至、遂成<sub>二</sub>禅苑<sub>一</sub>、広闡<sub>二</sub>法化<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>遺壞衲三事及拄杖・木屐、現今在<sub>二</sub>影堂中<sub>一</sub>。普行道之時、猛擊之獸、馴戢如<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>教。以<sub>レ</sub>故拳<sub>二</sub>世称<sub>二</sub>伏虎祖師<sub>一</sub>者也。師從<sub>レ</sub>領<sub>二</sub>寺事<sub>一</sub>、宿弊為<sub>レ</sub>之一革。胥曰、伏虎再来也。

と伝えている。ここでははじめに道場山の開山である道場如訥の事跡が語られており、普巖が到った当時、寺内には如訥が残した壞衲（袈裟）三着と拄杖・木屐が影堂（開山堂）に納められていたことを伝えている。また如訥が伏虎祖師と称せられた故事とともに、普巖が住持として伽藍を一新したことから、人々が「伏虎の再来なり」と称えたことを伝えている。

一方、乾隆二十一年（一七四六）に刊行された『烏程県志』巻九「寺観」によれば、

護聖万寿禅寺、県南道場山。唐中和間、如訥辞<sub>レ</sub>師出行、師命<sub>二</sub>之曰<sub>一</sub>、逢<sub>レ</sub>道即止。訥經<sub>二</sub>此山<sub>一</sub>、結<sub>レ</sub>庵居<sub>レ</sub>之。呉越王

題「其額」、為「正真禪院」。宋又改為「妙覺寺」。元豐三年、知「州事」陳侗、奏請賜「今額」。元末燬、僧正印重建（「万歷湖州府志」）。

とあり、また虞集（字は伯生、号は邵庵、一二七二—一三四八）の『道園学古録』からの引用として、

虞集記。湖州道場山重建護聖万寿禪寺成。住山釈正印求為之記。按、山在「郡城十里白雲峯」。唐中和中、如訥禪師居之、頗著「靈異」。五季、錢氏始建「十聖殿」以奉「仏」、謂「之正真寺」。護聖万寿之号、則故宋所「賜」也。国家天曆己巳六月既望、寺灾。牧守民庶与「下」為「其道」者、以為「非得」人不足、以「更」新之。乃相与迎「印公於何山」、以為「主」。而寺僧耆年之首希涓、佐「主僧」治「凡役」、乃出「財鳩」工、作「法堂」五間・僧堂七間、又作「庫樓」・香積厨・青山堂・梅檀林・蒙堂・選僧堂、皆期年而成。則又求「施」于達官大家、作「大殿」・千仏閣・方丈。像設莊嚴、供具完好、壯麗有「加」于昔。未「及」三年「而成」、實至順辛未某月也（「道園学古録」）。

という記事も載せている。<sup>54)</sup> これらによれば、湖州の郡城（烏程県）南一〇里に存する道場山には唐代に如訥が結庵した後、五代に呉越の銭氏が伽藍を建立して正真禪院と名づけ、さらに北宋代には妙覺禪寺を経て元豊三年（一〇八〇）に護聖万寿禪寺の額を賜っている。ちなみに元代の天曆二年（一三二九）六月に伽藍が焼失し、松源派の月江正印（松月翁、仏心普鑑禪師、一二六七—？）によって重建されている。正印は松源派の虎巖浄伏（天瑞老人、仏慧定智禪師、？—一三〇三）の法嗣であり、普巖と同門の無得覺通の法曾孫に当たっている。また『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「十刹」によれば、

道場。湖州烏程県護聖万寿禪寺（運菴録、万歳寺）。

開山如訥禪師、号「伏虎」。伏虎道場。雲峯閣・來月軒・宜脱亭・瑤石山・嘯月亭・瑤石池・披雲亭・牧石寮・列翠軒・青山堂・瑤池石山・水晶宮。

と記されており、南宋後期には禅宗十刹の第二位に列していたことが知られる。また開山の如訥に因んで伏

虎道場とも称せられていたとされ、山内の勝景地や寺内の堂宇なども挙げられている。とりわけ、『運庵和尚語録』に基づいて「万歳寺」と注記されており、道場如訥が伏虎と号したこと、寺が伏虎道場と呼ばれていたこと、山内の名勝や寺内の伽藍・旧跡の名が列記されている。<sup>(55)</sup>

さらに『運庵和尚語録』『安吉州道場山護聖万歳禅寺語』には、普巖が道場山でなした上堂語録として、

安吉州道場山護聖万歳禅寺語。<sup>(語録)</sup> 侍者惟衍編。

(1)上堂。龍吟虎嘯、斗轉星移、剗レ除上古風規、開レ闢今時枢要。法社自然号令、斯文可レ以日新。一挙堂当頭、如何敲唱。妙舞不レ須誇レ拍變、三臺須レ是大家催。

(2)上堂。挙、臨濟入レ京教化、至二家門首一云、家常添レ鉢。婆云、太無厭生。濟云、飯也未得、何言太大無厭生。婆便閉レ却門。師拈云、家常添レ鉢、臨濟平地活埋。太無厭生、婆婆死而不レ弔。<sup>(16)</sup>

(3)上堂。挙、石霜慈明、或時方丈内以二水一盆一、上劄二一口劔一、下面著二一編草鞋一、以二拄杖一橫按二膝上一。僧入レ門便指、擬議棒出。師拈云、巧笑倩兮、美目盼兮、素以為レ絢兮。

(4)顯慈諾庵和尚至上堂。顯慈鼻祖、諾庵法兄、機如二電掣一、辯似二河傾一。無心相撞著、分外得二人憎一。彼此不堪レ為二種草一、先師之道轉玲駢。<sup>(17)</sup>

(5)上堂。山僧昨夜三更、夢中被二一陣黑風吹レ墮二羅刹鬼国一、幾乎性命不レ存。賴得二曉鐘一動一、驚覺起来。開眼合眼、千頭百緒、帶二累胡達磨釈迦文一、祖二閣漆桶一。堂中上座、綵少二他一分一不レ得。何故。人義二尽從二貧處一斷、世情徧向二有錢家一。

(6)松源先師塔頭拈香。断二楊岐正脉一、壞二臨濟鋼宗一、赤土塗二牛妳一、密室不レ通風。身前身後不レ了、深瘞二白雲之中一。非レ父非レ子、挾路相逢。潤藻溪蘋相鈍置、謝郎錯認釣魚翁。<sup>(18)</sup>

(7)上堂。挙、資福示レ衆云、隔レ江見二資福利竿一、便回、脚跟下好与二三十棒一。何況過レ江来。時有レ僧纔出。福云、不堪二共語一。師拈云、勾賊破レ家。



(8) 靈隱石鼓和尚至請上堂。師引座云、宗門中有二千七百則公案、号曰古令、又為長物。拈起則汚人唇齒、且撥置一辺。衲僧家各有二則公案、籬坍壁倒、塞壑填溝、直是扶持不起。問、仏不<sub>レ</sub>會、問、祖不<sub>レ</sub>會、問、向來大白無用叔祖不<sub>レ</sub>會、問、靈隱松源先師不<sub>レ</sub>會、道場也不<sub>レ</sub>會。幸遇石鼓法叔光<sub>二</sub>訪山間<sub>一</sub>、必為解<sub>レ</sub>粘去<sub>レ</sub>縛、抽<sub>レ</sub>釘拔<sub>レ</sub>楔。使<sub>二</sub>小姪拳<sub>レ</sub>衆得<sub>二</sub>箇安樂<sub>一</sub>也不<sub>レ</sub>定。所謂、一東二冬、叉手当胸、下坡不<sub>レ</sub>走、快便難逢。下座。同伸<sub>二</sub>攀請<sub>一</sub>、願垂<sub>二</sub>開示<sub>一</sub>。

(9) 開山伏虎禪師忌日拈香。老訥今朝死、老岩今日生、二俱無<sub>二</sub>伎倆<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>夢不<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>床<sub>一</sub>。寅緣繼<sub>レ</sub>踵、香火荒涼。肝腸鍊作也須裂、駢屎如何比麝香。

(10) 霄上堂。一灯然<sub>二</sub>出百千<sub>一</sub>灯、灯灯無<sub>レ</sub>尽。未審、這一灯從<sub>二</sub>甚處<sub>一</sub>出。卓<sub>二</sub>拄杖<sub>一</sub>。且不<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>者裏<sub>一</sub>出。良久云、竹杖化<sub>レ</sub>龍去、癡人辱<sub>二</sub>夜塘<sub>一</sub>。

(11) 上堂。毀<sub>二</sub>於仏<sub>一</sub>、謗<sub>二</sub>於法<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>衆數<sub>一</sub>、是什麼人。道場賦性<sub>一</sub>匾窄、直是不<sub>レ</sub>容。不<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>他本分草料<sub>一</sub>擯<sub>二</sub>向他方世<sub>一</sub>界。冷地裏有<sub>二</sub>箇瞥地<sub>一</sub>、終不<sub>レ</sub>孤<sub>二</sub>負老僧<sub>一</sub>。

(12) 冬夜。拈<sub>二</sub>洞山與<sub>二</sub>泰首座<sub>一</sub>喫<sub>二</sub>菓子<sub>一</sub>公案。師云、老洞山拈<sub>二</sub>辱宗風<sub>一</sub>、泰首座埋<sub>二</sub>没自己<sub>一</sub>、双双<sub>二</sub>綉<sub>二</sub>出鴛鴦<sub>一</sub>、千古扶持不<sub>レ</sub>起。

(13) 伏虎禪師忌日拈香。四年承乏雲峯寺、暗写<sub>二</sub>愁腸<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>阿誰<sub>一</sub>。每<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>十一月初五<sub>一</sub>、一狐疑<sub>二</sub>了一狐疑<sub>一</sub>。故我開山伏虎禪師、指<sub>レ</sub>柳罵<sub>レ</sub>楊、傷<sub>レ</sub>龜怒<sub>レ</sub>鼈。你死我活、莫<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>說、一盃<sub>レ</sub>鹿茶一炷<sub>レ</sub>香、也勝<sub>二</sub>和<sub>レ</sub>盲教<sub>一</sub>訴<sub>レ</sub>瞎。

(14) 除夜小參。千聖不<sub>レ</sub>伝<sub>レ</sub>底機、填<sub>レ</sub>溝塞<sub>レ</sub>壑。衲僧道不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>底句、戴<sub>レ</sub>角擎<sub>レ</sub>頭。年窮歲尽、命若<sub>二</sub>懸絲<sub>一</sub>。臘尽春回、石人撫<sub>レ</sub>掌。与<sub>レ</sub>麼与<sub>レ</sub>麼、法出<sub>レ</sub>奸生。不<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>麼不<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>麼、徐六担版。如<sub>レ</sub>斯告報、且不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>仏法商量<sub>一</sub>、又不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>世諦流布<sub>一</sub>。只

如<sub>二</sub>東村王老夜燒<sub>レ</sub>錢<sub>一</sub>、又作<sub>レ</sub>麼生。喝<sub>一</sub>一喝。

復拈<sub>二</sub>德山小參不<sub>レ</sub>答話<sub>一</sub>公案。師拈云、德山平生捋<sub>二</sub>一条白棒<sub>一</sub>、仏來也打、祖來也打。無<sub>レ</sub>端向<sub>二</sub>這僧面前<sub>一</sub>納<sub>レ</sub>款、致<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>千古之下<sub>一</sub>遭<sub>二</sub>人檢点<sub>一</sub>。今夜莫<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>德山<sub>一</sub>底<sub>レ</sub>麼。擲<sub>二</sub>下拄杖<sub>一</sub>。

(15) 松源先師忌日拈香。頸短耳聾、千妖百怪。如<sub>レ</sub>是三十年、統<sub>二</sub>東山正脉<sub>一</sub>。我也錯商量、三拜一爐香。一<sub>レ</sub>任傍人說<sub>二</sub>短

長。

というわずか一五回の上堂・小参・忌日拈香が収められているにすぎないが、これらはいずれも後に法を嗣いだ石帆惟衍が侍者として筆写編集したものである。ただし、流布本『運菴和尚語録』では「安吉州道場山護聖万寿禅寺語録」となっており、寺の名称が「護聖万歳禅寺」ではなく「護聖万寿禅寺」と記されているのが大きく相違している点である。道場山の寺号は一般に護聖万寿禅寺であるが、実際に普巖が住持していた当時から、語録が編纂された時期に、何らかの事情で寺号が一時的に護聖万歳禅寺と改められていたのかも知れない。道場山における上堂では入寺の法語が収められておらず、直ちに(1)「上堂」から始まっている。また道場山においては(8)「靈隱石鼓和尚至請上堂」と(11)「上堂」で普巖は「道場」の自称を用いている。

とくに興味深いのは(4)「顕慈諾庵和尚至上堂」であって、顕慈の諾庵和尚とは『増集続伝燈録』卷三に松源崇嶽の法嗣として章が存する「諾庵肇和尚」のことであり、『枯崖漫録』卷下にも「諾庵元肇禅師」の項が二箇所も存している。また『仏祖正伝宗派図』や『正誤仏祖正伝宗派図』四には「靈隱松源崇嶽」の法嗣として「顕慈諾菴□肇」と記されている。すでに触れたごとく諾庵師肇は松源崇嶽の法嗣であるから、普巖とは師匠を同じくする同参であり、惟衍にとつては法伯または法叔に当たっている。また師肇が住持していた顕慈寺とは、常州（江蘇省）武進県東南四里の運河の南に存した顕慈永慶禅寺（古くは正勤能仁禅寺）のことであり、師肇は道場山の普巖のもとを訪れて旧交を温めており、このとき普巖のもとに在った智愚や惟衍らも師肇と相見しているものと見られる。「顕慈諾庵和尚至上堂」では「顕慈鼻祖の諾庵法兄、機は電掣の如く、辯は河傾に似たり」とあるから、師肇の方が松源下では普巖より法兄であったことになろうか。ただし、『松源和尚語録』卷上「平江府虎丘山雲巖禅院語録」が「参学師肇等編」とあり、普巖より参学が遅れてい

ることから、実際には師肇の方が法弟に当たるものと見られるが、便宜上、普巖は単に法兄と尊称したのみなのかも知れない。<sup>57)</sup>

また(6)「松源先師塔頭拈香」が収められているが、松源先師の塔頭とは杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺の北高峰に存した松源崇嶽の塔所鷲峰庵のことを指しており、普巖が鷲峰庵を訪れて先師崇嶽のためになした拈香法語であり、おそらく侍者の石帆惟衍もこれに同行していたものであろう。後に普巖の法嗣である虚堂智愚が久しく鷲峰庵に寓居し、師翁崇嶽の「松源三転語」に準えて「虚堂三転語」をもって学人を接待したことは名高い。

さらに(8)「靈隱石鼓和尚至請上堂」が収められているが、靈隱の石鼓和尚とはすでに触れたごとく大慧派の無用淨全の法を嗣いだ石鼓希夷のことであり、当時、杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺の住持として活躍していた希夷が道場山の普巖のもとを訪れて旧交を温める機会があり、智愚や惟衍もこのとき普巖のもとで希夷を持て成しているものと見られる。

また(9)「開山伏虎禪師忌日拈香」とは道場山の開山である青原下の道場如訥(伏虎祖師)のことであり、(13)「伏虎禪師忌日拈香」も存しており、普巖は二度にわたり如訥の忌日である一月五日に拈香をなしている。すでに触れたごとく普巖は如訥の忌日に生まれており、そんな希しき因縁によって道場山に住持したことから伏虎祖師の再来と称えられている。

ここで注目すべきは『運庵和尚語録』の「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」の上堂が<sup>15)</sup>「松源先師忌日拈香」で突然に終わっていることであろう。松源崇嶽が示寂したのは嘉泰二年(一一〇二)八月四日のことであり、普巖が崇嶽の忌日に拈香をなした後、なぜ道場山の上堂語が終了しているのかは定かでない。この時期に病いを発して住持を退いたのか、あるいは忽然と示寂してしまったのかも知れないが、道場山での上堂

はかなり限られたものしか載せられておらず、実際に何年間ほど普巖が道場山に住持していたのかは語録の編成からでは明確でない。

ただし、(13)「伏虎禪師忌日拈香」にて普巖は「四年承乏す、雲峯の寺」と述べているから、その時点まで四年間にわたって道場山（雲峰）に住持していることになり、翌年の松源忌まで五年間の住山であったことになろうか。承乏とは適当な人材がいなかったために間に合わせに職に就くことであり、ここでは普巖が自ら道場山の住持に入院したのを謙遜した表現といつてよいだろう。「運菴禪師行実」では「理宗宝慶二年丙戌秋八月初四日、坐<sub>三</sub>化于此山」とあるから、これによれば、後世、普巖は宝慶二年（一二三六）八月四日に先師崇巖の忌日拈香を行なった直後に示寂したと解されていたことになろう。示寂年時には問題もあるものの、普巖の「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」が(15)「松源先師忌日拈香」で終わっていることは事実であり、後段で詳しく触れるごとく法嗣の智愚も『虚堂和尚語録』巻二「婺州雲黄山宝林禪寺語録」の「運菴先師忌拈香」で「雖<sub>下</sub>与<sub>三</sub>松源「同日行」と述べているから、普巖が崇巖と同じ八月四日に示寂していることが確かめられる。

### 虚堂智愚と石帆惟衍の育成

虚堂智愚と石帆惟衍はともに普巖にとって晩年の愛弟子であって、ほぼ同時期に普巖のもとに投じているものと見られるが、年齢的には淳熙二二年（一一八五）生まれの智愚の方がかなり年長であったものらしい。惟衍が道号を石帆と称したのは「古帆未<sub>レ</sub>掛」の古則公案に因むものと見られ、『虚堂和尚語録』巻末には智愚の高弟である閑極法雲（間叟、一二二五—？）が撰した「行状」が付されているが、法兄の智愚もかつて普

巖のもとで「古帆未掛」の古則を参究していることが知られる。智愚の「行状」によれば、

凡入室常拳古帆未掛因縁、不許下語。思之、古帆未掛話、有甚難會。其実只是一漚未発已前事、何得不教入下語。造方丈、通見解。声未絶、庵云、何不<sub>下</sub>合取狗口<sub>二</sub>静地裏密密体取去<sub>上</sub>。帰寮不覺躁悶、忽然会得古帆未掛話・清浄行者不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>話。次日入室却問、南泉斬猫兒如何。師云、大地載不起。庵低頭微笑。

と記されており、『虚堂和尚語録』卷四「双林夏前告香普説」においても、

得与入室、只是不<sub>レ</sub>得下語。纔開口、便道、你且欸欸地、不<sub>レ</sub>要茅広。室中常示古帆未掛因縁、纔開口便罵。一日在待者寮思之、古帆未掛、有甚難會。其実只是一漚未発已前事、一念未興已前事。者僧也是箇乖底、却教宗師倒来入他窠子。嵩頭見他来处、分晓便与<sub>二</sub>他開口<sub>一</sub>築。謂之得<sub>二</sub>人<sub>一</sub>牛還<sub>二</sub>人<sub>一</sub>馬。何得不<sub>レ</sub>教<sub>二</sub>人<sub>一</sub>下語。遂担者一担見解、去方丈呈。問声未絶、先師道、你何不<sub>下</sub>合取狗口<sub>二</sub>静地裏密密体取去<sub>上</sub>。每日只管来者裏、論量古人是非、有甚了期。及<sub>二</sub>歸到寮中<sub>一</sub>、不覺躁悶、忽然会得古帆未掛話・清浄行者不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>話、其他近浅話頭漸覺通曉。来日聞打鼓入室。先師見我氣貌稍自不同、却抛<sub>二</sub>下古帆未掛話<sub>一</sub>、問我南泉斬却猫兒。山僧便下<sub>二</sub>転語<sub>一</sub>道、大地載不起。先師低頭微笑。雖然如是、過得半年、心頭依<sub>レ</sub>旧闌、被<sub>二</sub>人<sub>一</sub>拶著、依然去不<sub>レ</sub>得。とかなり詳しく智愚自身が述懐していることから、その間の事情を窺い知ることができる。と<sup>(56)</sup>ころで、ここにいう「古帆未掛」の古則とは『景德伝燈録』卷一六「鄂州巖頭全豁禪師」の章に、

問、古帆未掛時如何。師曰、後園驢喫草。

とあり、『五燈会元』卷七「鄂州巖頭全禪師」の章に、

問、古帆未掛時如何。師曰、小魚吞<sub>二</sub>大魚<sub>一</sub>。又僧如<sub>レ</sub>前問。師曰、後園驢喫<sub>レ</sub>草。とある問答商量に因んでいる。これは青原下の巖頭全歳（全豁、清儼大師、八二八―八八七）が一僧と交わした問答であり、「古帆未掛」とはものがはたらき出す以前、思量分別以前の消息のことである。全歳は一

方で「小魚、大魚を呑む」と答えて大小や能所といった二見の対立を超えたありようを示しながら、その一方では「後園の驢、草を喫す」と答えて驢馬が草を喫する日常底の自在の妙用を語っている。<sup>89)</sup>

おそらく智愚の場合と同じように、惟衍が普巖のもとで参究したのも「古帆未<sub>レ</sub>掛」の古則であったものと見られ、その機縁に因んで惟衍は普巖から石帆の道号を付与されているのであろう。

いずれにせよ、普巖はその生涯において智愚と惟衍というすぐれた二人の嗣法門人を育成したのであり、この二人の高弟の活躍によって普巖の名は南宋禅林に知れわたり、引いてはその門流が日本禅林にも導入繁茂することとなったわけである。

### 示寂年時と後事の状況

ちなみに「運菴禪師行実」によれば「理宗宝慶二年丙戌秋八月初四日、坐<sub>三</sub>化于此山。享年七十有一。請<sub>二</sub>靈隱石鼓夷和尚、為<sub>三</sub>对小参<sub>二</sub>云」とあり、普巖が道場山に示寂した際、杭州靈隱寺の石鼓希夷が遠路を駆け付けて対霊小参をなしたとされる。この記述によれば、普巖は宝慶二年（一二二六）八月四日の松源忌に世寿七一歳にして道場山で示寂したことになり、しかもこのとき靈隱寺の希夷が拜請されて対霊小参をなしたとされている。先に触れたごとく『運庵和尚語録』『安吉州道場山護聖万歳禅寺語』の(8)「靈隱石鼓和尚至請上堂」によれば、希夷は道場山の普巖のもとを訪れて旧交を温めていることから、普巖の示寂に際しても道場山を訪れて普巖の遺霊に対して親しく対霊小参を行なったものであろう。「安吉州道場山護聖万歳禅寺語」は(15)「松源先師忌日拈香」で終わっているから、実際に八月四日の松源崇嶽の忌日の拈香で突然に絶たれていることが知られる。

ところで、『虚堂和尚語録』卷二「婺州雲黄山宝林禅寺語録」には、

運庵先師忌拈香。老和尚死去二十五年、有誰撐門拄戶。雖与松源同日行、不令松源三転語。父子背馳、面不相覩、直至如今成葬園。露冷風高秋意深、久矣無心薦藜藜。

という先師普巖に対する忌日拈香が収められている。この上堂語録の配列が正しいとすると、従来の「運菴禅師行実」の示寂説によつて、普巖が示寂して二十五回忌であるならば、この拈香がなされたのは淳祐一〇年（一二五〇）の八月四日でなければならない。しかしながら、実際に「婺州雲黄山宝林禅寺語録」の配列を調べてみると、智愚が「運菴先師忌拈香」を行なつて「老和尚、死し去りて二十五年、誰有りてか門を撐え戸を拄えん。松源と同日に行くと雖も、松源の三転語を会せず」と先師普巖のために拈香法語を述べたのは、それより四年も早い淳祐六年（一二四六）八月四日になされているのである。

そもそも、『虚堂和尚語録』卷二「婺州雲黄山宝林禅寺語録」には「師入寺」の法語から最後の「元宵上堂」まで一〇〇余りの上堂・小参などが収められており、足掛け五年間にわたる智愚の活動が知られる。智愚が婺州（浙江省）義烏県の雲黄山宝林禅寺（双林）に住持した時期は『虚堂和尚語録』卷末の「行状」によつても定かでない。しかしながら、幸いにも「婺州雲黄山宝林禅寺語録」の二年目に当たる「結夏小参」が閏月のために一二〇日安居であった事実を伝えていることから、淳祐年間（二四一―二五二）に四月から六月の夏安居の時期に閏月が存する年を探すと、淳祐六年（二四六）閏四月しか存していないことが判明する。したがつて、智愚が義烏県の宝林寺に住持していた期間は淳祐五年（二四五）の結夏直前から淳祐九年（二四九）の元宵（一月二五日）に至る足掛け五年間であった事実が明確となる。智愚が「運菴先師忌拈香」をなした時期をこれに当て嵌めると、淳祐六年八月四日の運庵忌であったことが判明するのである。このときの拈香が真に普巖の二十五回忌になされたのであれば、普巖が示寂したのは「運菴禅師行実」に記

された宝慶二年八月四日ではなく、それより四年も早い嘉定一五年（一二三二）八月四日であった計算ならう。<sup>60</sup>

一方、智愚は『虚堂和尚語録』卷九「臨安府径山興聖万寿禅寺後録」において、杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺に住持して一年を経た時期の上堂拈香として、

運菴和尚忌日拈香。吽囉吒喇竭節、地転天回難<sub>レ</sub>辨別、不<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>松源省数銭、慣<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>衲僧鎖口訣。同死不<sub>レ</sub>同生、特地成<sub>レ</sub>途轍。秋風影裏重羅列、義断情忘四十年、何時待<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>龜成<sub>レ</sub>蟹。

ということばを残している。智愚が径山に住持したのは咸淳元年（一二六五）八月二五日のことであるから、この拈香法語がなされたのは翌年の咸淳二年（一二六六）八月四日のこととなる。咸淳二年より四〇年前ということになると、年回の数え方からすれば宝慶三年（一二二七）八月四日ということになり、「運菴禅師行実」にいう宝慶二年八月四日の示寂とは一年のずれが生じてしまうが、概算として四〇年であるならば「運菴禅師行実」の記事は間違っていないことなる。おそらく「運菴禅師行実」はこの径山で智愚がなした「運菴和尚忌日拈香」を単純に咸淳元年のことと誤って解し、普巖の示寂年時を逆算しているのではなからうか。ただし、先の嘉定一五年八月四日が普巖の命日であるならば、ここでも「四十年」ではなく「四十五年」と記さなければならない。したがって、その何れを是とするかは判断に苦しむが、一応は両説を併記しつつも、本稿においては普巖の示寂が嘉定一五年八月四日であったとする新説を提示しておきたい。

ところで、すでに触れたごとく「運菴禅師行実」によれば、普巖と参学期以来の道友であった杭州靈隱寺の石鼓希夷が道場山に招かれて亡き普巖の霊前で対霊小参をなした事実が伝えられている。希夷が普巖のためになした「対霊小参」が如何なるものであったのかはその原文が何ら残されていないために定かではなく、「運菴禅師行実」には実際の「対霊小参」のことは一部も収められていない。あるいは「運菴禅師行実」



が著された当時、希夷の「対靈小參」が墨蹟のかたちなどで実際に日本国内に見聞可能な状態で残されていたため、あえて「運菴禪師行実」の撰者は実際の文章を書き入れなかったのかも知れない。

この点で興味深いのは『断橋和尚語録』巻末「行状」に普巖の示寂に先んじた記載として、

年十八、依<sub>レ</sub>永嘉<sub>二</sub>慈院宗嗣論師<sub>一</sub>出家、乃俗季父也。即剃髮投札、未<sub>レ</sub>期行脚。首見<sub>二</sub>谷源道於瑞巖<sub>一</sub>、聞<sub>二</sub>室中拳<sub>二</sub>麻三斤<sub>一</sub>・乾屎橛話、頓起<sub>二</sub>礙膺之疑<sub>一</sub>。明年挈<sub>二</sub>包謁<sub>二</sub>靈隱<sub>一</sub>。一夕、夷石鼓為<sub>二</sub>巖運菴<sub>一</sub>對靈小參、歷拳<sub>二</sub>運菴平日見処<sub>一</sub>。師聞<sub>レ</sub>之愈疑。

という記事が残されていることであろう。<sup>(6)</sup>破庵派（無準下）の断橋妙倫（松山子、二二〇一―二二六〇）は後に無準師範の法を嗣いだ高弟であり、台州（浙江省）黄巖県松山の徐氏の出身で、嘉泰元年（二二〇二）八月一日に生まれている。嘉定十一年（二二二八）に一八歳で温州（浙江省）永嘉県の広慈院において論師で俗季父の宗嗣に就いて出家得度し、最初に台州黄巖県の瑞巖浄土禅院において松源派の谷源至道に相見し、「洞山麻三斤」や「雲門乾屎橛」の公案を参究している。嘉定十二年（二二二九）に妙倫は瑞巖寺の至道のもとを離れて杭州の靈隠寺に掛搭し、石鼓希夷のもとで親しく参学に努めている。そんな折りに道場山の普巖が示寂したのであり、ある一夕に希夷が亡き普巖のために対靈小參をなし、普巖の平日の見処を披瀝したというのである。普巖が示寂した年時は残念ながら明記されていないが、このとき妙倫は親しく希夷の小參を拝聴し、普巖の平生の見処について何らかの疑団を抱いたと伝えられる。

その後、妙倫は常州（江蘇省）無錫県青山湾の褒忠頭報華藏禅寺に赴いて楊岐派の淳庵善浄のもとに投じており、さらに洪州（江西省）建昌県の雲居山真如禅院において普巖の門人である智愚や惟衍と交遊を持っている。希夷の参学門人であった妙倫が普巖の嗣法門人である智愚や惟衍と触れ合う背景には普巖と希夷の深い道交関係が背景に存したのであって、偶然の相見ではなかったことになるう。

ただ、妙倫はまもなく明州奉化県の雪竇山資聖寺において無準師範に参学することになるが、師範が雪竇山の住持を勤めていたのは嘉定一六年（一二三三）の年末から宝慶二年（一二三七）二月頃までであり、やがて明州鄞県の阿育王山弘利寺に遷住している。また智愚も雲居山から浙江に戻り、杭州錢塘県の浄慈報恩光孝寺において曹洞宗真歇派の長翁如浄に参じて問答を展開していることが『虚堂和尚語録』巻末の「行状」によって知られるが、如浄は嘉定一七年（一二二四）秋には明州鄞県の天童山景德寺に住持しているから、当然、普巖の示寂はそれ以前のことではなければならない。

もし仮に道場山で普巖が示寂したのが宝慶二年八月であったとすると、妙倫はこの時点で杭州の靈隠寺で希夷の対霊小参を聞き、その後、靈隠寺を離れて無錫の華藏寺に到り、さらに洪州の雲居山で智愚や惟衍と知り合い、同じ宝慶二年の年内か翌年宝慶三年の年頭には明州に戻って雪竇山の師範を拜したことになり、僅か数ヶ月の間に浙江・江蘇・江西の禅林に掛搭して浙江に戻るといふ驚異的な行脚修道を遂行したことになる。また「運菴禪師行実」の示寂年時を是とすると、普巖が道場山に住持していた期間や智愚が普巖のもとを辞して諸山歴遊に赴いた時期などにも大きな矛盾を抱えることになる。

しかし、妙倫が数ヶ月の間にそれだけの禅林を経巡ることはとても認め難いものであって、妙倫の遍参の過程からしても、また智愚の参学の動向からしても、普巖は宝慶二年八月四日に示寂したと見るより、それより数年早く嘉定一五年八月四日に示寂したと解する方がすべての矛盾が解消して妥当なのである。まして妙倫は雪竇山において侍者として『仏鑑禪師語録』巻一「住慶元府雪竇山資聖禪寺語録」の上堂語を編集していることから、嘉定一六年から雪竇山の師範に参学していたものと解せざるを得ず、当然、普巖が示寂したのも希夷が対霊小参をなしたのも、それ以前のできごとと見なければならぬ。本論ではなお積極的な傍証史料が存するわけではないが、以上、列記してきたごとく「運菴禪師行実」に載る普巖の示寂年時の記事

には問題点が多く存することを指摘し、嘉定一五年八月四日こそ普巖が示寂した真の忌日であったと解するものである。

一方、駒澤大学図書館所蔵『禪林諸祖用靈語藪』巻九「入塔」には、

為<sub>レ</sub>運菴和尚。北海心。

捧<sub>レ</sub>骨云、個是運菴師兄一生倔強不<sub>レ</sub>受<sub>三</sub>人処分<sub>レ</sub>底贖物、今日却來相累。既是同<sub>レ</sub>氣連<sub>レ</sub>枝、未<sub>レ</sub>免<sub>三</sub>蓋覆去<sub>二</sub>也。且作  
塵生蓋覆。二十年來坐釣<sub>レ</sub>舟、錦鱗入<sub>レ</sub>手便回<sub>レ</sub>頭。雲峰山水最佳処、惱<sub>三</sub>乱春風<sub>二</sub>卒未<sub>レ</sub>休。

という普巖のためになされた入塔法語が載せられている。これによれば、普巖が示寂して荼毘（火葬）に付されて後、靈骨を墓塔に納める入塔仏事を挙行したのは松源下の同門に当たる法弟の北海悟心であったことが知られる。北海悟心については『増集続伝燈録』巻三に「靈隱松源嶽禪師法嗣」として「湖州道場北海悟心禪師」の章が存するが、伝記的な記載は見られない。しかし、幸いにも『北磻文集』巻一〇に「道場山北海禪師塔銘」が収められていることから、いくぶん詳しい事跡が知られる。

悟心は北海と号し、蜀の出身で俗姓は楊氏とされ、郷里の保福寺で証禪師に師事した後、三峡を下って顯親報慈寺に到つて晩年の松源崇嶽のもとに投じ、天童山の無用淨全に参じた後、徑山に赴いて楊岐派の石橋可宣（弘日禪師、？—一二二七）のもとで分座している。やがて悟心は明州（四明）の天王寺に開法出世して叢林に名声が知られるようになり、後に普巖が住持した湖州の道場山に遷住している。『北磻文集』巻九「疏」には「心老住<sub>三</sub>道場<sub>二</sub>疏」が収められており、あるいは直接に法兄普巖の意向を受けて後席を継いでいるのかも知れない。悟心は道場山に九年間にわたつて住持し、土木事業を行なつて伽藍を一新したとされる。「道場山北海禪師塔銘」には悟心の示寂年時がなぜか明記されていないが、およそ紹定年間（一二二八—一二三三）の前後頃に示寂しているものと推測され、世寿六一歳、法臘四四齡であったと伝えられる。悟心は大慧

派の物初大観が得度を受けた受業師でもあり、やがて大観は北磻居簡の法を嗣いでいる。一方、居簡自身もまた普巖や悟心の後に道場山の住持となっており、その後、杭州の南屏山淨慈報恩光孝禪寺に陞住している。この悟心が述べた普巖の入塔の法語は興味深い内容であることから、書き下してみれば、およそつぎのごとくなるう。

運菴和尚の爲めにす。 北海心。

骨を捧げて云く、「個は是れ運菴師兄が一生倔強に人の処分を受けざる底の臧物にして、今日、却り来たりて相い累る。既に是れ氣を同じくし枝を連ぬれば、未だ蓋覆し去るを免れず。且らく作廢生か蓋覆せん。二十年来、坐して舟に釣る。錦鱗、手に入りて便ち頭を回らす。雲峰は山水の最も佳き処にして、春風を惱乱して卒に未だ休せず」と。

倔強とは強情で人のいう通りにならないことであり、普巖の日頃の頑強な性格を語ったものである。臧物とは賄賂や窃盜など不正な手段で得た品物のことであるが、ここでは残された遺骨のことを指していよう。悟心としては同じ松源下の同門に当たることから、法兄普巖の遺骨を入塔せざるを得ず、墓塔に納骨する一転語を述べるわけである。普巖は二〇年にわたつて学人接化をなし、黙々と釣り舟に坐しつづけ、錦の鱗を持つ大魚を手に入れ、ようやく首を廻らしたとするのは、普巖が晩年に智愚や惟衍のごときすぐれた法嗣に恵まれたことを意味している。普巖が鎮江府の寿丘山大聖普照寺に入寺したのは開禧二年（二〇六）のことであるから、それから二〇年が経過したと解すると「運菴禪師行実」の宝慶二年示寂説に近くなるが、普巖が明州の運庵に居住した時期から接化が始まったと勘案すると、嘉定一五年示寂説も成り立つであろう。雲峰とは道場山の別称であり、悟心としては美しい山水の佳境に恵まれた湖州の地に法兄普巖の遺骨を埋めるに際し、春風に心が乱されて安らかでない心境を語っている。おそらく普巖が示寂して荼毘に付された

後、その遺骨はしばらく寺内の祖堂に奉安されていたものと見られ、法弟の悟心が普巖の後席を継いで道場山に住持してから、翌年の春にか入塔納骨の仏事が執り行なわれたものであろう。

興味深いのは「道場山北海禪師塔銘」に悟心が四明の天王寺から道場山に赴く間の出来事として、

端開<sub>二</sub>法于四明天王寺。邇<sub>レ</sub>海衲子、不<sub>レ</sub>称<sub>レ</sub>心而称<sub>二</sub>北海。声<sub>レ</sub>猿<sub>レ</sub>猿<sub>レ</sub>叢林中。瑞巖大同全、以<sub>二</sub>金山<sub>一</sub>薦<sub>二</sub>諸廟堂。希夷・如<sub>レ</sub>浄、在<sub>二</sub>南北山<sub>一</sub>倚角沮。勝<sub>レ</sub>已者、止<sub>二</sub>秀之本覺。老坡昔過<sub>レ</sub>此、所謂、三過門老病死、一彈指頃去來今。為<sub>二</sub>郷老人文公<sub>一</sub>發。旧有<sub>レ</sub>堂曰<sub>二</sub>三過、余為<sub>レ</sub>之記。居無<sub>レ</sub>何、夷・浄之沮不<sub>レ</sub>行、移<sub>二</sub>湖之道場。凡若干年、振<sub>レ</sub>墜起<sub>レ</sub>廢、一<sub>一</sub>新土木。

という記事が伝えられていることであろう。ここにいう明州の天王寺が具体的にいずれの寺を指すのかは明確でないが、その後まもなく天王寺の悟心の名が叢林に知れわたるようになった頃、台州黃巖県の瑞巖浄土禪院の住持であった仏眼派の大同道全が鎮江府丹徒県の金山龍游禪寺に悟心を住持させるように拝請している。ところが、このとき杭州に在った靈隱寺の石鼓希夷と浄慈寺の長翁如浄が相和してこれを阻止したため、悟心は金山への入寺を果たすことができず、やむなく秀州（浙江省）嘉興府嘉興縣の寿山本覺禪寺（甲刹の二）に身を寄せたとされる。まもなくして希夷と如浄の沮止が行なわれなくなると、悟心は改めて湖州の道場山に住持することになったと伝えられる。如浄が杭州の浄慈寺再住を経て明州の天童山に遷住したのは嘉定一七年（一二二四）のことであるが、この記事はそれより以前、浄慈寺初住のときの出来事と見られ、嘉定一五年（一二二二）の前後頃の出来事と推測される。このとき靈隱寺には大慧派の希夷が住持し、浄慈寺には曹洞宗の如浄が住持して国都杭州の主要寺院を管掌していたわけである。

一方、大同道全は仏眼派の円極彦岑の法を嗣いでおり、『天台統集別編』卷五に道全が詠じた「題<sub>二</sub>法安院<sub>一</sub>」というつぎのような詩偈が収められている。

題「法安院」 道全（字大同）。

半生夢想<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>山宮、此日殷勤興莫<sub>レ</sub>窮、寺在<sub>二</sub>煙霞空翠裏、人遊<sub>二</sub>水墨画<sub>一</sub>中。青松夾<sub>レ</sub>道曉雲合、黃葉滿<sub>レ</sub>山秋露濃、  
滿眼新詩酬未<sub>レ</sub>尽、再来寧媿<sub>二</sub>錦囊空<sub>一</sub>。

このように道全は詩僧としても知られていたものらしく、嘉定年間（一二〇七—一二三四）に台州黄巖県の瑞巖浄土禅院に住持しており、『北磻文集』卷二「記」に「瑞巖開田然無盡燈記」が収められ、そこに道全の名が存している。<sup>(64)</sup>

いずれにせよ、悟心の活動や希夷と如浄の動向などからすると、普巖が示寂したのが宝慶二年八月で、入塔がなされたのが宝慶三年春の頃と見るには無理が存しよう。これより数年早く嘉定一五年八月に普巖が亡くなり、靈隠寺の希夷が普巖のために対霊小参をなし、その後、悟心の金山入寺をめぐって希夷と如浄の沮止があり、一時期、嘉興府の本覺寺に身を寄せていた悟心がまもなく亡き普巖の後席を継ぐかたちで道場山に住持し、嘉定一六年の春頃に悟心によって普巖の入塔納骨がなされたと解する方が無理が存しないであろう。先の「道場山北海禪師塔銘」のほかに『北磻文集』卷九「疏」には居簡が撰した「心老住<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>疏」も収められている。悟心の道場山入院に至る記事もまた普巖の嘉定一五年八月四日の示寂説を補強するものといつてよい。

運庵普巖の法語・賛仏祖・頌古・偈頌

つぎに『運庵和尚語録』に収められている「上堂」と「自賛」を除く「法語」「賛仏祖」「頌古」「偈頌」について一通り整理しておきたい。「法語」としては「示<sub>二</sub>守徳禪人<sub>一</sub>」と「示<sub>二</sub>龍華会首韋徳通<sub>一</sub>」という二

法語を収めるのみであり、すでに触れたごとくこの二法語ともに普巖が寿丘山の大聖普照寺において門人である守徳や在俗の徒で龍華会の首を勤めた韋徳通に付与したものである。

つぎの「贊仏祖」としては「観音大士」「達摩大師」<sup>(65)</sup>「百丈大師」「布袋和尚」「濟顛書記」というわずか五首の仏祖贊を載せているにすぎない。仏菩薩としては観世音菩薩のみであり、「達摩大師」は流布本『運菴和尚語録』では「達磨大師」とあり、禪宗初祖菩提達磨に対しては蘆葉・面壁・隻履の故事などが詠じられている。南嶽下の百丈懷海(大智禪師、七四九―八一四)に対しては馬祖道一(馬簸箕、大寂禪師、七〇九―七八八)のもとで「百丈野鴨子」の古則によって悟道したことが詠じられている。布袋和尚契此(定心大師、?―九一六)と湖隱道濟(濟顛、方円叟、一一三七―一二〇九)はともに風狂の禪者として知られ、唐末五代に活躍した布袋和尚契此は普巖の郷里明州奉化県の大中岳林禪寺(布袋道場)に居していたとされ、弥勒菩薩の化身と称えられる。一方、普巖とほぼ同世代を生きた濟顛道濟は杭州靈隱寺で楊岐派の瞎堂慧遠(仏海禪師、一一〇三―一二七六)の法を嗣いだ門人であり、日本から到った叡山寛阿(一一四一?―?)と同門に当たっており、この風狂の禪者濟顛道濟と普巖は実際に靈隱寺において互いに面識が存したのかも知れない。<sup>(66)</sup>

つぎの「頌古」としては「世尊降生一手指」「天一手指」「地」「初祖見梁王」「心不<sub>二</sub>是仏<sub>一</sub>」「智不<sub>二</sub>是道<sub>一</sub>」「狗子無<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」「洗鉢孟話」「百丈野狐」「趙州百骸」「青州布衫」「芭蕉拄杖子」「密庵破沙盆」というわずか一〇首を載せるにすぎない。世尊や達磨の故事は著名であるが、とくに趙州從諗(真際大師、七七八―八九七)に因む古則が多く、南嶽系の祖師に限られているのも特徴的である。また最後の「密庵破沙盆」の古則は祖翁に当たる密庵咸傑(一一二八―一一八六)に関わる公案であり、実際に普巖が崇嶽のもとでこの古則公案を参究したものであろう。

さらに「偈頌」としては「大義渡」「大藏主号<sub>二</sub>鏡中<sub>一</sub>」「寄<sub>二</sub>天目礼書記閩回<sub>一</sub>」「寄<sub>二</sub>太白幸首座<sub>一</sub>」「題<sub>二</sub>戢

庵居士竹亭」「送僧見孟侍郎」「乗禪者帰蜀」「送洪維那」という、僅か八首の作しか伝えられていない。この中で「大藏主号鏡中」「寄天目礼書記閻回」「寄太白幸首座」についてはすでに触れたことから、他の偈頌について一通り見ておきたい。

はじめの「大義渡」は普巖が行脚中に到った激流の渡しのようであるが、いまだ何れの地を指すのか明確にしていない。「題戢庵居士竹亭」は戢庵居士が建てた竹亭に題した作であるが、戢庵居士については事跡が定かでない。ただ、『破菴和尚語録』『法語』に「与戢菴居士張御帯」が存し、破庵祖先がやはり戢庵居士（張氏）に法語を与えていることが知られる。同じく『破菴和尚語録』『讚偈』には「戢菴居士請贊濟顛」と「戢菴居士持寿像求讚」の偈頌が存しており、戢庵居士が楊岐派の湖隱道濟（濟顛）の画像と破庵祖先の寿像を持参して祖先に賛語を請うたのに対し、祖先は祖賛と自賛をそれぞれ付して書き与えていることが知られる。

また「送僧見孟侍郎」は一僧がある秋に維摩居士にも譬えられる孟侍郎に相見するのを送る内容であるが、この孟侍郎についても如何なる人物か特定できない。「乗禪者帰蜀」は蜀（西川）の劍門（四川省）の出身である□乗という禪者が江南から郷里へと帰るのを送ったときの作である。「送洪維那」は門下に在って維那を勤めていた□洪という禪者が普巖のもとを去るのを送る作であり、第三句に「破沙盆有兒孫」と述べているから、洪維那は「密庵破沙盆」の公案を究めて密庵咸傑の兒孫（法孫）に当たる禪者であったものらしく、普巖にとって法徒弟に当たっていることになろう。



## 運庵普巖の頂相と墨蹟

京都紫野の龍宝山大徳寺には、本稿の末尾に掲げた〔図Ⅰ〕の絹本着色「運菴普巖頂相」一幅が重要文化財として所蔵されている。この頂相は普巖の生前の姿を仰ぎ見ることができ、点できわめて貴重なものであり、その姿は曲臑上に坐して右手に扠子を持ち、温厚な表情ながら厳しい眼光を見せている。また頂相の上部に揮毫された普巖の自賛には、

妙在<sub>二</sub>転処<sub>一</sub>、密在<sub>二</sub>汝辺<sub>一</sub>。絵<sub>二</sub>予面目<sub>一</sub>、正中<sub>レ</sub>乖<sub>レ</sub>偏。踏<sub>二</sub>飜却謝郎船<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>撥<sub>二</sub>万象<sub>一</sub>、火冷灰寒。我有<sub>二</sub>丰子分<sub>一</sub>、誰道不<sub>二</sub>完全<sub>一</sub>。十分狼藉難<sub>二</sub>收拾<sub>一</sub>、微風吹動碧琅玕。

徒弟智密副寺、画<sub>二</sub>予頂相<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>賛。

峯嘉定十一年戊寅結制後三日、住<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>、運菴普巖書。〔印〕〔印〕

という直筆の賛語が記されており、その部分を拡大したのが〔図Ⅱ〕である。これには二種の落款も押されているらしいが、これが「運菴」なのか「少瞻」なのか「普巖」なのかは、いまだ実物を拝観する機会を得ていないことから確認し得ていない。この自賛は得度の小師で道場山で副寺を勤めていた智密という禪者が普巖の頂相を画いて賛を求めたのに対し、嘉定二年（二二一八）の結制後三日すなわち四月一七日に普巖が道場山の住持として揮毫したものである。この自賛のことは流布本『運菴和尚語録』「自賛」に、

又。智密副寺請。

妙在<sub>二</sub>転処<sub>一</sub>、密在<sub>二</sub>汝辺<sub>一</sub>。絵<sub>二</sub>予面目<sub>一</sub>、正中<sub>レ</sub>乖<sub>レ</sub>偏。踏<sub>二</sub>飜却謝郎船<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>撥<sub>二</sub>万象<sub>一</sub>、火冷灰寒。我有<sub>二</sub>丰子分<sub>一</sub>、誰道不<sub>二</sub>完全<sub>一</sub>。十分狼藉難<sub>二</sub>收拾<sub>一</sub>、微風吹動碧琅玕。

として載せられており、実際に語録に収録されている点でも貴重である。ただし、古刊本『運庵和尚語録』の「自賛」には、この自賛は収められていないことから、流布本が編集された際に新たに収められたものであることが知られる。

この普巖の自賛を書き下してみようならば、およそつぎのごとくであろう。

妙は転処に在り、密は汝が辺に在り。予が面目を絵き、正中に偏を乖わかつ。謝郎の船を踏躡却し、万象を撥わず、火は冷たく灰は寒し。我れに丰子の分有らば、誰か道わん、完全ならずと。十分の狼藉、收拾し難し。微風吹き動かす、碧琅玕。

徒弟智密副寺、予の頂相を画きて賛を求む。

時に嘉定十一年戊寅の結制後三日、道場に住する運菴普巖、書す。

普巖は副寺の智密の名に因んで賛を付しており、冒頭で智密に対して自らで轉身すべきこと、仏法は自己の脚下にあることを示している。正偏は曹洞五位に因むことばであり、正中とは本来の面目を指し、偏とはここでは実際に画かれた画像を意味しようか。謝郎とは唐末五代に活躍した雪峰下の玄沙師備（謝三郎、宗一大師、九三五―九〇八）のことであり、普巖は師備が舟を踏み倒して忽然と出家した故事をもって自らに準えている。「万象を撥わず、火は冷たく灰は寒し」の意が定かでないが、森羅万象をそのままに受け入れて、曲泉上に全てのはたらきを絶して坐する自身の姿を詠じたものであろうか。あるいは玄沙師備が謝家の三男坊として川に落ちた父の死を契機として出家していることから、普巖の場合も杜氏の三男として父の死などを縁として出家しているのかも知れない。丰子とは豊かな容姿、福与かな姿のことであり、智密が持参した自らの頂相にそれなりに満足していたさまが知られ、完璧に描かれていることを喜んでゐる。

実際に〔図Ⅰ〕の全身像や、上半身を拡大した〔図Ⅲ〕を眺めて見ると、普巖がかなり体格のよい大柄な

人であつたらしいことが窺われ、普巖という法諱にも岩のごときさまが込められているのではないかと思われる。ただ、普巖は末句で「十分の狼藉、收拾し難し。微風吹き動かす、碧琅玕」と述べ、我が破天荒な狼藉ぶりまでは描き切れず、微風が頂相の掛軸を吹き動かすのみであると抑えているのは如何にも禅者らしい。碧琅玕とは玉に似た美しい青い石のことであり、ここでは頂相の掛軸に吊した二つの風鎮のことを指しているよう。しかも普巖はこの頂相の自賛で自ら「運菴普巖」と署名していることから、これを是とすれば、道号は運菴と記し、法諱は普巖と記するのが正しいことになろう。

さらに注目すべきは、この頂相の自賛によつて普巖が嘉定一一年四月の時点ですでに道場山の住持であつた事実が確かめられることである。もし仮に「運菴禪師行実」にいうごとく普巖が宝慶二年（二二二六）八月に示寂したのであれば、普巖は少なくとも嘉定一一年から宝慶二年に至る九年半以上にわたつて道場山の住持を勤めていた計算になり、語録を通して普巖が道場山の住持を勤めていたのが五年ほどであつたと見られるだけに、この点でもやはり多くの矛盾を抱えることになろう。一方、新説のごとく普巖が嘉定一五年八月に示寂しているのであれば、普巖が道場山に住持していた期間は最も少なく見積もつて嘉定一一年四月から嘉定一五年八月までの四年半であつた計算になり、『運庵和尚語録』の「安吉州道場山護聖万歳禅寺語」の上堂語の配列から窺える足掛け五年間の上堂語の記載とも矛盾しないことになろう。

おそらくこの普巖の自賛頂相は南浦紹明または有縁の大応派の禅者によつて南宋ないし元の地から日本禅林に将来され、やがて門流ゆかりの大徳寺に奉安収蔵されたものであろうと推測される。この自賛頂相は元来、南浦紹明の塔所であつた建長寺天源庵に伝わつていたものであり、その後、後北条氏を経て太閤関白の豊臣秀吉（木下藤吉郎、羽柴筑前守、一五三七—一五九八）に伝わり、さらに茶人の千宗易（利休居士、一五二一—一五九二）を通して大徳寺に寄贈されたことが知られている。<sup>(85)</sup>

いま一つ「運菴禪師行実」にも普巖の頂相について、つぎのような記事が載せられている。

夢菴在居士讚<sub>三</sub>師像<sub>二</sub>曰、松源嫡嗣、伏虎後身、接物有<sub>レ</sub>驗、見地不<sub>レ</sub>親。叢林沾潤恩波闊、萬古雲峰翠色新。

これは夢菴在居士という在俗の徒が普巖の頂相になした賛語を載せた内容を書き記したものである。これも「伏虎の後身」とか「万古の雲峰、翠色新たなり」とあるから、普巖が道場山（雲峰）に住持し、道場如訥（伏虎祖師）の後身ないし再来と称えられて以降の姿を画いた頂相であつたことが判明し、夢菴在居士の頂相賛では普巖を松源崇嶽の嫡嗣であり、道場山開山の如訥の後身とし、その接化のさまや見地の高さが称えられている。さらに夢菴在居士は普巖が叢林を潤した法恩の広大さを述べた後、雲峰の新緑の翠を詠じている。この頂相賛が「運菴禪師行実」に収められていることから、あるいは夢菴在居士が賛を付した「運菴和尚頂相」も日本禅林に将来されて何れかの寺院に所蔵されていたのかも知れない。『虚堂和尚語録』巻七「偈頌」に「謝<sub>三</sub>夢庵居士性宗集<sub>二</sub>」という偈頌が収められており、夢庵居士が具体的に誰を指すのかが定かでないものの、この人には『性宗集』という著述が存したことが知られる<sup>(8)</sup>。

また普巖の法を嗣いだ高弟である智愚にも『虚堂和尚語録』巻六「仏祖讚」に、

運庵先師。

行脚祇參<sub>三</sub>松源<sub>一</sub>、早是信<sub>レ</sub>卜壳屋。更説<sub>三</sub>東山正伝<sub>一</sub>、大似<sub>三</sub>老馬嚼<sub>レ</sub>粟。近<sub>三</sub>人情<sub>一</sub>無<sub>三</sub>面目<sub>一</sub>、引<sub>レ</sub>得兒孫<sub>三</sub>阿鞞鞞。報恩<sub>二</sub>尽<sub>レ</sub>力讚揚、也是驚股割<sub>レ</sub>肉。

という普巖に対する祖賛が残されている。智愚が「報恩」と自称していることから、この祖賛は智愚が嘉興府嘉興県（嘉禾）の天寧報恩光孝禅寺の住持を勤めていた時期に揮毫されたものということになり、普巖が示寂して一〇数年ほどを経た頃の作と見てよいであろう。智愚は普巖が行脚して松源崇嶽の法を嗣いで楊岐派の五祖法演（東山、？—一〇〇四）の正伝を得たことを逆説的に称えており、後半では普巖の接化のありよ

うを述べ、その法恩に如何に酬いたらよいか自らの決意を語っている。この智愚が六言八句の賛を付した普巖の頂相はおそらく日本禅林には将来されなかつたものと見られ、残念ながら現今に残されていない。

つぎに大徳寺所蔵の普巖自賛の頂相のほかに、実際に後世の日本で描かれた普巖の頂相について主なものを通り紹介しておきたい。第一に恩賜京都博物館編纂『妙心寺名宝図録』（昭和一〇年刊）に「松源・運庵和尚像」双幅が収められていることから、妙心寺に松源崇嶽と運庵普巖の師資を描いた対幅の頂相が存していることが知られる。この崇嶽と普巖の師資を描いた頂相の説明として、

三 松源・運庵和尚像（紙本淡彩） 双幅（竪三尺一寸八分 横一尺三寸一分） 妙心寺蔵

と記されており、両者の頂相は縦・横とも同じ形式で描かれている。賛はどちらも大応派（妙心寺派）の雪江宗深（仏日真照禪師、一四〇八—一四八六）によつて拝写されており、宗深はすでに触れたごとく東陽英朝の本師にほかならない。〔図Ⅳ〕が妙心寺所蔵の運庵普巖頂相であつて、宗深は普巖の頂相に対して、

断<sub>レ</sub>楊岐正脉、滅<sub>レ</sub>臨濟綱宗。猿啼<sub>レ</sub>碧嶂、月鎖<sub>レ</sub>千峯。影落<sub>レ</sub>于闐国、人在<sub>レ</sub>大遼東。応<sub>レ</sub>縁淡泊、無<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>從答。謂<sub>レ</sub>是運菴真面目、澄潭不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>臥<sub>レ</sub>蒼龍。

右運菴祖翁自賛。 拙孫宗深、焼香九拜謹写<sub>レ</sub>焉。

という賛語を書き残している。この頂相賛のことは古刊本『運庵和尚語録』『自賛』として一つ載るものであり、流布本『運菴和尚語録』『自賛』では智密副寺の請によるものに先んじて第一番目に載せられている。普巖の頂相は曲泉に坐して右手に短策を持ち、左手で曲泉の端を握り締めた格好で描かれており、また白黒写真なので袈裟の色などは定かでないが、袈裟には裏が存していないことから、あるいは雪江宗深の頃にはその原本となる頂相賛が実際に日本に伝存していたのかも知れない。この賛語を書き下して見るならば、およそつぎのごとくならう。

楊岐の正脈を断じ、臨濟の綱宗を滅す。猿は碧嶂に啼き、月は千峯を鎖す。影は于闐国に落ち、人は大遼の東に在り。縁に応じて淡泊にして、従容するに分無し。是れを運菴の真面目なりと謂わば、澄潭には蒼龍を臥せしむるを許さず。

右は運菴祖翁の自贊なり。

拙孫宗深、焼香九拜して謹んで焉れを写す。

これはあくまで普巖が記した原本に基づいてか、遠孫の宗深が拝写したものであり、仮に宗深が普巖の自贊を見ながら書き写したのであれば、そのもととなった頂相も日本に將來されたことになろうが、その間の事情は定かでない。

つぎに挙げるべきは荻須純道『日本中世禅宗史』の「松源一流の禅と虚堂智愚」に建仁寺常光院所蔵として載る「松源下十祖像」の第二番目に収められた普巖の頂相である。この頂相はいつ書かれたものか定かでないが、松源派直系の祖師として中国と日本の祖師頂相を連ねたものであり、一〇人の祖師像が一括して書かれている。この度、花園大学の野口善敬先生と花園大学国際禅学研究所の富増健太郎氏が写真を撮られ、これを送って頂いたので、普巖の頂相のみを挙げておきたい。〔図V〕が建仁寺常光院に所蔵される「運庵普巖頂相」であって、この普巖の頂相には贊として、

断<sub>レ</sub>楊岐正脈、滅<sub>二</sub>臨濟綱宗<sub>一</sub>。猿啼<sub>二</sub>碧嶂<sub>一</sub>、月鎖<sub>二</sub>千峯<sub>一</sub>。影落<sub>二</sub>于闐国<sub>一</sub>、人在<sub>二</sub>大遼東<sub>一</sub>。応<sub>レ</sub>縁淡泊、無<sub>レ</sub>分<sub>二</sub>従容<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>是運庵真面目<sub>一</sub>、澄潭不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>臥<sub>二</sub>蒼龍<sub>一</sub>。

道場山運庵叟普巖自貽。

と記されており、その内容は明らかに妙心寺所蔵の頂相贊と同じである。しかも図柄もほぼ妙心寺のものと同じであって、この普巖の頂相もやはり曲糸に坐して右手に短策を持ち、左手で曲糸の端を握り締めた格好で描かれている上に、袈裟の環が妙心寺本と同じように存していない。末尾に「道場山の運庵叟普巖、自ら

貽す」とあるほかは、賛語は全く同じなのである。

この妙心寺と建仁寺常光院に所蔵される普巖頂相は明らかに普巖の直筆自賛そのものではなく、後代に「松源・運菴和尚像」ないし「松源下十祖図」として一括して画かれ、祖賛が付されたものであるから、普巖の頂相を画いた後、単に『運庵和尚語録』の自賛の語を書き記したとも解される。ただ、あるいは自賛のことばが明らかに普巖の作であり、しかも末尾に「道場山運庵叟普巖自貽」とある点、画像の図柄がほぼ同じである点などを重視すれば、実際にこの画像の基となった普巖自賛の頂相が日本国内の何れかに存し、これを巧みに摸写したものであった可能性も存しよう。妙心寺と常光院のどちらの画像がより古いものなのかは定かでないが、全く同じ図柄で描かれていることから、どちらかが他方を摸写したとも解されるが、あるいは両図がともに依拠した原本が中国から伝来して存していたのかも知れない。これらも道場山の普巖を描いた頂相および自賛の語であるから、原本が存したとすればやはり普巖晩年の姿を描いたものということになろう。

さらに福岡市博多の横嶽山崇福寺にも「二十八祖図」として禅宗初祖の菩提達磨より第二八代に当たる日本南浦紹明に至る歴代祖師の画像が残されており、その中の第二六番目に伝明兆筆とされる運庵普巖の画像も存している。崇福寺所蔵の運庵普巖頂相が「図Ⅵ」であって、普巖の画像の右上に「道場運庵禪師」という筆書きがあり、中央に普巖の半身像の肖像画が描かれ、左下段に「明兆筆」の筆書きが存している。ただし、実際には聖一派の画僧である吉山明兆（兆殿司、一三五二—一四三二）の作とは認め難く、中世後期以降に描かれた画像であろうと鑑定されている。しかもこの普巖の画像の表情は、日本各地に残る破庵派の無準師範頂相の面影に近似しており、先に示した大徳寺所蔵の普巖自賛の頂相に見る普巖の姿とはきわめて掛け離れたものである<sup>(7)</sup>。

また流布本の元禄本『運菴和尚語録』の冒頭には〔図Ⅶ〕のごとき木版刷りの「運菴禪師肖像」が収められているが、この払子を右手に持つ上半身の画像はそれまでの版本には見られないことから、新たに江戸中期に流布本が刊行される際に木版に彫られて挿入されたものであろう。ただし、その図柄は『仏祖道影』〔「仏祖正宗道影」とも〕に載る祖師図のごとき風貌で画かれており、自賛頂相に見る実際の普巖の姿などとは全く掛け離れた肖像画であるといつてよい。

現今、日本に残る運庵普巖の墨蹟としては、先に示した大徳寺所蔵の頂相に付された〔図Ⅱ〕の自賛のみであり、ほかに普巖には個別の墨蹟の類いは何ら伝えられていない。ただ、一つ注目されるのは、鎌倉山内の瑞鹿山円覚興聖禪寺（円覚寺）に所蔵される『仏日庵公物目録〕「一、墨蹟〈唐々〉」に「運庵真跡〈雲洞炊〉』という記載が存していることであろう。これによれば、かつて円覚寺開基の北条時宗（法光寺殿、道果、一二五二—一二八四）の廟所として名高い円覚寺山内の仏日庵には、普巖が揮毫した墨蹟が南宋か元より将来されて所蔵されていたことになろう。あるいはこれは天童山の石帆惟衍のもとから北条時宗のもとに惟衍の法語を持参して来日した西澗子曇あたりが将来したものかも知れないが、実際のところは何ら定かでない。普巖の墨蹟としては先の自賛頂相しか知られていないことから、「雲洞炊」という意味が定かでないものの、この普巖の真蹟が現に残されていれば、希少な価値が存したことであろう。<sup>(7)</sup>

### 参学門人について

すでに法嗣の虚堂智愚と石帆惟衍については別に論じたので、つぎに普巖のもとに集った参学門人についても一通りこれを整理しておきたい。はじめに侍者として『運庵和尚語録』を編集した門人について列記し



ておきたい。

はじめに「鎮江府大聖普照禪寺蓮庵和尚語」を侍者として編集した元靖についてであるが、この人は普巖が鎮江府丹徒県の寿丘山大聖普照禪寺に開堂出世したときから、すでにその門下にあつて侍者の職を勤めていた。普巖が大聖普照寺に開堂出世したのは開禧二年（二二〇六）二月のことであるから、元靖は普巖にとつて最初の参学門人であつたことになる。ただし、その後、元靖が如何なる活動をなしたのか、事跡などは何ら定かでない。

つぎの「真州報恩光孝禪寺語」を侍者として編集したのは智能であるが、収録された上堂語などはきわめて少ない。普巖の門人には「智」の字を系字に持つ禪者がおり、虚堂智愚も普巖のもとで正式に剃髮得度したものと見られることから、おそらく普巖は剃度の門人に「智」の字を系字として与えていたのであろう。その後、智能が如何なる活動をなしたのか、事跡などは何ら定かでない。

石帆惟衍は侍者として「安吉州道場山護聖万歳禪寺語」を編しているが、その参学は智愚とともに遅く、道場山にて初めて普巖に随侍したことが知られるから、晩年に普巖の法を嗣いでいることになる。惟衍の活動についてはすでに詳しく論じているので、ここで再説することはしない。

守徳は『運庵和尚語録』『法語』に「示守徳禪人」という法語が収められており、普巖から法語を付与されていることが知られる。法語の中に「寿丘」の語が存するから、守徳は普巖が寿丘山すなわち大聖普照寺に住持していた時期に参学していたことが知られ、かなり初期の門人であつたと見てよいであろう。当時、法語を与えるのはそのまま印可を意味するものではないが、普巖がそれなりに器量を認めていた学人であつたものと見られる。

すでに詳しく触れたが、大徳寺に現存する普巖の自賛頂相は副寺を勤めていた智密という禪者が道場山で

贊を請うたのに対し、普巖がこれに応じて揮毫したものである。普巖のもとには智能や智恵が存していることから、副寺の智密も普巖のもとで得度を受けた剃度の小師であったものと見られる。これによっても普巖が剃度の門人に「智」の字を系字として付与していたらしいことが確かめられよう。

乗禪者は法諱の上字が定かでないが、『運庵和尚語録』「偈頌」に「乗禪者帰蜀」が収められており、蜀の劍門（四川省）の出身であつて、蜀の地に帰る際に普巖より偈頌を得ているわけである。

洪維那は『運庵和尚語録』「偈頌」に「送洪維那」が収められており、普巖のもとで維那を勤めていた□洪という禪者が存したことが知られ、洪維那が席下を辞する際に普巖が偈頌を与えたものである。「破沙盆有児孫在」とあるから、洪維那は密庵咸傑の門流に属する虎丘派の禪者であつたことになり、おそらく普巖のもとで維那として接化を補佐していたことにならうが、具体的に如何なる素性の禪者を指しているのかは定かでない。

また普巖には在俗の徒として韋德通という処士が存しており、『運庵和尚語録』「法語」に「示龍華会首韋德通」という法語が収められている。処士とは官に仕えないで民間にある者の意であり、韋德通は普巖のもとで龍華会（弥勒法会）の法要を主催した人物であつたと見られる。「示龍華会首韋德通」の法語には、

抱道之士、根器不同、举措有異、凡出言吐氣、千聖莫知趣向。（中略）余丙寅歲季秋、來掃洒是刹。適辺事未寧、米餽湧貴、而会中供辨米麦不輟。蓋会首処士韋德通、正因出家、正因修行、正因操履、留心於法門。有年、補於常住者多矣。晚年之間、究竟向上一段光明、為敵生死照破昏暗超出三際。乃是不虛出家之志、袖軸炷香、求語警策。書此昭示云。

と記されているから、韋德通は丙寅の歳すなわち開禧二年（一一〇六）季秋九月に普巖が鎮江府の寿丘山大聖普照禪寺に開堂出世した頃から関わりが存したもののらしく、在俗の身ながら仏法に志しが深い抱道の士で

あり、後に普巖のもとで出家しているのではないかと見られる。

## おわりに

以上、南宋中期に活躍した運庵普巖という臨濟禪者の事跡と、この人のことばを集めた古刊本『運庵和尚語録』と流布本『運菴和尚語録』について考察してきたわけであるが、普巖は十刹位の道場山護聖万歳禪寺（一般には護聖万寿禪寺）に住持したとはいえ、当時としては際立つて注目された禪者というわけではない。しかしながら、普巖はその晩年に法嗣に虚堂智愚と石帆惟衍というすぐれた人材を打出し、彼らはやがて十刹から五山へと陞住して南宋末期に多大な化導を敷いており、その影響はやがて海を越えて日本へと及んでいる。おそらく普巖は限られた門人にしか嗣法を許さない厳格な性格であったものと見られ、その面で智愚と惟衍は普巖の心眼に真に叶った数少ない高弟であったことになろう。

普巖の法孫に当たたる南浦紹明や西澗子曇が鎌倉後期の日本禪林で活躍するに及んで、その法統の祖に当たたる普巖の評価も自ずと高まっていったのであり、『運庵和尚語録』ないし『運菴和尚語録』や「運菴普巖頂相」も日本禪林に将来珍重されるようになる。おそらく普巖自身は自らの法統がやがて中国叢林で断絶し、遙か日本禪林で現今まで存続するなどとは夢にも思わなかったに違いない。

普巖が二〇歳前後であった修行時代には、比叡山の覚阿（一一四一—？）が入宋して杭州錢塘県の北山景德靈隱寺において楊岐派の瞎堂慧遠に参じ、慧遠の法を嗣いで帰国している。その後も大日房能忍（深法禪師）が明州鄞県の阿育王山広利寺に弟子の練中と勝弁を使わし、大慧派の拙庵徳光から印可を得て日本で達磨宗を広めている。また明庵栄西（千光法師、一一四一—一二二五）が再度入宋して台州天台県の万年報恩光孝

寺や明州鄞県の天童山景德寺で黄龍派の虚庵懐敵に参じ、懐敵の法を嗣いで帰国している。普巖が法友の石鼓希夷とともに瞎慧遠や拙庵徳光に参学した可能性が存する上に、天童山の無用浄全や霊隠寺の松源崇嶽に久しく随侍している点を考慮するならば、覚阿・能忍・栄西ら日本僧たちの動向を普巖もある程度は意識していたはずであろう。

さらに普巖が示寂した直後には永平道元（弘法房）が入宋して天童山で曹洞宗の長翁如浄の法を嗣いで帰国している。普巖のもとを離れて後、虚堂智愚が杭州銭塘県の南屏山浄慈報恩光孝寺において如浄の薫陶を得た機縁も伝えられている。当時、しだいに頻繁になりつつあった日本僧の入宋求法を通して、普巖も遙か東方の日本に対して何らかの意識を持っていた可能性が存しよう。

禅宗は師資の法統を重んじる宗派であり、門流の隆盛とともに直系の祖師はしだいに注目されるようになる。この度、縁があつて運菴普巖という禅者の生涯と古刊本『運庵和尚語録』を考察することができ、改めて普巖の人となり、縁があつて運菴普巖という禅者の生涯と古刊本『運庵和尚語録』を考察することができ、改めて普巖の人となり、真摯に向かい合う機会が与えられたのは幸いであつた。

普巖の伝記に関しては「運菴禅師行実」を全面的に信頼すべきでないことが知られ、また語録においては古刊本『運庵和尚語録』が流布本『運菴和尚語録』に改められる際にかんがりの操作がなされている点、判明したことも重要である。後世の人の手が加わることによって、禅僧の伝記史料や語録の類が必ずしも訂正されるわけでないことは注意すべきであり、誤つて捉えられることの方が多いのかも知れない。かく言う私のこの論考も、あるいは後にかんがりの訂正を迫られるものとなる可能性も高いのである。

ところで、普巖が嘉定一五年（一二三二）八月四日に示寂したとすると、西暦二〇二一年八月四日こそ普巖の八〇〇回遠忌の正当ということになる。法嗣の虚堂智愚から法孫の南浦紹明へと法が伝えられて日本に松源崇嶽・運庵普巖の法統が導入され、やがて大河となつて日本禅林を席卷し、七五〇年にわたり綿々と

嗣法相統がなされてきた事実を思うとき、多くの祖師方の仏法相承の重みに改めて敬意を表するものである。

註

(1) 虚堂智愚が運庵普巖に参学した経緯については、佐藤秀孝「虚堂智愚の参学期の動静について(上)」(曹洞宗研究員研究紀要「第一九号」と同「虚堂智愚の参学期の動静について(下)」(曹洞宗研究員研究紀要「第二〇号」を参照されたい。また石帆惟衍の生涯については、佐藤秀孝「天童山の石帆惟衍について——虚堂智愚・西澗子曇および北条時宗と関わった南宋末期の臨濟禪者——」(駒澤大学仏教学部研究紀要「第六六号」を参照されたい。

(2) 南浦紹明が虚堂智愚に参学した動静については、佐藤秀孝「虚堂智愚と南浦紹明——日本僧紹明の在宋中の動静について——」(禅文化研究所紀要「第二八号」や、西尾賢隆「虚堂智愚から南浦紹明へ」(西山美香編「古代中世日本の内なる「禅」」(勉誠出版、アジア遊学)に所収)などを、巨山志源については、佐藤秀孝「虚堂智愚の嗣法門人について——南宋末元初の江南禅林における虚堂門下の動向——」(駒澤大学仏教学部研究紀要「第六四号」の「巨山志源」の項を、西澗子曇については、佐藤秀孝「西澗子曇の渡来とその功績——蒙古襲来を挟んで二度の来日を果たした中国禅僧の奇跡な生涯——」(駒澤大学仏教学部論集「第三八号」をそれぞれ参照されたい。

(3) 椎名宏雄「宋元版禅籍の研究」(大東出版社刊)では、わずかに覆宋版(五山版)の南北朝期刊「運庵和尚語録」と江戸版(江戸時代刊行本)の『運庵和尚語録』の存在を挙げるのみである。駒澤大学図書館編「新纂禅籍目録」の「運庵和尚語録」の項には、

- イ②一冊 ③宋、少瞻普巖 元靖編 ④朝鮮刊 ⑤蓬左
- ロ④五山版(南北朝刊) ⑤積翠
- ハ④古活字版(元和頃) ⑤松ヶ岡、岸澤、大東急(寛永古活卜)
- ニ④寛永一八(跋) ⑤松ヶ岡、岩崎
- ホ②一冊 ④元禄八江戸中川息障軒 ⑤駒大一二四—一三〇

へ②合 ⑤駒大正統蔵二編二六ノ四

と記されており、蓬左文庫所蔵の『運庵和尚語録』を朝鮮刊本と判断している。また五山版や古活字版などの古刊本を挙げ、さらに流布本「運庵和尚語録」として駒澤大学図書館所蔵のものを載せている。このほか、『慶應義塾大学付属研究所』斯道文庫撮影・建仁寺両足院蔵書マイクロフィルム目録初編(二〇一〇年一月、及古書院刊)や赤尾栄慶「建仁寺両足院聖教目録I」(二〇〇八年三月、京都国立博物館刊)によれば、京都東山建仁寺の塔頭両足院にも第四五函の

所蔵典籍として流布本と共に元和・寛永期の古活字版が伝えられている。

- (4) 松源崇嶽の法を嗣いだ門人であつて語録が編集された事実が知られている禪者としては、第一に『天童寺志』巻八「表貽放」の「晋陵尤焯、天目禪師語録序」によつて、滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）に『天目禪師語録』が存したことが判明する。また破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一—二四九）の『仏鑑禪師語録』巻五「序跋」に「跋三雲竇語録」「跋三石巖語録」「跋二大歇語録」が収められていることから、雲巢道巖（雲窠）に『雲巢和尚語録』が、石巖希璉に『石巖和尚語録』が、大歇仲謙（一一七四—一二四四）に『大歇和尚語録』が存し、それぞれ師範が跋文を寄せて編集刊行されたことが判明する。ただし、『雪竇寺志』巻六上「塔銘」に載る「大歇謙禪師塔銘」には、仲謙の『大歇和尚語録』の編集に関するような記事は見られない。一方、無明慧性と現存する『無明和尚語録』については、佐藤秀孝「無明慧性の活動と『無明和尚語録』——建長寺開山蘭溪道隆を育成印可した南宋禪者——」（駒澤大学禅研究所年報 第二一号、平成二十一年二月）を参照されたい。

- (5) 川瀬一馬『五山版の研究』では『運庵和尚語録』について、南北朝刊。宋少瞻普巖撰。元靖編。一卷。一冊。左右双辺（単辺交れり）、無界、十行十八字。匡郭内、縦六寸三分、横四寸二分。総紙数十六葉（普照（四丁）・光孝（二丁）・万歳（三丁）語録、法語（三丁）、賛仏祖、頌

古、偈頌（以上四丁）、第九葉以下は文字がやや小さく、版式も若干異つてゐるが、補刻又は別版補配ではなく、原来の版式上の特色である。

伝本稀に、石井氏積翠軒文庫（天寧寺正尊捨入旧蔵）・国立国会図書館蔵の二本のみである。

(二) 運庵和尚語録には右と別版が一種あり、版心が丁数附刻のみである点まで、その覆刻であることを思はしめるが、或は補刻本であるかもしれない。この種の伝本は唯一つ三井家旧蔵本を見るにすぎない。匡郭内、縦六寸一分、横四寸一分五厘。

と記されており、その書誌的な考察がなされている。これによれば、五山版としては石井積翠軒本（現在は駒澤大学図書館所蔵）と国立国会図書館本および三井家旧蔵本の三点が存していることになる。ちなみに蓬左文庫所蔵の宋版（または朝鮮刊本とも）は、蓬左文庫の駿河御讓本（一〇四—一四六）であり、表紙の左上に縦に「運庵和尚語録 全」と手書きで記され、縦二三・五センチ、横一七・二センチの大きさである。また半丁は一八字、一〇行となつており、ほぼ五山版（覆宋版）と同じであつて、総紙数は一六丁で、内訳は普照寺が四丁、光孝寺が一丁半、万歳寺が三丁半、法語が二丁半、賛仏祖（自賛を含む）・頌古・偈頌で四丁半となつている。所蔵印などは何も押されていないため、所蔵者がどのように変遷して現今に至つてゐるのかは定かでない。

- (6) 駒澤大学図書館に所蔵される五山版『運庵和尚語録』は表

紙に「運庵録全」とあり、第一丁見開きの上段右に「積翠軒珍蔵」の印、第一丁下段右と末尾丁下段に「祥雲菴常住」の印が押されている。積翠軒とはいままでなく石井積翠軒のことであり、祥雲菴はそれ以前の所蔵印と見られる。この版本は駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』で石井積翠軒所蔵として載る五山版であったことが知られる。祥雲菴とは京都の東山建仁寺に存した祥雲庵（すでに廃庵）を指すものと見られ、『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」の「諸塔」の「一山派」によれば「祥雲菴、相山禾上」とあるから、祥雲庵は建仁寺山内に建てられた一山派の相山良永（一三一九—一三八六）の塔頭であったことが知られる。ただし、いま一つの推測として、この祥雲庵が註(9)で示す大徳寺派の実翁宗著ゆかりの武蔵（東京都）広尾の瑞泉山祥雲寺の前身としての祥雲庵であった可能性も存していよう。

(7) 松ヶ岡文庫には一絲文守（定慧明光仏頂国師、一六〇八—一六四六）が所持していた表題『運菴和尚語録』（クハ七八）が所蔵されており、表題に下に「糸和尚手澤本」と記されている。やはり一丁表の右下に「積翠軒文庫」の朱印が押され、二丁目表の右下に「式絲」の朱印が押されていることから、もとは石井積翠軒の所蔵であったことが知られる。ただし、内題の内容は「鎮江府大聖普照禅寺運庵和尚語録」と記され、しかも半丁が縦一八字、横一行となっているから、明らかに古活字版以前の古刊本である。語録が終わった後に、一絲文守書写と見られる筆で北磻居簡の「送岩雲菴

帰四明」の偈頌と「炎宋安吉州道場山護聖万歳禅寺運菴禅師行実」が筆写されており、末尾には別筆で「丹州法常禅寺常住、全部一冊」と記されている。これには江月宗玩の跋文が存していないことから、それ以前に文守のもとに伝えられた古活字版の写本と見られ、文守が寛永一八年に創建した丹波（京都府）の法常寺すなわち現今の亀岡市畑野町千ヶ畑垣内の大梅山法常寺に所蔵されていたものであろう。このほかに「建仁寺両足院聖教目録Ⅰ」によれば、京都東山建仁寺の両足院にも第四五函に江戸前期の『運庵和尚語録』の刊本が所蔵されている。また京都大学図書館には『運庵和尚語録』の写本（蔵・一七ヤ・三）が所蔵されている。その影印を取り寄せてみたところ、表題には「運庵和尚語録全」とあり、内容は古刊本を筆写したものであることが知られ、配列は蓬左文庫本などと同じく半丁が一八字、一〇行で筆写されている。ただ、語録が終わった後に「以下写本」として「炎宋吉州道場山護聖万歳禅寺運庵禅師行実」を載せている点が注目され、「吉州」とあるのは「安吉州」の誤写であるが、「運菴禅師行実」ではなく「運庵禅師行実」となっている。

(8) 江月宗玩の事跡については『龍宝山大徳禅寺世譜』に「一百五十六 江月」として伝記が載せられている。また竹内尚次『江月宗玩 墨蹟之写（禅林墨蹟鑑定日録）の研究（上）』（昭和五十一年、国書刊行会刊）の末尾に「江月禅師とその鑑定日録『墨蹟之写』について」として詳しい伝記が記されている。さらに吉澤勝弘編著『江月宗玩』欠伸稿訳

註」乾・坤二巻が思文閣出版より刊行されており、宗玩の語録「欠伸稿」の詳しい訳註研究がなされている。

(9) 実翁宗著については『龍宝山大徳禅寺世譜』に「二百七十二」実翁」として簡略な伝記が知られており、東京都渋谷区広尾の瑞泉山祥雲寺の末寺である香林院にお伺いし、住職の金嶽宗信氏から情報を得ることができた。宗著は景德院四世や香林院二世を経て本寺の祥雲寺に住し、さらに大本山大徳寺や品川の東海寺に輪住している。実際に香林院には宗著の手沢本として『実翁和尚法語(自筆)』一冊や仮題「実翁和尚東海寺入寺開堂法語」一冊が所蔵され、また「実翁相手沢」として『臨濟録抄』一冊や『碧岩一白則抄』一冊も存している。さらに宗著自撰『故靈山徳禅寺開山絶山和尚道行記』軸装や「実翁宗著自賛頂相」の絹本彩色一軸なども残されている。なお、宗著が第四世に住持した景德院は祥雲寺の八末庵の一つであったが、古くに同じ祥雲寺の末寺である妙高山東江寺と合併したとの指摘を受けている。

(10) 李國玲編『宋僧著述考』(四川大学出版社)では「蓮菴和尚語録」について、

蓮菴普巖禅師語録(蓮菴和尚語録) 一卷、存。

普巖撰、釈元靖編。語録卷末有無名氏撰《炎宋安吉州

道場山護聖万寿禅寺蓮菴禅師行実》、日僧末宗著元禄七年(二六九四)撰《跋》。

とあり、「行実」については誰の撰か不明としているが、跋文を「日僧末宗著」の撰としているのは「日僧末属比丘宗

著」の撰と記すべきものである。また跋を通した考察として、按…《跋》知、日本境内在元禄年間(清康熙年間)尚存有旧刻、今未見伝本。今統藏経第貳編第二六套第四冊収録。

と記されている。ただし、李國玲氏はいまだ元禄本すなわち流布本『蓮菴和尚語録』や古刊本『運庵和尚語録』などは閲覧する機会を得ていないものらしく、『統藏経』所収の活字本によって論じているようである。

(11) 『統伝燈録』『増集統伝燈録』以降に編纂された禅宗燈史で運庵普巖の章を載せているのは、『五燈厳統』巻二「安吉州道場山運庵普巖禅師」の章、『五燈会元統略』巻三上「安吉州道場山運庵普巖禅師」の章、『統指月録』巻四「湖州道場運庵普巖禅師」の章、『統燈正統』巻二〇「湖州府道場運菴普巖禅師」の章、『統燈存彙』巻三「湖州道場運菴普巖禅師」の章、『継燈録』巻二「安吉州道場山運菴普巖禅師」の章、『祖燈大統』巻七六「湖州府道場運菴普巖禅師」の章、『五燈全書』巻四八「湖州道場運菴普巖禅師」の章などであるが、いずれも『統伝燈録』や『増集統伝燈録』の記事の範疇を出していない。

(12) 「蓮菴禅師行実」は松ヶ岡文庫所蔵の寛永一八年刊の古活字版の重修本『運庵和尚語録』にすでに収録されていることから、流布本に至って新たに収められたものでないことが知られるが、具体的に如何なる禅者によって撰述されたものかは定かでない。



(13)

この点について、国際日本文化研究センター准教授の榎本涉氏から得た情報によると、建仁寺両足院に『古德行状像贊』一卷が所蔵されており、室町後期頃の筆写であつて、複数の冊子を合綴して両足院主の高峰東峻が目次を付している。冒頭五点に松源崇嶽・運庵普巖・石帆惟衍・西澗子曇・嵩山居中の伝を収めているとされる。これはもともと大通流の嵩山居中（大本禅師、一二七七一—三四五）の塔所である建仁寺広燈庵の旧蔵書と見られ、広燈庵の廃絶に伴つて両足院へと流出したものと推測される。ただし、実際に両足院に何つて住職の伊藤東文師に尋ねてみたが、『古德行状像贊』の所在は確認できなかった。とりわけ伝記の不明な運庵普巖と石帆惟衍について、その法孫に当たる嵩山居中や門流の広燈庵の禅者たちがどのように伝承していたのかは興味深いものが存するので、今後の課題としたい。

(14)

東陽英朝は美濃（岐阜県）加茂郡の人で、伊勢守護の土岐持頼（？—一四四〇）の子として生まれている。幼くして京都天龍寺にて夢窓派の玉軸英種（水上王子）に師事し、後に龍安寺に到つて大応派（妙心寺派）の雪江宗深に参じて法を嗣いでいる。文明一二年（一四八〇）に丹波（京都府）船井郡の八木山龍興寺の住持となり、翌年に大徳寺第五三世に晋山している。文明一五年に尾張（愛知県）の瑞泉寺に住持し、延徳元年（一四八九）には妙心寺第一三世に晋山している。明応三年（一四九四）に法雲山定慧寺を、同八年に龍慶山少林寺を、文亀元年（一五〇一）には臨滹山大仙寺をそれぞれ

美濃地内に創建し、永正元年（一五〇四）八月二四日に世寿七七歳で少林寺に示寂している。著作として『江湖風月集略註』『五家正宗贊抄』『碧巖録抄』『宗門正燈録』『正法山七祖伝』『正法山六祖伝』『少林無孔笛』『禪林句集』などを著している。伝記としては単独のものが存しておらず、『延宝伝燈録』巻二八「京兆大徳東陽英朝禅師」の章や『本朝高僧伝』巻四三「京兆大徳寺沙門英朝伝」のほか、『大徳寺世譜』『増補妙心寺史』『美濃大仙寺史』などに依るしかない。

(15)

『宗門正燈録』一二巻は大応派（妙心寺派）の東陽英朝が編集したものであり、六祖下の南嶽懷讓（大慧禅師、六七七一—七四四）より日本の宗峰妙超（大燈国師）に至る臨濟宗直系三代の略伝と語録を略出して並べている。巻頭の「宗門正燈録序」には「文亀初元辛酉仲冬念七日、濃陽少林英朝盟雪拝書」とあり、英朝が戦国期の文亀元年（一五〇一）一月二七日に美濃（岐阜県）の龍慶山少林寺において自ら序を付している。なお、少林寺は現今の岐阜県各務原市那加新加納に存し、東陽英朝の「辞世遺偈」一幅の紙本墨書（岐阜県文化財）などゆかりの品を所蔵している。

(16)

南院慧顛については『景德伝燈録』巻二二、『天聖広燈録』巻一四、『建中靖国統燈録』巻一、『宗門聯燈会要』巻一一、『五燈会元』巻一一などに章が存するが、いずれも詳しい事跡を伝えていない。『仏祖綱目』巻三四では「壬子、南院慧顛禅師示寂（興化獎法嗣、臨濟第三世）。慧顛住南院、壬子入滅」とあり、慧顛が後周の広順二年（九五二）に示寂

したとするが、『宗統編年』巻一八では「庚寅（唐長興元年）臨濟三世汝州南院（一名宝応）祖示寂（綱目作壬子年誤）」とあり、『仏祖綱目』の記事を非として後唐の長興元年（九三〇）に示寂したとする。『古尊宿語録』巻七に『汝州南院禪師語要』を収めている。

(17) 大冥恵団（慧団とも）は大応派（妙心寺派）に属する禪者であるが、詳しい経歴や嗣承などが定かでない。尾張葉栗郡笹野すなわち現今の愛知県一宮市笹野の万松山妙光禪寺の住持を勤めていることから、妙光寺住職の桐山大幹氏に問い合わせたところ、過去帖や位牌を調べて頂くことができたことから、その成果をまとめておきたい。恵団は石橋村（未詳）の高桑氏の出身で、妙光寺の第一四世となっており、妙光寺に住山すること二〇年、この間、近隣の西海戸（一宮市浅井町西海戸）の大小山阿弥陀寺など末寺の開山ともなっているらしい。その後、恵団は文化二年（一八〇五）に「尾州前妙光団大冥」の肩書きで『釈迦応化略諺解』一卷を編集刊行しており、文化元年の重陽日（九月九日）の跋文では「団大冥記于德秀禪院」と署名している。また文化六年（一八〇九）には同じく「尾州前妙光団大冥」の肩書きで『宗門畧列祖伝』四巻を編集し、尾張（愛知県）東壁堂より刊行されている。徳秀院とはかつて妙光寺の境内に存した塔頭の名称であり、これに居して恵団は著作に専念し、文政二年（一八一九）六月一三日に世寿六六歳で示寂している。妙光寺の恵団の位牌には「前住瑞泉大冥団和尚大禪師」と刻まれており、

瑞泉とは愛知県大山市に存する青龍山瑞泉寺のことであろう。なお、妙光寺は元弘二年（正慶元年、一三三二）に鎌倉の瑞鹿山円覚寺の義海（未詳）が創建したとされ、その後、永正元年（一五〇四）に大応派の笑溪□間が再興して妙心寺派に改めたとされる。

(18) 『墨蹟祖師伝畧記』二巻は茶人の藤野宗郁の編集になり、文化二年（一八〇五）に京都の梶川芸香堂より出版され、安政二年（一八五五）にも江戸の須原屋伊八によって刊行されている。藤野宗郁は京都の人で、江戸後期の茶人として知られるが、生没年は定かでない。宗郁居士と称し、松陰亭と号しており、茶掛けに用いられた中国・日本の禅僧の略伝をまとめて『墨蹟祖師伝畧記』を著しているわけである。なお、『墨蹟祖師伝畧記』に関しては、今枝愛眞『新訂図説』墨蹟祖師伝（柏林社刊）が存している。

(19) この点、東陽英朝は『宗門正燈録』巻一〇の「湖州道場山運庵普岩禪師」の章において、岩黙の表記に因んで普巖を蘇州（江蘇省）の人ではないかとする説を挙げているが、これはあくまで英朝の推測にすぎず、諸般の状況からして普巖が蘇州の出身であったとする説は取れないであろう。

(20) 青原下の道場如訥に関しては『景德伝燈録』巻一五「湖州道場山如訥禪師」の章が存しているが、

師目有重瞳、垂手過膝。自翠微受訣、乃止于道場山、薙草卓庵、学徒四至、遂成禪苑、広闡法化。所遺壞納三事及開山拄杖・木屐、今在影堂中。

という簡略な記事が載せられるのみで、示寂した年月日や世寿・法臘なども記されていない。如訥は青原下の翠微無学（広照大師）の法を嗣いでおり、その法系としては、

青原行思—石頭希遷—丹霞天然—翠微無学—道場如訥

と継承されているから、彼の丹霞天然—智通禪師、七三九—八二四）の法孫に当たっており、翠微無学の法を嗣いだ同門としては授子大同（慈濟大師、八一九—九一四）や清平令遵（法喜禪師、八四五—九九一）らが存している。如訥の忌日が一月五日であったことは、いまのところは『運庵和尚語録』によってしか確かめられないが、おそらく当時の道場山ではそのように伝承されてきたのであろう。

(21) 北磻居簡が撰した「夷禪師碑陰（靈隱）」に関しては、石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究（三）」（『駒澤大學仏教学部論集』第一五号）の「資料二二」夷禪師碑陰（靈隱）」に書き下しと簡略な訳註が存しており、本稿もその成果に依拠するところが大きい。

(22) 『天童寺志』巻八「表貽攷」には「放翁陸游、無用禪師語録序」が収められているが、これはもともと陸游（放翁）の『渭南文集』巻一五「序」に「天童無用禪師語録序」として載るもので、陸游が嘉定元年（一二〇八）九月に記している。元代後期に活躍した松源派（金剛幢下）の了庵清欲（南堂、慈雲普濟禪師、一二八八—一三六三）の語録である『了菴和尚語録』巻九「題跋」にも「陸放翁所製無用禪師語録序」が収められている。『天童無用禪師語録』が現今に残されて

いたならば、法を嗣いだ希夷のことはもちろん、普巖が浄念に参学した事跡も窺うことができたはずであろう。

(23) 『北磻文集』巻一〇「塔銘」の「夷禪師碑陰（靈隱）」に、

石鼓既得、銘于秘書侍郎官高公似孫。重逸抱、銘泣于余。曰、先師貶、剝諸方、不レ小貸、所レ嚴者子一人耳。盍一言為レ之發。先師闕、繫此山、者甚至、子所レ見、也敢再拜而申レ之。開禧末、蝗蔽レ天、赤地連、阡陌、列利謝遣客。比丘主者、心印佛、衆自用、不レ推消息、盈虛搏節、而權レ其變、撞鐘伐鼓、延レ接方來、如レ平居無事時。寺亦幾殆為レ倚城社者。師齊歿而有レ之。是時高峯之鬼、能禍レ福人。人嘉神休、莫レ敢不レ至。寺則頓裕晏安、易レ溺、前日之匱。邈如未レ始見レ深禪正修。漫不レ復レ理、以レ蟻蟲飽適、為レ龍象レ蹴踏。本色衲子、掩レ鼻而過レ之、居無レ何、厭足心生、去而レ之。先師來レ自乳竇、喟然曰、昔問レ道于是、弘海レ、弘照、故家遺俗、猶有レ存者、今掃レ土矣。遂収レ餘榮、因レ陋就レ簡。仆者支、漏者直、尤無レ良者則去。諸尊者艾レ礼レ賢、又寬レ苛細、謹レ程度。懷レ同志之士、稍刷レ前日因仍之耻、而旧貫漸復。則又曰、僧者レ先祖所レ自出。今也貨殖、賢不肖無レ禁、乃博訪レ檀施、爰レ誦レ爰度。選レ能誦レ法華楞嚴レ覺レ泊馬鳴肇師言者、謂レ之合格、而得レ度。冀レ昌レ厥善類。然則日暮途遠、尺瘞而止矣。銘則飲レ書。余聞而哀レ之、繫レ之以レ三字八章。章四句。辭曰、

網有レ綱、萬目張。法依レ人、建レ勝幢。人壞レ法、人自

壞。法常住、竟安在。譬諸谷、谷有<sub>レ</sub>神。彼不<sub>レ</sub>呼、  
胡能<sub>レ</sub>聲。声既沈、響斯絕。鎮長靈、広長舌。矧石鼓、  
章<sub>二</sub>厥号<sub>一</sub>。曰<sub>二</sub>希夷<sub>一</sub>、洞<sub>二</sub>玄奧<sub>一</sub>。奧入<sub>レ</sub>玄、昭昭然。謂  
不<sub>レ</sub>見、誰<sub>レ</sub>樊垣。生<sub>レ</sub>曷勞、死<sub>レ</sub>奚息。所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>死、靡<sub>レ</sub>有  
極。草<sub>二</sub>芊芊<sub>一</sub>、泉<sub>二</sub>濺濺<sub>一</sub>。天在<sub>レ</sub>水、月在<sub>レ</sub>天。

と記されているから、希夷には高似孫が撰した「靈隱石鼓禪師塔銘」といった表題の塔銘が先に靈隱寺に建てられ、後にその碑陰に「夷禪師碑陰」の銘文が居簡によって撰されたことが知られる。希夷は生涯にわたって普嚴と交友をなした重要な禪者であることから、つぎに「夷禪師碑陰」を書き下してみようならば、およそつぎのごとくになろう。

石鼓、既に銘を秘書侍右郎官の高公似孫に得たり。重逸、銘を抱きて余に泣きて曰く、「先師は諸方を貶削して小しも貸<sub>ゆ</sub>さず、嚴かる所の者は子が一人のみ。盍んぞ一言にて之れが為めに発せざらん。先師、此の山を関繫すること甚だ至れり。子が見る所、也た敢て再拜して之れを申せ」と。開禪の末、蝗は天を蔽い、赤地は阡陌を連ね、列刹、客比丘を謝遣す。主者心印、衆を佛きて自ら用い、消息の盈虚を推して、節を搏して、其の変を権せず。鐘を撞き鼓を伐ち、方来を延接すること、平居無事の時の如し。寺亦た幾殆く城社に倚る者と為らんとす。師斉、敏いて之れ有り。是の時、高峯の鬼、能く人を禍福す。人、神休を嘉しみ、敢えて至らざる莫し。寺は則ち頓に裕かにして晏安し、前日の置しきに溺るるに易わる。邈

如として未だ始めより深禪正修するを見ず。漫りに理に復せず、蟻虫の飽適するを以て、龍象の為めに蹴踏す。本色の衲子は、鼻を掩いて之れを過ぎ、居ること何くも無く、厭足の心生じ、去りて它に之く。先師、乳竇より来たり、喟然として曰く、「昔、道を是に問い、仏海・仏照、故家の遺俗、猶お存する者有るも、今は土を掃えり」と。遂に餘衆を収め、陋に因りて簡に就く。仆す者は支え、漏れる者は苴み、尤も良無き者は則ち去る。諸尊者爰は賢なるを礼し、又た苛細を寛め、程度を謹む。同志を懐くの士、稍や前日の因仍の耻を刷りて、旧貫漸く復す。則ち又た曰く、「僧とは仏祖の自ら出づる所なり。今や貨殖し、賢不肖にして禁ずる無く、乃ち博く檀施を訪ねて、爰に誣り爰に度す。能く法華・楞嚴・円覚泊び馬鳴・肇師の言を誦するを選び、之れを合格と謂いて、度するを得たり。冀わくは厥の善類を昌んにせんことを。然れば則ち日は暮れ途は遠くして、尽く瘁れて止まん」と。銘は則ち書くことを缺く。余、聞きて之れを哀み、之れを繋ぐに三字八章・章四句を以てす。辞に曰く、

網に綱有りて、万目張る。法は人に依りて、勝幢を建つ。人、法を壊せば、人自ら壊る。法は常住にして、竟に安在す。諸れを谷に譬うれば、谷に神有り。彼、呼ばずんば、胡んぞ能く声えん。声既に沈めば、響き斯に絶えん。鎮長の靈、広長の舌。矧んや石鼓、厥の

号を章わす。希夷と曰うは、玄奥を洞かにす。奥く玄に入れば、昭昭然たり。見えずと謂うも、誰か樊垣せん。生は曷んぞ勞せん、死は奚んぞ息まん。死せざる所、極まり有ること靡し。草は芊芊たり、泉は濺濺たり。天は水に在り、月は天に在り。

「夷禪師碑陰」には希夷の行実に関する記載は少なく、わずかに希夷が若くして杭州靈隱寺で楊岐派の瞎堂慧遠（仏海禪師）や大慧派の拙庵徳光（仏照禪師）に参学したこと、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺に住持したこと、徳光の法を嗣いだ海門師齊の後席を継いで靈隱寺に勅住したことなどが知られるにすぎない。なお、碑陰を居簡に依頼した重逸についてはその事跡が定かでないが、希夷を「先師」と尊称していることから、希夷の嗣法門人か参学門人の一人であったものと見られる。また『靈隱寺志』巻二「古塔」の「南宋塔」には「石鼓禪師塔、永安院側、具和尚重修」とあり、同巻三下「住持禪祖」にも「石鼓希夷禪師、臨濟宗、嗣無用全公。為本寺二十八代。塔永安別苑、今存」とあるから、希夷は靈隱寺の第二八代であったとされ、方丈の後山に存した永安塔院の側に墓塔や塔銘などが建てられたことが知られる。

(24) 『増集統伝燈録』巻一には「天童無用全禪師法嗣」として「杭州靈隱石鼓希夷禪師」の章が存しているが、伝記的な記載は何ら記されていない。ただ、「和梁山遠禪師十牛図頌」一句法与梁山相埒、理趣超卓、反有過焉」として楊岐派の廓庵師遠（則公）の『十牛図』に和韻した頌が載せられてい

ることから、希夷は詩僧としても知られた禪者であったものらしい。実際に統蔵本『十牛図頌』には「石鼓夷和尚」と「壊納理和尚」の和韻が収められている。希夷とともに『十牛図』の頌に和韻している壊納大璉は、楊岐派の五祖法演―大隋南堂元静―釣魚台石頭自回―雲居蓬庵徳会―萬松壊納大璉と嗣承する臨濟禪者であり、法祖の石頭自回は廓庵師遠とは同門に当たっている。ただし、『禪門諸祖師偈頌』巻下之下（巻四）にも「梁山廓庵則和尚十牛頌」が収められているが、そこには希夷と大璉の和韻はともに載せられていない。

『十牛図』については梶谷宗忍・柳田聖山・辻村公一『信心銘・証道歌・十牛図・坐禪儀（禪の語録16）』（筑摩書房）の「十牛図」の箇所を参照。ただし、本書では石鼓希夷の和韻は載せられているが、壊納大璉の和韻は省略されている。一方、上田閑照・柳田聖山『十牛図―自己の現象学―』（ちくま学芸文庫）の柳田聖山担当の訳註では、希夷の和韻も大璉の和韻も載せられている。ただし、希夷と大璉については『増集統伝燈録』巻一に伝ありとするのみで、詳しい伝記は不明とする。

(25) 楼鑰（字は大防、攻媿主人、一一三七―一二二三）の『攻媿集』巻五七「記」の「天童山千仏閣記」によれば、采西が虚庵懷敏に随侍して天童山景德寺に移ったのは淳熙一六年（一一八九）のこととされ、また帰国した采西が日本から天童山の虚庵懷敏のもとに良材を送り、千仏閣が完成したのは紹熙四年（一一九三）のことであったと記されている。

(26)

長翁如淨の『如淨和尚語録』『臨安府淨慈禪寺語録』に、

大石鼓至上堂。独睹<sup>レ</sup>頂門眼、大人具<sup>レ</sup>大見、掀<sup>レ</sup>翻<sup>レ</sup>衲裡天、大智具<sup>レ</sup>大機。以<sup>レ</sup>大入<sup>レ</sup>小、万化普施。且道、以何為<sup>レ</sup>驗。鶯遷<sup>二</sup>喬木<sup>一</sup>、調<sup>二</sup>新舌<sup>一</sup>、梅吐<sup>二</sup>清香<sup>一</sup>、發<sup>二</sup>旧枝<sup>一</sup>。

という上堂が収められているが、ここにいう「大石鼓」というのが石鼓希夷のことを指しているものらしい。淨慈寺に初住していた頃の如淨は靈隱寺の希夷と親しく交遊していたことを裏付けるものと見てよいであろう。鏡島元隆『天童如淨禪師の研究』（春秋社刊）の二二〇頁には「大石鼓至上堂」の書き下しと現代語訳が存している。如淨もその参学期に無用淨全や松源崇嶽に参学した経験が存し、その頃から希夷とも親しい交友が存したものであろう。一方、普嚴の高弟である虚堂智愚も『虚堂和尚語録』巻六「仏祖讚」において、

靈隱石鼓夷和尚。

面目<sup>レ</sup>嚴冷、狼氣<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>雲。擯<sup>レ</sup>撥<sup>レ</sup>翁大木、顛倒<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>樹、品<sup>レ</sup>藻  
杲罵<sup>レ</sup>天、見地<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>親。咬<sup>レ</sup>牙<sup>レ</sup>嚙<sup>レ</sup>齒、走<sup>レ</sup>石<sup>レ</sup>飛<sup>レ</sup>塵、鷲峯<sup>レ</sup>別  
有<sup>二</sup>劫<sup>一</sup>壺<sup>レ</sup>春。

という希夷に対する祖賛を残しており、希夷が無用淨全（越州翁大木）の法嗣で大慧宗杲（杲罵天）の法孫に当たることが強調されている。ちなみに鷲峰とは智愚が靈隱寺に存した松源崇嶽の塔所鷲峰庵に隠閑していたときの自称であり、おそらく淳祐年間（一二四一—一二五二）の末頃に智愚が鷲峰庵の松源塔下に居た時、何者かが希夷の頂相を持参し、智愚に呈して賛を求めたものであろう。

(27)

『如淨和尚語録』『讚仏祖』には、

無用頂相。  
打<sup>二</sup>殺<sup>一</sup>宣州花木瓜、爆<sup>二</sup>出<sup>一</sup>越州翁大木。血滴滴風袞劍輪、  
黑漫漫彌天罪過。喫<sup>二</sup>描<sup>一</sup>邈者箇賊頭、三千里外誰耐、  
面熱而汗迸流。

という祖賛が載せられている。宣州の花木瓜とは宣州（安徽省）出身の大慧宗杲のことであり、ここでは悪辣な手段を用いた宗杲と淨全の師資を賛仰したものであって、おそらく如淨はその参学期に淨全の接化に浴した経験が存し、その頃から希夷や思卓なども交友したものであろう。

(28)

『続修廬州府志』巻一九「祠祀志下（寺觀附）」の「廬江  
県」によれば、

治父寺、在<sup>二</sup>南<sup>一</sup>慕善郷、建<sup>レ</sup>於唐。又云、在<sup>二</sup>県<sup>一</sup>東北二十  
里、唐伏虎禪師建。天祐中有<sup>レ</sup>僧主<sup>二</sup>寺中<sup>一</sup>、或半月休<sup>レ</sup>糧、  
或經<sup>レ</sup>旬入定。夜行<sup>レ</sup>邨落、虎患屏息。上聞賜<sup>二</sup>号<sup>一</sup>山頂、  
即伏虎菴。光祿寺卿吳贊誠、未<sup>レ</sup>遇時誦<sup>二</sup>書<sup>一</sup>其中。

とあり、治父寺が廬州（安徽省）廬江県東北二〇里の南慕善郷に在り、唐代に伏虎禪師が建てたと伝えられる。また同じく巻五九「方外伝附」の「伏虎禪師」の項には、

伏虎禪師、不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>何<sup>一</sup>許人、亦無<sup>二</sup>姓<sup>一</sup>名。昭宗光化三年、  
結<sup>二</sup>庵<sup>一</sup>治父山絶頂、賜<sup>レ</sup>号<sup>二</sup>孝慈伏虎禪師<sup>一</sup>。及<sup>二</sup>吳<sup>一</sup>王楊行密  
捨<sup>二</sup>宅<sup>一</sup>名<sup>二</sup>光化寺<sup>一</sup>、請居<sup>レ</sup>之。師厭<sup>二</sup>其<sup>一</sup>囂雜、天復二年、別  
構<sup>二</sup>一<sup>一</sup>庵於治父之陰。弟子受<sup>レ</sup>戒者、八百餘衆。

という記事が存しており、唐の光化三年（九〇〇）に治父山

の絶頂に庵を結んだ伏虎禪師（孝慈伏虎禪師）が呉王楊行密の帰依を得て光化寺の開山となった記事を伝えている。唐末に活躍した伏虎禪師といえは、湖州烏程県の道場山護聖万寿寺の開山始祖となった青原下の道場如訥（伏虎禪師）が想定されるが、唐末に治父寺を開いた伏虎禪師と同じく唐末に道場山を開いた伏虎禪師が同一人物であったのか否かは定かでない。如訥は青原下の翠微無学の法嗣であり、投子大同や清平令遵（法喜禪師、八四五一九一）らと同門に当たることから、光化三年や天復二年（九〇二）の記事とは時期的に一応は合致している。

(29) 『宗門聯燈会要』卷一八「明州天童咸傑禪師」の章に、  
福州人也。徧扣諸方、後依華禪師。華問、如何是正法眼。師云、破砂盆。華頷之。

と簡略な問答を伝えているが、『五燈会元』卷二〇「慶元府天童密庵咸傑禪師」の章では、

後謁二応庵於衢之明果。庵孤硬難入、屢遭呵。一日庵問、如何是正法眼。師遽答曰、破砂盆。庵頷之。未幾、辞回省親。庵送以偈曰、大徹投機句、当陽廓二頂門、一相從今四載、微語洞無痕。雖未付鉢袋、氣宇吞二乾坤、却把正法眼、喚作破砂盆。此行將二省觀、切忌便蹀跟、吾有二末後句、待二帰要二汝邊。

とあって、問答のほかに応庵曇華が示した送別の偈頌も載せられており、そこに「却て正法眼を把りて、喚んで破砂盆と作す」と記されている。

(30) 後世の『祖燈大統』卷七六「少林第二十六世之一」には「靈隱嶽禪師法嗣」として、

寧波府天童滅翁天目文礼禪師・湖州府道場運菴普嚴禪師・鎮江府金山掩室善開禪師・□□府華藏無礙覺通禪師・温州府龍翔石巖希璉禪師・台州府瑞巖少室光陸禪師・湖州府道場北海悟心禪師・寧波府雪竇無相範禪師・台州府瑞巖雲巢嶽禪師・寧波府雪竇大歇仲謙禪師・杭州府淨慈谷源道禪師・蘇州府虎丘蒺藜曇禪師・諾菴肇禪師・秘監陸游居士。

という一四人が記されており、文礼について同じく系統がしばらくくつづいた普嚴と善開と覺通の三禪師が先に置かれている。これに対して『五燈全書』卷四八には「靈隱嶽禪師法嗣」として、

寧波府天童滅翁天目文礼禪師・温州龍翔石巖希璉禪師・台州瑞巖雲巢嶽禪師・華藏無礙覺通禪師・杭州淨慈谷源道禪師・湖州道場北海悟心禪師・明州雪竇大歇仲謙禪師・諾菴若肇禪師・湖州道場運菴普嚴禪師・蘇州虎丘蒺藜曇禪師・台州瑞巖少室光陸禪師・鎮江府金山掩室善開禪師・明州雪竇無相範禪師・秘監陸游居士。

とやはり一四人が記されているが、普嚴や善開を法嗣の中心から外すような配列となっている。また中国の宗派図である『禪燈世譜』卷六「南嶽下臨濟宗虎丘法派世系譜」には「松源崇岳」の法嗣として、

天童文礼（号二天目）・龍翔希璉・雲巢嶽・華藏無礙

通・淨慈谷源道・北海心・雪竇大歇謙・諾庵肇・運庵普  
巖・蔘藜曇・少室光陸・金山掩室開。

という二人が記されている。とくに『五燈全書』と『禪燈世譜』が無相範と陸游を除き、同じ順番となっているのが注目される。

(31) 『北磻文集』卷八「疏」には「五峯請願毒果・疏」が収められ、『北磻外集』「偈頌」にも「寄願毒果」という偈頌が収められていることから、毒果□愿(□願)という禅者が明州鄞県東南の五峯山崇福禅院に住持したことが知られ、この人が松源崇嶽の法を嗣いだ高弟の一人ということになろう。

(32) 江戸中期の宝永元年(一七〇四)に深江元彬(文水)が再編刊行した駒澤大学図書館所蔵『掌珠宗派図』の「靈隠松源崇岳(嗣密庵傑)」の箇所には法嗣として、

華藏無得覺通・天童滅翁文礼・金山掩室善開・瑞岩少室光陸・瑞岩雲巢道岩・江心石岩希璉・道場北海悟心・雪豆無相□範・虎丘蔘藜正曇・淨慈谷源至道・雪豆大歇仲謙・雙塔無明恵性・道場運庵普岩。

とあり、一三人の名を挙げている。同じく江戸中期の享保五年(一七二〇)に和泉(大阪府)堺の仏在庵の仲敬慧愼が編集した『伝燈歴世譜』卷中「松源下世譜」では「杭州靈隠松源崇嶽」の法嗣として、

台州瑞巖雲巢道巖・鎮江金山掩室善開・温州江心石嶽希璉・湖州道場北海悟心・杭州淨慈谷源至道・台州瑞巖少室光陸・四明雪竇無相□範・顯慈諾菴師肇・雙塔無明慧

性・陸放翁居士・四明雪竇大歇仲謙・保福晦巖□暉・南明不菴了悟・蘇州虎丘蔘藜正曇・四明天童滅翁文礼・湖州道場運庵普巖・華藏無得覺通。

となっており、中国禅宗燈史や『正誤仏祖正伝宗派図』などの記述を踏まえて、在俗の陸游(放翁居士)を加えた一七人の名が記されている。

(33) 『松源和尚語録』二卷には残念ながら雲頂山の紫雲□演に開わるような記事は載せられていない。

(34) 『破菴和尚語録』には雲巢道巖の「後跋」として、

天下衲僧盡道、破菴師伯、擊碎破砂盆、所以五処全提  
仏祖命脉、開鑿人天眼目。正是誘他。殊不知、此老  
未出関時、不開口不動舌、已是布縵天網、打鳳  
羅龍。烜赫光明、照耀千古、豈待道巖為蛇画足、  
倒持虎鬚。其徒持此録來、因獲諦觀、敬書于後。  
具頂門眼者、必不於言語中尋討。

嘉定壬申元日、住平江福臻法姪道巖跋。

と記されている。破庵祖先が示寂してまもない嘉定五年(一二二二)元日に道巖は蘇州(平江府)呉県西南四五里の穹窿山福臻禅院の住持として前年に示寂した祖先のために『破菴和尚語録』に跋文を寄せている。

(35) 『無文印』卷四「行状」の「徑山無準禅師行状」によれば、無準師範はかつて台州の瑞巖寺などで雲巢道巖のもとで第一座(首座)を勤めた事跡が知られている。その師範の『仏鑑禅師語録』卷五「序跋」に、



跋「雲巢語録」

雲巢入滅、未<sub>レ</sub>久有<sub>二</sub>不肖子<sub>一</sub>、摘<sub>二</sub>其平生敗迹之歎<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>一巨軸<sub>一</sub>、將欲<sub>レ</sub>流<sub>二</sub>布諸方<sub>一</sub>、以肆<sub>レ</sub>無窮之謗<sub>一</sub>。且携<sub>二</sub>質於子曲<sub>一</sub>、求<sub>二</sub>智証<sub>一</sub>。因為原<sub>二</sub>其語<sub>一</sub>、彷彿橫巾。右祖之作、然又節節論訛、不通<sub>二</sub>翻譯<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>中有<sub>二</sub>句子<sub>一</sub>、稍似<sub>二</sub>唐音<sub>一</sub>。若人辨得、直饒<sub>レ</sub>刎頸、未<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>謝<sub>レ</sub>諸<sub>一</sub>。儻涉<sub>二</sub>遲回<sub>一</sub>、清涼贏得、鼻孔出<sub>レ</sub>氣。

という跋文が載せられており、ここにいう「雲巢」は雲巢道巖のことを指していると思われる。道巖は師範が開堂出世する上で大きな後ろ盾であったものらしく、道巖が示寂した後「雲巢和尚語録」といった表題の語録が編集された際、そうした縁故を踏まえて師範は跋文を寄せている。師範が自らを「清涼」と称していることから、道巖が示寂したのは師範が明州府城の清涼広慧禅寺に開堂出世した嘉定一三年（一二二〇）三月から嘉定一五年に清涼寺を退くまでの間に限られるよう。「仏鑑禅師語録」卷一「仏鑑禅師初住慶元府清涼禅寺語録」には実際に「謝<sub>二</sub>月首座・瓊首座持<sub>一</sub>雲巢語<sub>二</sub>至上堂<sub>一</sub>」が収められており、これは道巖の法嗣と見られる□月と□瓊という二首座が刊行された『雲巢和尚語録』を師範のもとに届けに来たのに対する感謝の上堂である。

(36) 『増集統伝燈録』卷四には「瑞巖雲巢禅師法嗣」として「蘇州万寿訥堂辯禅師」と「蘇州虎丘清溪義禅師」の章を挙げており、さらに「仏祖正伝宗派図」などを踏まえると、道巖には法嗣として鎮江府丹徒県の金山龍游禅寺や蘇州呉県の

万寿報恩光孝禅寺に住持した訥堂淨辯（慈庵主）と、蘇州呉県の虎丘山雲巖禅寺に住持した清溪□義が存したことが知られる。田山方南編『禅林墨蹟拾遺』には仲美堂所藏「六七、訥堂淨辯墨蹟（布袋図賛）」が収められており、淨辯が賛を揮毫した「布袋和尚図」の賛が日本国内に伝存している。

(37) 『増集統伝燈録』卷一「目錄」によれば「育王仏照光禅師法嗣」の一人として「虎丘鏡中大禅師」の名が載せられているから、鏡中大が蘇州呉県の虎丘山雲巖禅寺に住持したことが知られる。『中国名山勝蹟志叢刊』第四卷『虎邱山志』（内題は「重修虎邱山志」）第九卷「高僧（宋）」の「大号<sub>二</sub>鏡中<sub>一</sub>」の項には、

大、号<sub>二</sub>鏡中<sub>一</sub>。丞相史彌遠、請<sub>二</sub>主<sub>三</sub>万寿寺<sub>一</sub>。作<sub>レ</sub>偈辞曰、相君提<sub>レ</sub>我上<sub>三</sub>天梯<sub>一</sub>、上得<sub>二</sub>千層<sub>一</sub>。総是迷、争似<sub>二</sub>虎邱安穩<sub>一</sub>。坐<sub>二</sub>、清風明月与<sub>レ</sub>心齐<sub>一</sub>。

とあり、この記事は『宋詩紀事補遺』卷九六「釈子上」の「僧大」の項にも引用されている。虎丘山の住持であった鏡中大は丞相の史彌遠（字は同叔、諡は忠獻、一一六四—一二三三）より蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺に住持することを請われたが、偈頌を作つてこれを辞退し、虎丘山に安坐していたとされる。また『物初賸語』卷三三「芝巖禅師塔銘」によれば、大慧派の芝巖慧洪（恵洪、一一九二—一二五四）が杭州淨慈寺にて曹洞宗の長翁如浄（老浄）に参学した後、巾峰すなわち台州府城の巾子山報恩光孝禅寺に赴いて鏡中大を訪ねている。

(38) 『天童寺志』巻八「表貽攷」には「晋陵尤焯、天目禪師語録序」が収められており、滅翁文札には「天目礼禪師語録」が編集され、晋陵の尤焯（字は伯晦、号は木石、一一九〇—一二七二）が「天目禪師語録序」を撰したとされるが、残念ながら現今に伝えられていない。文札の語録にもおそらく晋嶽に関する何らかの記事が収められていたことであろう。

〔松源和尚語録〕巻下「贊仏祖」には崇嶽が詠じた頂相の自贊として「能仁光陸長老画師頂相請贊」「雲居善開長老請贊」「道巖首座請贊」「師肇首座請贊」「師警維那請贊」「希璉書記請贊」「大成藏主請贊」「文蔚侍者請贊」「惠文伯居士請贊」という九首が収められ、また与えた人物の名が記されない六首の自贊が残されている。崇嶽に自贊を請うたのはそれぞれ少室光陸・掩室善開・雲巢道巖・諾庵師肇・師警・石巖希璉・大成・嘯巖文蔚および惠文伯居士であつて、そこには普嶽に与えた自贊は含まれていない。師警と大成については事跡が定かでないが、文蔚は崇嶽の後席を継いで靈隠寺に住持した楊岐派の息庵達観の法を嗣いだ禪者であり、後に越州（紹興府）山陰県の天衣山法華禪院の住持として

〔如浄和尚語録〕に序文を寄せている。

(40) ちなみに『運庵和尚語録「偈頌」に、

題「戢庵居士竹亭」。

疎疎綠葉起清風、屈指巡簷數不窮、幽致果然難比況、此君未必在其中。

という偈頌が存しているが、これは普嶽が戢庵居士の創建し

た竹亭に対して詠じた作である。この偈頌に呼応するかのごとく『破菴和尚語録「法語」にも「与戢菴居士張御帶」という長編の法語が収められ、「讚偈」にも「戢菴居士請贊「濟顛」や「戢菴居士持壽像「求讚」が収められているから、戢庵居士の俗姓が張氏であったこと、戢庵居士が楊岐派の湖隱道濟（濟顛、方円叟、一一三七—一二〇九）の頂相や破庵祖先の寿像頂相に対し、祖先より贊を得ていることが知られる。

(41) 普嶽が受け取ることを辞退した崇嶽の法衣は、その後、どのように扱われたのであろうか。東陽英朝は「宗門正燈録」において「枯崖漫録」巻中「松源岳禪師」の項に載る、

松源岳禪師、由虎丘遷靈隱、老而聵、叢林呼為老聵翁。以所伝白雲端和尚法衣、亟欲付人、垂三転語云、開口不在舌頭上、大力量人為什麼、擡脚不起、大力量人為什麼、腳根下紅線不斷。而無契者。留衣塔下曰、三十年後、有我家子孫、來住此山、以此付之。遂告寂。石溪後亦由虎丘奉旨而至徑、拈衣云、大庾嶺頭、黃梅夜半、争之不足、讓之有餘。而今公案現成、不免將錯就錯、捧起衣云、敢問此衣白雲傳來、松源留下明什麼迎事。惱乱春風、卒末休。今仏海留於双徑伝衣菴。其復有所待耶。

という記事を引用し、この楊岐派の白雲守端（一一〇二—一一〇七二）より傳來した法衣をもって普嶽が辞退した袈裟に比している。その後、守端より傳來の袈裟は掩室善開の高弟で

ある石溪心月（仏海禪師、一一七七？—一二五六）によって  
径山の伝衣庵に奉安されたものらしい。『石溪和尚語録』巻  
下に付される「御書伝衣菴記」には、伝衣庵に関する詳細な  
記事が存しているが、普巖のことは何ら記されていない。

- (42) 息庵達観は楊岐派の水庵師一（一一〇七—一一七六）の法  
を嗣いだ高弟であり、参学した居簡自身が『北磻文集』巻一  
〇に「天童山息菴禪師塔銘」を残していることから、その活  
動のさまが比較的詳しく知られる。

- (43) 『松源和尚語録』巻下には「臨安府景德靈隱禪寺語録」に  
つづいて「開山顯親報慈寺語録」が収められているが、  
「松源禪師塔銘」には崇嶽が顯親報慈寺を開山した記事は記  
されていない。また顯親報慈寺が何れの地に存した禅寺なの  
か、開基が誰であったのかも明確でないが、崇嶽は慶元三年  
（一一九七）六月に靈隱寺に入寺してより六年間にわたって  
住持を勤めたとされるから、最晩年の嘉泰二年（一二〇二）  
に顯親報慈寺の開山に迎えられていることになろう。『松源  
和尚語録』巻下「臨安府景德靈隱禪寺語録」の最後から三番  
目に「韓郡王請掛報慈寺額」が存しており、韓郡王（太師  
郡王）の帰依を得て入院しているから、靈隱寺が存した杭州  
地内かその周辺地域に存した寺院に限られるであろう。
- (44) 「瞎驢辺滅却」の故事とは、『鎮州臨濟慧照禪師語録』「行  
録」の末尾に載る臨濟義玄が「誰知吾正法眼蔵、向這瞎驢  
辺滅却」と述べて示寂した因縁をいう。

- (45) 宝華山宝林寺（宝華寺）については『同治蘇州府志』巻三

### 九「寺観」の「呉県」に、

宝華寺、在三吳縣西南三十里薛家湾、旧名三智顛禪院。梁時、  
吳廣施三所居為レ寺、号三宝林。吳越錢氏改三宝華、故今  
名三宝華山。宋祥符間、郡守秦義、重三建殿堂經藏、合三  
三百楹、号為三勝利。明洪武初、帰併三穹隆寺。初三誦誦和  
尚、嘗於レ此以レ錫扣レ石、清泉為レ流、雖三水旱一不三増減。  
今其地為三豪家所レ佔、改為三墳墓、別三於レ寺之東、重建三  
數楹、亦頗荒廢矣。

と記されており、宝華寺は蘇州吳縣西南三〇里の薛家湾にあ  
り、古く智顛禪院と称していたことが知られる。北宋の大中  
祥符年間（一〇〇八—一〇一六）に郡守の秦義（字は致堯、  
九五七—一〇二〇）が殿堂や経藏を重建しており、『吳郡文  
粹』巻八には秦義の撰した「宝華山寺新鐘記」が収められて  
いる。『中国仏寺誌叢刊』の第五三巻と第五四巻に『宝華山  
志』一五巻が収録されているが、これは清の康熙年間（一六  
六二—一七二二）に編集刊行された寺志であって、その大半  
が明清代の記事によって占められており、宋元以前の記事は  
ほとんど見られない。

- (46) 金沢市の東香山大乘寺所蔵『大宋名藍図』（『五十十利図』  
とも）巻下「諸山額集」の「正門額」には「勅寿岳山普照禪  
寺（潤州）」という記載が存しているから、曹洞宗永平下の  
徹通義介（義鑑、一一一九—一三〇九）が在宋中に普巖ゆか  
りの潤州（鎮江府）の寿丘山大聖普照寺にも到っているらし  
いことが知られる。

(47) 『物初賸語』卷九「記」の「流遠菴記（代錢辰州）」には

諾庵師肇に關して、

開禧間、我先君侍郎、為先祖太師文惠越国公、親顯慈禪寺于苕之官宅、首延京口甘露諾菴禪師主之。越三年而寂、闍維牙齒數珠不壞、舍利五色如菽、塔諸寺後四岡之間。師得松源嶽公末後句、声価庄諸方、其主是山也。鍛鍊衲子、家法森嚴、叢林翕然。自時厥後主者、婁易土木、不嗣葺而弊資糧、不擲節而乏緇繩。稍縱情者弗勉、欲其以身徇道、固未能也。余惕思、先君締親之艱、求善繼者、乃得一菴、諾菴跨竈也。至則弊者新、乏者盈、縱者嚴、情者勤。不十年、氣象如全盛時。淳祐癸卯、一菴寂。其徒歛茶毗之不爐者、請曰、吾祖諾庵、鼻祖此山、塔而不亭、吾師一庵、克著緒纘、没而未塔。旌其績莫如塔、庇其塔莫如亭、守其塔莫如庵。矧父子一家、塔宜附近。於是、二師之徒、□□□□、尺瘁叶力、割長鳩工、曰塔曰庵曰亭、不愆于素。（後略）

という記事が存しており、その活動の一端が知られる。文惠越国公とは史浩（直翁、真隱居士、一一〇六一—一九四）のことであり、越王と追封され、文惠とはその諡号である。開禧年間（一二〇五—一二〇七）というから、普嚴が開堂出世した時期と重なっている。当時、松源下の諾庵師肇が鎮江府の京口甘露寺に住持していたが、史浩が新たに顯慈寺を創建して師肇を開山に拝請したことが知られ、師肇は顯慈寺に住

持して三年にして示寂したことが判明する。師肇が開山始祖となった顯慈寺とは常州（江蘇省）武進県（常州府城）東南四里の運河の南に存した顯慈永慶禪寺（古くは正勤能仁禪寺）のことであり、流遠庵とは師肇ゆかりの堂庵として顯慈寺山内の一角に建てられた塔頭であろう。また一庵とは師肇の法を嗣いだ一庵賢（？—一二四三）のことで、後に顯慈寺の住持となったものらしく、「流遠菴記」によれば、淳祐癸卯すなわち淳祐三年（一二四三）に示寂したとされる。

(48) 宋版『宏智禪師語録』卷一「江州能仁禪寺語録」に「真州天寧琳長老下法嗣書、師上堂」が存するから、真州の天寧寺にはかつて南宋初期に曹洞宗の宏智正覚の法を嗣いだ長蘆道琳（道林とも）が住持したことが知られ、道琳はさらに同じ真州儀徵県の長蘆崇福禪院（長蘆寺）に遷住している。

(49) 『金山志』卷三「方外」の「宋」には「善開、字掩室、嗣法松源嶽、主金山席」とあり、『続金山志』卷下「禪宗」にも「宋南嶽下二十世沙門掩室開」として「善開、字掩室、嗣法松源岳」と、『金山龍游禪寺志略』卷一「祖堂法系」にも「宋掩室善開禪師、乃靈隱嶽禪師法嗣、南嶽下十九世伝臨濟宗」として「密庵破沙盆」の上堂一則を載せるのみである。

(50) 『渭南文集』卷四〇「塔銘」の「松源禪師塔銘」によれば、退居東菴、俄属微疾、猶不少廢倡道、忽垂一則語以驗学者曰、有力量人為甚麼擡脚不起、開レ口不在舌頭上。又貽書嗣法香山光陸・雲居善開、伝

以「大法」。因書偈曰、來無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>來、去無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>去、警<sub>レ</sub>轉  
玄関、仏祖罔<sub>レ</sub>措。跣<sub>レ</sub>趺而寂。実嘉泰二年八月四日也。

得<sub>レ</sub>年七十有一、坐夏四十。奉<sub>レ</sub>全身塔于北高峰之原。  
塔成之四年、香山遣<sub>レ</sub>其侍者道孚<sub>レ</sub>以銘属<sub>レ</sub>某。

とあるから、崇嶽は遺書を法嗣である香山智度寺の光睦と雲  
居山真如院の善開に送り、嘉泰二年（一一〇二）八月四日に  
示寂していることが知られる。二年後に靈隱寺の北高峰の塔  
（鷲峰庵松源塔）が建てられ、香山の光睦が侍者の道孚を遣  
わせて陸游に塔銘を依頼したため、陸游はこれに応じて崇嶽  
の塔銘を撰している。

(51) 『如浄和尚語録』『臨安府浄慈禪寺語録』に「謝<sub>レ</sub>掩室和尚  
上堂」が収められており、

謝<sub>レ</sub>掩室和尚上堂。掩<sub>レ</sub>室摩竭国、老胡豁<sub>レ</sub>開頂門、杜<sub>レ</sub>  
口毘耶城、浄名敗<sub>レ</sub>缺話柄。提<sub>レ</sub>上古兩端公案、発<sub>レ</sub>今朝  
一段威光。所以賓主歴然、江湖有在。還知麼。不<sub>レ</sub>是詩  
人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>獻<sub>レ</sub>詩、春風吹作<sub>レ</sub>鷓鴣詞。

とあって、善開が浄慈寺初住時代の如浄のもとを訪れて道交  
を温めていることが知られ、如浄は善開のために掩室の道号  
に因んで「掩<sub>レ</sub>室摩竭」の公案を取り上げて上堂している。  
このとき善開が何れの寺院に住持していたのかは記されてい  
ないが、状況からして鎮江府の金山であったものと見られる。

(52) 『枯崖和尚漫録』卷上「鉄鞭詔禪師」の項に「自<sub>レ</sub>此号曰<sub>レ</sub>  
鉄鞭、六年為<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>釐務侍者」とあるから、虎丘派の密庵咸傑  
のもとで鉄鞭允詔が六年間にわたって不釐務侍者を勤めてい

たことが知られる。また『物初賸語』卷二四「行状」の「西  
巖禪師行状」にも、

時主<sub>レ</sub>雪竇席<sub>レ</sub>者、仏鑑無<sub>レ</sub>準範也。師造<sub>レ</sub>席下、自<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>來  
歴。範呵曰、熟歇去。已而令<sub>レ</sub>充<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>釐務侍者。

とあるから、明州奉化県の雪竇山資聖寺において無準師範に  
参じた西巖了慧も師範から不釐務侍者に充てられている。

(53) 『同治湖州府志』卷九一「方外（釈）」には「如訥」として、  
如訥（未<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>里居）、目有<sub>レ</sub>重瞳、手垂過<sub>レ</sub>膝。自<sub>レ</sub>翠微  
受<sub>レ</sub>訣、止<sub>レ</sub>於道場山。父老曰、此山多<sub>レ</sub>虎。訥策<sub>レ</sub>筇直上、  
坐<sub>レ</sub>盤石、虎伏<sub>レ</sub>其側、經<sub>レ</sub>三宿無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>傷。因<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>草卓<sub>レ</sub>庵、  
學徒四至。広闡<sub>レ</sub>法化、遂成<sub>レ</sub>叢社。後起<sub>レ</sub>廊廡仏殿、塑<sub>レ</sub>  
千羅漢於中、今号<sub>レ</sub>其処曰<sub>レ</sub>伏虎巖。

とあり、光緒七年（一八八一）に刊行された『烏程県志』卷  
二四「方外」の「唐」にも、

如訥、目有<sub>レ</sub>重瞳、口能容<sub>レ</sub>拳、手垂過<sub>レ</sub>膝。中和間、自<sub>レ</sub>  
翠微受<sub>レ</sub>訣、辞<sub>レ</sub>師出游。師曰、逢<sub>レ</sub>道即止。經<sub>レ</sub>道場山、  
遂留<sub>レ</sub>止焉。父老曰、此山多<sub>レ</sub>虎。訥策<sub>レ</sub>筇直上、坐<sub>レ</sub>磐  
石、虎伏<sub>レ</sub>其側、經<sub>レ</sub>三宿無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>傷。因<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>草卓<sub>レ</sub>庵、學  
徒四至。広闡<sub>レ</sub>法化、遂成<sub>レ</sub>叢社。後起<sub>レ</sub>廊廡仏殿、塑<sub>レ</sub>千  
羅漢於中、今号<sub>レ</sub>其処曰<sub>レ</sub>伏虎巖。高彦為<sub>レ</sub>郡守、以師<sub>レ</sub>  
事之。彦將<sub>レ</sub>死、与<sub>レ</sub>之訣別退、而謂<sub>レ</sub>其衆曰、高公將<sub>レ</sub>  
殂、我亦当<sub>レ</sub>逝。蓋有<sub>レ</sub>白面夜叉<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>此政矣。爾輩亦宜  
避<sub>レ</sub>之。彦子濃代<sub>レ</sub>位、殺<sub>レ</sub>人不可<sub>レ</sub>勝数。訥言始驗。

と記されている。これらによれば、如訥は郷里や俗姓が定か

でないが、眼に重瞳があり、口に握り拳を容れることができ、手を垂れば膝を過ぎるほどであったとされる。青原下の翠微無学のもとで印可を得て後、湖州の道場山に到って盤石（伏虎巖）に坐禅して虎を伏したとされ、卓庵して学徒を接して護聖寺の基礎を築いたとされる。一方、『仏祖綱目』巻三四には、

壬申、如訥禪師住道場。如訥、湖州人。得法無学。乾化二年二月、薙草草菴道場山。乘虎游行、学徒四至、遂成禪苑。

と記されており、如訥が地元の湖州の出身で、翠微無学に得法した後、後梁の乾化二年（九一二）二月に湖州の道場山に卓庵したとする。

(54) 實際に虞集の四部叢刊本『道園学古録』五〇巻を閲覧したが、道場山護聖万寿寺に関する「記」は載せられていない。

(55) 金沢市の東香山大乘寺に所蔵される『大宋名藍図』（『五山十刹図』とも）巻下「諸山額集」の「正門額」には「道場山護聖禅院（安吉州）」という記載が存し、日本から曹洞宗の徹通義介が道場山に到っているものらしい。ただし、義介が訪れた当時、道場山の寺名が護聖万寿禅寺であったのか、護聖万歳禅寺であったのかは明確でない。

(56) 『枯崖漫録』巻下の「諾庵元肇禪師」の項には、  
諾庵元肇禪師、範有規精一於道。因雪上堂云、（中略）昔諾庵与開掩室、結伴参松源。源亦不倦針劄、故尽得其妙。是不可無賢師友也。足為後学法。

とあり、師肇（元肇）が同門の掩室善開とともに崇嶽に随侍した経緯を伝えている。また同じく『枯崖漫録』巻下「西蜀保福晦崑暉禪師」の項には、

西蜀保福晦崑暉禪師、通泉白氏子。嘗与肇諾庵・道谷源・開掩室、同参松源、密契真要。

と記されており、潼州（四川省）通泉の白氏の出身であった晦巖□暉が諾庵師肇・谷源至道・掩室善開とともに松源崇嶽の門に投じて法を嗣いだことを伝えている。善開は成都の出身であるから、あるいは師肇や至道の二人も晦巖□暉や善開と同じく四川出身の蜀僧であったものと見られる。

(57) 『北磻外集』「偈頌」には諾庵師肇について、  
諾菴（肇老）。

善応物無外、全身在帝郷、不防横点頭、平等印諸方。

という五言四句の偈頌が載せられており、これは北磻居簡が師肇のために書き与えた諾菴の道号頌の類いと見られる。おそらく師肇は普巖や善開のほか大慧派の居簡とも親しい道交をなしていたのであろう。

(58) 虚堂智愚が普巖に参じた消息については、すでに拙稿「虚堂智愚の参学期の動静について（上）」（『曹洞宗研究員研究紀要』第一九号）において詳しく論じたので、これを参照されたい。また石帆惟衍についてもすでに拙稿「天童山の石帆惟衍について——虚堂智愚・西澗子曇および北条時宗と関わった南宋末期の臨濟禪者——」（『駒澤大学仏教学部研究紀

要』第六六号)において論じたので、これを参照されたい。

(59) 『禪宗頌古聯珠通集』巻二八「鄂州巖頭全藏禪師」の章に、

巖頭因僧問、古帆不<sub>レ</sub>掛時如何。師曰、後園驢喫<sub>二</sub>草。

巖頭因僧問、古帆掛後如何。師曰、小魚吞<sub>二</sub>大魚。

とあって別々の問答となっており、「後園驢喫<sub>二</sub>草」の古則に關しては海印超信・大洪守遂・径山大慧宗杲・鼓山竹庵士珪・楚安慧方・雪竇聞庵嗣宗・塗毒智策・雪菴從瑾の頌古を載せ、「小魚吞<sub>二</sub>大魚」については汾陽善昭・径山大慧宗杲・鼓山竹庵士珪・照堂一・天目滅翁文礼の頌古を載せているが、残念ながら運庵普巖・虛堂智愚・石帆惟衍の作は収められていない。

(60) この点については、拙稿「曹洞宗宏智派の短蓬遠について——天童如浄に參じて孤高な坐禪を貫いた遠鉄樞——」(駒澤大学仏教学部研究紀要』第六七号)の「示寂と後事」の項も参照されたい。

(61) 『断橋和尚語録』巻末に所収される「行状」は、語録の刊行に際して門人によって撰されたものらしいが、具体的な撰者名や年月日などは記されていない。ただ、「行状」の記事からすると、『断橋和尚語録』の刊行は小師の若斯・若虚を中心に、日本の参学僧正見も関わっていたことが知られる。

(62) 『断橋和尚語録』巻末「行状」によれば、妙倫が希夷のもとで普巖の対霊小参を聞いて後、雪竇山の師範に参学するまでの過程について、

旋次<sub>二</sub>華藏、適浄淳菴臥疾、冒<sub>二</sub>雪過<sub>二</sub>長蘆。(中略)久

之巡<sub>二</sub>礼祖山、值<sub>二</sub>歲歉、或併日不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>食、師裕如也。因

至<sub>二</sub>雲居<sub>二</sub>留<sub>二</sub>夏、孜孜忘<sub>二</sub>倦、脇不<sub>レ</sub>印<sub>二</sub>席、中心憤悱、或

喜或曠。一日往見<sub>二</sub>山堂、閱<sub>二</sub>楞伽經、至<sub>二</sub>或戲笑或怒罵、

蚊虻螻蟻、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>言說、而能辨<sub>二</sub>事処、豁然有<sub>レ</sub>省。(中

略)時同堂友虚堂愚・石帆衍、号称<sub>二</sub>俊絶。平居每举<sub>二</sub>古

今、以相凌駕。還遊<sub>二</sub>四明、方<sub>二</sub>仏鑑道鳴<sub>二</sub>乳竇、執<sub>二</sub>侍左

右、朝夕決扶。(中略)仏鑑遷<sub>二</sub>育王、師侍行。

とあり、妙倫が初めに常州無錫県西の華藏褒忠顯親寺で淳庵善浄のもとを訪れ、さらに雪の中を真州儀徴県の長蘆崇福禅院に至っていることが知られる。久しくして諸方の祖山を巡礼した後、洪州建昌県の雲居山真如禅院において夏安居を過ごし、智慧や惟衍と道交を結んでいる。その後、妙倫は明州に戻って奉化県の雪竇山資聖寺にて無準師範に參じて左右に侍し、侍者として『仏鑑禪師語録』巻一「住慶元府雪竇山資聖禪寺語録」を編集しており、宝慶三年(一二二七)春に師範に随侍して鄞県の阿育王山広利寺に赴いている。

(63) 『禅林諸祖弔靈語数』一〇巻は別に『禅林引導集』とも称されており、南宋代から元代における禅僧の弔霊に関する法語を集めている。湖隱<sub>二</sub>鑑(未詳)という禅者によって編集されているが、編者については経歴や事跡が定かでない。宝永元年(一七〇四)に京都の吉田三郎兵衛・栗山伊右衛門によって刊行された一〇冊本と、京都柳枝軒より後刷りされた五冊本が駒澤大学図書館に所蔵されている。

(64) 円爾将来『宗派図』(『禅宗伝法宗派図』とも)には「仏眼

遠禪師「高菴悟禪師」「雲居如禪師」「圓極峯禪師」と次第して「大同全禪師」の名が存しており、大同道全が仏眼派の円極彦岑の法を嗣いでいることが判明する。『叢林盛事』巻下「金沙灘頭菩薩像」の項に「唯四明道全号大同者、一贊最佳、其詞曰（下略）」とあり、道全が普巖と同じく四明の出身であったことが知られる。

(65) 布袋信仰と濟顛信仰については、永井政之「中国禅宗教団と民衆」(内山書店刊)の「布袋信仰」と「濟顛信仰」の箇所を参照。

(66) 「密庵破沙盆」の古則については、すでに註(29)で説明したのでこれを参照されたい。

(67) 大徳寺所蔵の運庵普巖自贊頂相については、京都国立博物館編「開山650年遠諱記念」大徳寺の名宝(一九八五年刊)や毎日新聞社編「重要文化財10(絵画Ⅳ)」(一九七四年刊)および田山方南編「秘宝大徳寺」(昭和四三年、講談社刊)などに載せられている。また古田紹瑾編「頂相(禪僧の顔)」(昭和六〇年、講談社刊)には「36運庵普巖(京都大徳寺)」として上半身のみを拡大した写真が載せられている。この中でも『大徳寺の名宝』の「14◎運庵普巖像 自贊」には普巖の自贊頂相について解題を載せており、

運庵普巖像 自贊 一幅 絹本着色 縦八七・二 横四一・四 嘉定十一年(一一二八) 大徳寺

と頂相の形態などについて記しており、ついで実際に普巖の頂相に対する解説の語句として、

松源崇岳の法嗣で、その下から虚堂、大応と続く法系上にある運庵普巖は宝慶二年(一一二六)に示寂した高僧である。この像は徒弟の智密副寺に与えられたもので、現存する頂相の中で最も古いものである。法被や袈裟にもわずかに胡粉を散らした地文を描くのみ、質素な像で時代様相をよく表わしている。緻密な面貌描写と細い衣紋線の整理された美しさは、伝神写貌を宗とした南宋肖像画の真骨頂を示している。

とあり、南宋時代に著わされた禪僧の頂相の特徴をよく伝えた最も古い画賛として注目している。一方、田山方南編「秘宝大徳寺」の「図版解説」でも、

徒弟の智密副寺に与えられた本像は嘉定十一年(一一二八)の制作と知れるが、中国の頂相の中でも現存作としては最も古いもの一つである。法被を掛けた背の低い曲線の肘かけや杓置き台も黒一色で裝飾が少なく、法衣も袈裟もわずかに胡粉を散らした地文を施すのみの無地の質素な像である。しかし慈眼をたたえた面貌の緻密な線描と鋭く過不足なく引かれた細い衣紋線の優美さは、伝神写貌を宗とした南宋肖像画の真骨頂を示すものといえよう。なお本図と虚堂像、南浦像の三幅はもと大応国師の塔所、建長寺天源庵に伝わったもので、小田原北条氏、秀吉の手を経て寄贈されたものである。

と解説されており、普巖の頂相の特徴が細かにまとめられている。なお、この普巖の自贊頂相は国の重要文化財に指定さ



れている。

(68) 山田宗敏編・伊藤克己補訂『史料大徳寺の歴史』(毎日新聞社刊、平成五年五月)には大徳寺所蔵『大徳寺文書』三二四五号の「千宗易(利休)三祖像寄進状案」として、

運庵・虚堂・大応三祖像者、廻天源庵常住之宝物也。粵撰政関白大相国、東夷御征伐之時、既欲<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>烏有<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>権威所<sub>レ</sub>施・道徳所<sub>レ</sub>存・龍天所<sub>レ</sub>護、得<sub>レ</sub>之飯<sub>二</sub>帝都<sub>一</sub>也。

太奇太奇。忝賜<sub>二</sub>諸於利休居士<sub>一</sub>。居士便頂<sub>二</sub>戴珍宝<sub>一</sub>。拜披、謂此賜過<sub>レ</sub>実、非<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>敢当<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>経<sub>二</sub>貴命<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>付龍宝山<sub>一</sub>大徳禪寺<sub>ト</sub>、以<sub>二</sub>弘法之紹隆<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>宝祚延長天下太平<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>三尽<sub>一</sub>未来際<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>龍宝山之宝物<sub>一</sub>。仍寄付如<sub>レ</sub>件。

天正十八年龍集庚寅九月吉日、利休居士宗易、在判。右先師玉仲和尚真蹟也。遠疎比丘宗通拜証。

〔融谷〕〔宗通〕

という文書が伝えられている。これによれば、運庵普巖の頂相は虚堂智愚や南浦紹明の頂相とともに古くは鎌倉建長寺山内の塔頭である天源庵(紹明の廟所)に常住の宝物として所蔵されていたことが知られる。その後、戦国期には小田原北条氏の所有となっていたが、撰政関白大相国すなわち豊臣秀吉が東夷征伐(小田原攻め)のときに危うく烏有に帰するところを京都に持ち帰り、それら三代の祖師頂相を千宗易(利休居士)に賜ったことを伝えている。さらに千宗易は天正一八年(一五九〇)九月にそれらを紫野の大徳寺に寄付し、尽未来際に大徳寺の宝物となしたというものである。現今に残

る文書は千宗易の自筆ではなく、大徳寺第一一二世の玉仲宗瑋(休休子、仏機大雄禪師、一五二二—一六〇四)が書き写したものであり、宗瑋の真蹟であることを後に大徳寺第四〇九世の融谷宗通(一七四七—一八〇五)が朱印を押して証明している。宗瑋は大徳寺山内に存した金鳳山天瑞禪寺の住持として天正一八年二月四日には秀吉の母である大政所(なか、天瑞院、一五三—一五九二)の発願になる天瑞寺の鐘樓落成に際して「鐘樓棟宇之銘」を書いている。

(69) 夢庵在居士については俗姓や事跡などが定かでないもの、おそらく「虚堂和尚語録」巻七「偈頌」に、

謝<sub>二</sub>夢庵居士性宗集<sub>一</sub>。

性本無<sub>レ</sub>宗夢亦非、万機難<sub>レ</sub>透<sub>二</sub>一真機<sub>一</sub>、有時暗与<sub>二</sub>乾坤<sub>一</sub>合、笑看春花秋葉飛。

として載る夢庵居士と同一人物を指しているものと推測され、この人は真摯な在俗の徒として普巖が示寂した後は高弟の智愚と関わりを密にしていたものであろう。また夢庵居士には「性宗集」という詩文集も存したことが知られ、性宗とは夢庵居士の字か号の類いであつたものと見られる。

(70) ちなみに対幅のいま一方の松源崇嶽の頂相賛として、  
為人巴鼻、一点渾無。明眼衲僧、失<sub>二</sub>却鼻孔<sub>一</sub>。鉄餒餒、金剛圈。分明開<sub>レ</sub>口不在<sub>二</sub>舌頭邊<sub>一</sub>、累及<sub>二</sub>後代<sub>一</sub>結<sub>二</sub>佛祖深窟<sub>一</sub>不在。

右鶯峯祖師應<sub>二</sub>雲居善開長老之請<sub>一</sub>作底自贊。  
拙孫宗深、焼香九拜寫<sub>レ</sub>之。

という賛が付されており、これは崇嶽が晩年に雲居山の善開に付与した自賛頂相の写しということになる。『松源和尚語録』巻下「賛仏祖」に「雲居善開長老請賛」として載るものであるが、その原本の頂相が雪江宗深の頃に実際に日本に存したものが否かは定かでない。

(71)

ここにいう「松源下十祖像」とは、松源崇嶽・運庵普巖・虚堂智愚・南浦紹明・宗峰妙超・関山慧玄・授翁宗弼（神光寂照禪師、一二九六—一三八〇）・無因宗因（一二二六—一四一〇）・春天宗宿（不昧子）・温中宗純（？—一四九九）という大応派（妙心寺系）の一〇人の直系祖師を描いた頂相のことである。また松源崇嶽の肖像は妙心寺所蔵のものより若干細かいが、ほぼ同じ図柄である。ただし、賛は「松源和尚語録」巻下「賛仏祖」の「能仁光睦長老画師頂相請賛」を写したものであつて、崇嶽が少室光睦に付与した頂相賛の写しであることが知られる。

(72)

綿田稔「崇福寺蔵「二十八祖像」をめぐって——雲谷等益、明兆から雪舟、文清まで——」（東洋文化研究所『美術研究』三八六）によれば、

福岡市内の崇福寺に、初祖達磨から二八祖南浦紹明まで、臨済宗大応派の法脈を代々継承した二八人を描いた二八幅セットの作品がある。現状で二四幅分に「明兆筆」のサインが認められ、残りの四幅が雲谷等益（一五九一—一六四四）の筆である。（中略）はじめ、おそらく東福寺永明院什具として初祖達磨から二八祖藏山順空までの

聖一派用列祖像二八幅が明兆（一三五二—一四三二）によつて描かれた。崇福寺本の明兆落款のあるものは、一六世紀に入つてからの複製摸写で、当初は達磨から藏山までの二八幅セットだったろうと考えられる。それがいづれかの段階でおそらく大徳寺大慈院に入り、大徳寺は大応派僧の寺であるので、一六三〇年前後に雲谷等益が聖一派用祖像セットでは不足する最後の四人分を新規に製作した。ところが、どこかの時点で、等益の意図とは別に、明兆落款二八幅の内の二四幅および、等益筆四幅とで大応派用二八幅セットが再構成されて、大慈院の子院である碧玉庵に寄進され、この時点で像主の変更が行われる。さらに、一八世紀中頃、土佐光芳（一七〇〇—一七七二）による等益幅の摸写という事件を経て、このセットは一八〇七年に崇福寺へ寄進されて、現在にいたつている。

もちろん雲谷等益筆の四幅は、等益の代表作となり得る完成度を示している。とはいへ、このセットは、基本的には、「明兆筆」という看板から生じる価値の集積体に守られて、現在まで伝世したのであるということもまた、その移動を追うことで明らかである。本作品は、関係絵師研究のことだけでなく、列祖像というものの流通や増幅といった社会的なありようを考えさせる。

と述べている。これによれば、松源崇嶽・運庵普巖・虚堂智愚・南浦紹明の四代の頂相は雲谷等益が新規に製作した大応

派用の祖像ということになる。

(73) 『仏日庵公物目録』一卷は南北朝時代の貞治二年(一三六

三)四月に僧法清によつて作成されており、その当時には普巖の墨蹟が中国から将来されて円覚寺仏日庵に所蔵されてい

たことになる。江戸初期の江月宗玩が記した『墨蹟之写』には、残念ながら普巖の墨蹟ないしそれに類するような記事は何も収められていない。

#### 〔付記〕

本稿を作製するに当たり、京都市紫野の龍宝山大徳寺様からは所蔵史料の自賛「運菴普巖禪師頂相」を、京都市の東山建仁寺塔頭常在院様からは所蔵史料の「運庵普巖禪師頂相」を、福岡市博多の横嶽山崇福寺様からは所蔵史料の伝明兆筆「運庵普巖禪師頂相」を、京都花園の正法山妙心寺様からは雪江宗深禪師拜賛の「運庵普巖禪師頂相」を、それぞれ写真掲載する許可を頂くことができた。さらに名古屋市東区徳川町の蓬左文庫様からは所蔵史料の宋版(朝鮮刊本とも)の『運庵和尚語録』を、鎌倉市山ノ内の松ヶ岡文庫様からは古活字版の『運庵和尚語録』を、駒澤大学図書館様からは流布本『運庵和尚語録』を、それぞれ閲覧ないし複写をさせて戴いた。ここに記して御礼申し上げる次第である。併せて関連史料の閲覧をさせていただいた京都市東山区の建仁寺塔頭両足院の伊藤東文師と、東京都渋谷区広尾の瑞泉山香林院の金嶽宗信師、貴重な情報を寄せていただいた愛知県一宮市笹野の万松山妙光寺の桐山大幹師、仲介に便宜をいただいた福岡市博多の石城山妙楽寺の渡辺桂堂師に対しても、感謝申し上げますものである。

また依頼を受けた臨濟宗妙心寺派宗務本所の教化センター様や、仲介に立たれた花園大学の野口善敬先生には、分量や期日の面で多大の御迷惑を御掛けした。ここに記して御詫び申し上げる次第である。

〔運庵普巖関連系譜〕

〔臨濟宗楊岐派〕

五祖法演

圓悟克勤

仏眼清遠

高庵善悟

雲居法如

円極彦岑

大同道全

南堂元静

石頭自回

蓬庵徳会

壞衲大璉

廓庵師遠

掩室善開

石溪心月

大休正念

紫雲□演

無象静照

諸庵師肇

一庵□賢

宝葉妙源

少室光睦

道孚

閑極法雲

虎丘紹隆

心庵曇華

密庵咸傑

松源崇嶽

運庵普巖

虚堂智愚

南浦紹明

宗峰妙超

関山慧玄

石帆惟衍

巨山志源

月堂宗規

徹翁義亨

雲巢道巖

西澗子曇

嵩山居中

訥堂浄辯

清溪□義

無極正初

無明慧性

蘭溪道隆

約翁徳儉

無得覚通

虚谷希陵

虎巖浄伏

月江正印

仏智端裕

水庵師一

息庵達観

一翁慶如

晦巖□暉

冰谷□衍

減翁文礼

石林行輩

古林清茂

石室善玖

恵足

横川如珙

竺三妙道

恕中無慍

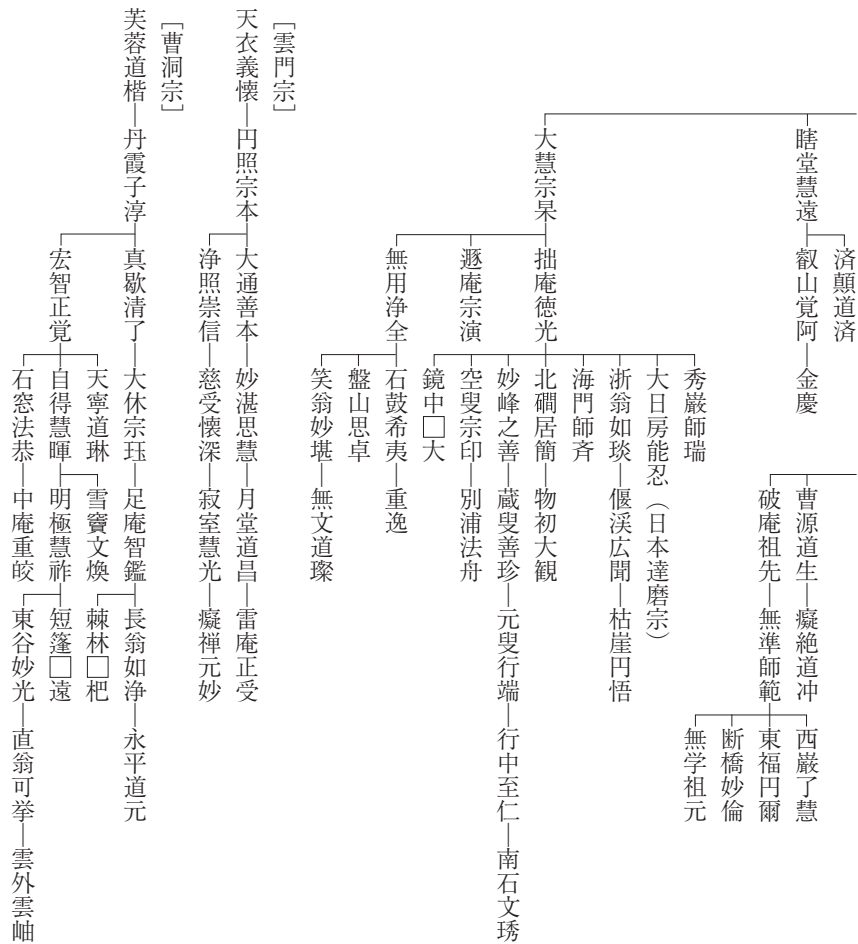
円極居頂

鉄鞭允韶

北海悟心

雪蓬慧明

陸游



## 古刊本『運庵和尚語録』の翻刻と訓読

### 凡例

- 一、左記は南宋代中期に江南禅林で活躍した臨濟宗松源派の運庵普巖（少瞻、一一五二？—一二三二、または一一五六—一二二六）の古刊本『運庵和尚語録』一巻一冊を翻刻し、さらに書き下しを付したものである。
- 一、底本にしたのは名古屋市東区徳川町の蓬左文庫（徳川美術館と並立）に所蔵される宋版（一に朝鮮刊本）の『運庵和尚語録』一巻であり、これに南北朝期に刊行された駒澤大学図書館に所蔵される五山版（覆宋版）の『運庵和尚語録』一巻を対校している。
- 一、底本は半丁が縦一八字、横一〇行の一八〇字で刻まれているが、紙面の都合上、翻刻ではこれに従わない。
- 一、翻刻に際しては概ね底本通りの活字としたが、必要に応じて正字体に改めた場合が存する。
- 一、句読点は何も付されていないが、駒澤大学図書館に所蔵される流布本『運庵和尚語録』に返り点や句読点が付されていることから、これを参考にして句読点を付し、また書き下し文を作成しておくものである。
- 一、拙稿「運庵普巖と『運庵和尚語録』の考察を行なった際の方便として、各上堂の上段に番号を付しておきたい。
- 一、人名や地名・寺名・事項などが並列している場合、便宜上、書き下しには分かり易くするため・を使用した箇所が存する。

運庵和尚語録

全

運庵和尚語録

全

鎮江府大聖普照禪寺蓮庵和尚語録。 侍者元靖編。

1 師開禧二年三月初八日、平江府寶華山受請入寺。

三門。鬆開戸牖、直出直入。鮎魚上竹竿、俊鶻越不及。

泗洲殿。出現楊州、坐斷壽丘。脚跟不點地、贏得一身

愁。不是冤家不聚頭。

方丈。日月面、霹靂閃電、直下來也、急著眼看。

拈帖。馬頭回、牛頭没、一字入公門、九牛車不出。

拈衣。箇様皮毛、千化萬變、黃梅鷲嶺、謾自流傳。後

代兒孫、可貴可賤。

法座。坐而不住、住而不坐。滴水生水、因風吹火。

陞座拈香。祝聖畢、次拈香云、此香堪笑又堪悲。剛把愁腸說向誰。冶父山前曾落節、千鈞之重一毫釐。盡情拈出、供養前住臨安府景德靈隱禪寺松源老師大和尚、用酬法乳之恩。遂就座。甘露諾庵肇和尚、白槌云、法筵龍象衆、當觀第一義。師云、鼓聲未動、此座未陞、好箇古佛樣子、莫有知時別宜底麼。僧問、橫擔主丈、縱橫虎穴魔宮、倒握吹毛、直下殺佛殺祖、正與麼時如

鎮江府大聖普照禪寺の蓮庵和尚語録。 侍者元靖、編す。

1 師、開禧二年三月初八日、平江府の宝華山にて請を受けて入寺す。

三門。戸牖を鬆開して、直に出で直に入る。鮎魚は竹竿に上り、俊鶻は趁い及ず。

泗洲殿。楊州に出現し、寿丘を坐断す。脚跟、地に点ぜず、贏ち得たり、一身の愁うるを。是れ冤家にあらずば頭を聚めじ。

方丈。日月・月面、霹靂閃電す、直下に来たるや、急に眼を著けて看よ。

帖を拈す。馬頭回り、牛頭没す。一字、公門に入らば、九牛も車き出だせず。

衣を拈す。箇様の皮毛、千化万変す、黃梅・鷲嶺、謾りに自ら流伝す。後代の兒孫、貴ぶべく賤しむべし。

法座。坐して住せず、住して坐せず。滴水は水を生じ、風に因りて火を吹く。

陞座して拈香す。祝聖し畢わり、次に香を拈じて云く、「此の香、笑うに堪えたり、又た悲しむに堪えたり。剛いて愁腸を把りて誰にか説向かん。冶父山前にて曾て落節す、千鈞の重きこと一毫釐。情を尽くして拈出し、前に臨安府景德靈隱禪寺に住せる松源老師大和尚に供養し、用て法乳の恩に酬ゆ」と。遂に座に就く。甘露の諾庵肇和尚、白槌して云く、「法筵の龍象衆、当に第一義を觀すべし」と。師云く、「鼓声未だ動

何。師云、崖崩石裂。進云、今日小出大遇去也。師云、勾賊破家。進云、師唱誰家曲、宗風嗣阿誰。師云、駟事未去、馬事到來。進云、莫是松源の子東山正傳麼。師云、此去西天十萬程。進云、向上還有事也無。師云、一東二冬、又手當胷。進云、學人不會。師云、江西馬大師、南岳讓和尚。僧禮拜。師云、今日失利。

乃云、衝開碧落、萬象平沈、喝散白雲、古今獨露。全彰意氣、不在躊躇、撒火飛星、擡眸萬里。鞠其趣向、別有來端、妙轉綿綿、甚生標格。直得、三世諸佛・六代祖師、只眨得眼、到者裏、推不進前、拽不退後。世出世間、承誰恩力。還委悉麼。萬方有慶歸明主、又見黃河一度清。

復舉、閩王請羅山陞堂。山斂衣顧視大衆、便下座。王近前執山手云、靈山一會、何異今日。山云、將謂你是

ぜず、此の座未だ陸らざるに、好箇の古仏の様子、時を知り宜を別つ底有ること莫きや」と。僧問う、「横に主文を担いて、虎穴・魔宮に縦横し、倒に吹毛を握りて、直下に仏を殺し祖を殺す。正与麼の時、如何ん」と。師云く、「崖崩れ石裂く」と。進んで云く、「今日、小出大遇し去れり」と。師云く、「勾賊、家を破る」と。進んで云く、「師は誰が家の曲をか唱へ、宗風は阿誰にか嗣ぐ」と。師云く、「驢事未だ去らざるに、馬事到来す」と。進んで云く、「是れ松源の的・東山の正伝なること莫きや」と。師云く、「此れより去ること西天十萬程」と。進んで云く、「向上、還た事有りや」と。師云く、「一東二冬、又手當胸す」と。進んで云く、「学人、会せず」と。師云く、「江西の馬大師、南岳の讓和尚」と。僧、礼拝す。師云く、「今日、失利せり」と。

乃ち云く、「碧落を衝開して、万象平沈し、白雲を喝散して、古今独露す。全く意気を彰わして、躊躇に在らず、火を撒し星を飛ばし、眸を擡ぐることに万里。其の趣向を鞠するに、別に來端有り、妙転綿綿として、甚生の標格なり。直に得たり、三世の諸仏・六代の祖師、只だ眼を眨得するも、者裏に到つて、推せども前に進まず、拽けども後に退かざることを。世出世間、誰が恩力をか承く。還た委悉すや。萬方に慶有りて明主に帰す。又た見る、黄河の一度び清むことを」と。

復た挙す、閩王、羅山を請して陞堂せしむ。山、衣を斂めて大衆を顧視し、便ち下座す。王、近前して山の手を執りて云く、



箇俗漢。師拈云、龍驤虎驟、玉轉珠回、裂破古今、白珪無玷。雖然坐致太平、要且未能剿絕。擊拂子。打刀須是邠州鍊。白槌云、諦觀法王法、法王法如是。

2 當晚小參。衲僧家、如龍似虎、飄風驟雲、阿誰奈何得你。有時拈一莖草、作丈六金身、有時吹一布毛、傳正法眼。離四句絕百非、清寥寥白滴滴、直透萬重關、不住青霄外。千手大悲提不起、爍迦羅眼莫能窺。至於提一機示一境、崖崩石裂、百川倒流、為佛祖梯航、作人天榜樣。與麼告報、還有人檢點麼。卓拄杖云、驢不及舌。

復舉、琅琊和尚問法華和尚、近離甚處公案。師拈云、盡謂琅琊被法華干戈、爭知法華被琅琊勘破。雖然、豈不見道、見利而忘義、故君子之道鮮矣。

3 謝兩序上堂。風雲合迺、龍虎交馳、一進一退、各適其宜。叢林烜赫、慧命流輝、壽丘面皮厚多少、惟許通方作者知。

「靈山の一会、何ぞ今日に異ならん」と。山云く、「將に謂らく、（ハ）你是是れ箇の俗漢」と。師拈じて云く、「龍は驤り虎は驟せ、玉は転じ珠は回る、古今を裂破し、白珪に玷無し。坐ながらに太平を致すと雖然も、要且つ未だ剿絶すること能はず」と。扨子を撃ちて「刀を打つには須是らく邠州の鉄なるべし」と。白槌して云く、「諦観法王法、法王法如是」と。

2 當晚小參。「衲僧家は龍の如く虎に似たり、飄風・驟雲、阿誰か你を奈何にし得ん。有る時は一莖草を拈じて、丈六の金身と作し、有る時は一布毛を吹いて、正法眼を伝う。四句を離れ、百非を絶し、清寥寥、白滴滴にして、直に万重の関を透り、青霄の外に住せず。千手大悲も提げ起こせず、爍迦羅眼も能く窺うこと莫し。一機を提げ一境を示すに至りて、崖崩れ石裂け、百川は倒に流れて、仏祖の梯航と為り、人天の榜樣と作る。与麼の告報、還た人の検点する有りや」と。拄杖を卓して云く、「驢も舌に及はず」と。

復た琅琊和尚、法華和尚に問う、「近ごろ甚れの処を離れしや」という公案を挙す。師、拈じて云く、「尽く謂えり、『琅琊は法華の干戈を被る』と。争でか知らん、法華は琅琊に勘破せらるることを。雖然ども、豈に道うことを見ずや、『利を見て義を忘る、故に君子の道は鮮なし』と」と。

3 兩序を謝する上堂。風雲合迺し、龍虎交ごも馳す、一進一退、各おの其の宜しきに適う。叢林は烜赫し、慧命は流輝す。寿丘が面皮、厚きこと多少ぞ。惟だ許す、通方、作者の知ること

4 上堂。入院數日來、人事鬧闐闐、兩脚走如烟、眼不見鼻孔。大聖國師、聞得出來、道箇希有。何故。過去燈明仏、本光瑞如此。

5 淮東歸上堂。歸來出去、迦葉貧、阿難富。出去歸來、南天台、北五臺。目前包裹、滿面塵埃、禹力不到處、河聲流向西。

6 上堂。舉靈雲見桃花悟道頌、玄沙云、諦當甚諦當、敢保老兄未徹在。師云、同坑無異土、決定有疎親。

7 松源先師忌日拈香。近之不遜、遠之則怨。無義無情、可貴可賤。一年一度雪深冤、畢竟無人是的傳。

8 上堂。過去諸如來、斯門已成就、一槌擊碎。見在諸菩薩、今各入圓明、風火交煎。未來修學人、當依如是住、舌拄上齶。壽丘與麼道、也是與賊過梯。

9 琅琊蒙古和尚至上堂。故人方外來、相見便相悉。倒指三十年、道義同一日。鐵壁銀山、十分狼藉。直得、同

を。

4 上堂。入院より數日來、人事は鬧闐闐たり。兩脚は走ること烟の如く、眼は鼻孔を見ず。大聖國師、聞き得て出で來たりて箇の希有を道う。何が故ぞ。過去の燈明仏、本光瑞は此くの如し。

5 淮東より歸る上堂。歸り來たり出で去る、迦葉は貧しく、阿難は富めり。出で去り歸り來たる、南は天台、北は五臺。目前に包裹す、滿面の塵埃、禹力も到らざる處、河声流れて西に向かう。

6 上堂。靈雲、桃花を見て悟道する頌、玄沙云く、「諦當なることは甚だ諦當なるも、敢て保す、老兄は未だ徹せざることを」というを挙す。師云く、「同坑に異土無し、決定して疎親有り」と。

7 松源先師忌日の拈香。之れに近けば不遜なり、之れに遠ざかるも則ち怨となる。義無く情無し、貴ぶべく賤しむべし。一年一度、深冤を雪ぐ。畢竟して人無し、是れの伝なり。

8 上堂。「過去の諸如來、斯の門、已に成就す」と、「一槌に擊碎す。「見在の諸菩薩、今、各おの円明に入る」と、風火にて交ごも煎る。「未來の修學人、當に如是に依りて住すべし」と、舌は上の齶を拄う。壽丘、与麼に道うも、也た是れ賊の与めに梯を過す。

9 琅琊の蒙古和尚至る上堂。故人、方外より來たる、相い見えて便ち相い悉す。指を倒すれば三十年、道義、一日に同じ。鉄壁

聲相應、同氣相求。西河師子在汾州。

10 上堂。舉、曹山因僧問、清稅孤貧、乞師賑濟。山召云、稅闌梨。僧應諾。山云、清源白家三盞酒、喫了猶道未沾唇。師云、毒攻毒、楔出楔、老曹山不識譬、那裏是者僧喫酒處。

普照語終。

眞州報恩光孝禪寺語。

侍者智能編。

1 拈帖。令不虛行、箭不虛發、倘或躊躇、二九十八。

2 歲旦上堂。舉、僧問鏡清、新年頭還有佛法也無。清云、有。僧云、如何是新年頭佛法。清云、元正啓祚、萬物咸新。僧云、謝師答話。清云、鏡清失利。又僧問明教、新年頭還有佛法也無。教云、無。僧云、年年是好年、日日是好日、爲什麼卻無。教云、張公喫酒李公醉。僧云、老老大大、龍頭蛇尾。教云、今日失利。師拈云、有與無、非意氣、明教鏡清、二俱失利。有問報恩、新年頭還有佛法也無。拈拄杖便打。何故。摠不可作野狐精見解。

銀山、十分の狼藉。直に得たり、同声相い応じ、同氣相い求むことを。西河の師子、汾州に在り。

10 上堂。挙す、曹山、因みに僧問う、「清稅孤貧なり、乞う師賑濟したまえ」と。山、召して云く、「稅闌梨」と。僧、応諾す。山云く、「清源白家、三盞の酒、喫し了りて猶お道う、未だ唇を沾わさず」と。師云く、「毒にて毒を攻め、楔にて楔を出だす、老曹山、識譬せず、那裏か是れ者の僧が酒を喫する処ぞ」と。

普照の語、終わる。

眞州報恩光孝禪寺語。

侍者智能編す。

1 帖を拈ず。令は虚しくは行われず、箭は虚しくは発せず。倘或し躊躇せば、二九十八。

2 歲旦上堂。挙す、僧、鏡清に問う、「新年頭、還た仏法有りや」と。清云く、「有り」と。僧云く、「如何なるか是れ新年頭の仏法」と。清云く、「元正啓祚、万物咸な新たなり」と。僧云く、「師の答話を謝す」と。清云、「鏡清失利」と。又た僧、明教に問う、「新年頭、還た仏法有りや」と。教云く、「無し」と。僧云く、「年年是好年、日日是好日なり、什麼と爲てか却て無き」と。教云く、「張公、酒を喫し、李公酔う」と。僧云く、「老老大大、龍頭蛇尾」と。教云く、「今日、失利す」と。師、拈じて云く、「有と無と、意気に非ず、明教・鏡清、二り俱に失利す。報恩に『新年頭、還た仏法有りや』と問うこ

3 上堂。舉、黃檗示衆云、汝等諸人、盡是噇酒糟漢公案。師拈云、洞門無鑰、劔閣崔嵬、風露高寒、且非人世。是則是、天上人間知幾幾。者僧一問不將來、黃檗通身是泥水。

4 冬至上堂。卓拄杖云、一陽生也、樹頭驚起雙雙魚、石上迸出長長筍。靠拄杖云、即日伏惟、兩序高人、現前清衆、履茲長至、倍膺戩穀。喝一喝。俗氣未除。

5 上堂。季春漸暄、鳥啼花笑。恒河沙數見聞覺知、悉皆了了。因甚西天老凍膿、總被聲色轉却、致令後代兒孫一箇箇擡脚不起。且道、利害在什麼處。金屑雖貴、落眼成翳。

6 上堂。一葉落天下秋、一塵起大地收。臨濟掌黃檗、南泉喚趙州。開口不在舌頭上、夜濤催發海南舟。

光孝語終。

と有らば、拄杖を拈じて便ち打たん。何が故ぞ。総て野狐精の見解を作すべからず」と。

3 上堂。黃檗、衆に示して云く、「汝等諸人、尽く是れ噇酒糟の漢なり」という公案を拈す。師拈じて云く、「洞門に鑰無し、劔閣は崔嵬たり、風露は高寒たり、且つ人世に非ず。是なることは則ち是なるも、天上人間、知ること幾幾ぞ。者の僧、一問も將ち來たらざるも、黃檗は通身是れ泥水なり」と。

4 冬至上堂。拄杖を卓して云く、「一陽生ぜり、樹頭驚き起こす双魚の魚、石上迸き出だす長長たる筍」と。拄杖に靠れて云く、「即日伏して惟れば、兩序の高人、現前の清衆、茲の長至を履みて、倍ます戩穀を膺く」と。喝一喝す。「俗氣未だ除かず」と。

5 上堂。季春漸く暄かにして、鳥啼き花笑む。恒河沙数の見聞覺知、悉く皆な了了たり。甚に因りてか西天の老凍膿、総て声色に転却せられ、後代の兒孫をして一箇箇に脚を擡げ起こさざらしむるを致す。且らく道え、利害、什麼の処にか在る。金屑は貴しと雖も、眼に落つれば翳を成す。

6 上堂。一葉落ちて天下秋なり、一塵起ちて大地収まる。臨濟は黃檗を掌ち、南泉は趙州を喚ぶ。口を開くことは舌頭上に在らず、夜濤は海南の舟を發することを催す。

光孝語、終わる。

安吉州道場山護聖萬歲禪寺語。

侍者惟衍編。

1 上堂。龍吟虎嘯、斗轉星移、剷除上古風規、開闢今時樞要。法社自然号令、斯文可以日新。一舉當頭、如何敲唱。妙舞不須誇拍變、三臺須是大家催。

2 上堂。舉、臨濟入京教化、至一家門首云、家常添鉢。

婆云、太無厭生。濟云、飯也未得、何言大無厭生。婆便閉却門。師拈云、家常添鉢、臨濟平地活埋、太無厭生、婆婆<sup>(死)</sup>而不弔。

3 上堂。舉、石霜慈明、或時方丈内以水一盆、上劄一口劍、下面著一緇草鞋、以拄杖橫按膝上。僧入門便指、擬議棒出。師拈云、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮。

4 顯慈諾庵和尚至上堂。顯慈鼻祖、諾庵法兄、機如電掣、辯似河傾。無心相撞著、分外得人憎。彼此不堪爲種草、先師之道轉玲竅。

5 上堂。山僧昨夜三更、夢中被一陣黑風吹、墮羅刹鬼國、幾乎性命不存。賴得曉鐘一動、驚覺起來。開眼合眼、

安吉州道場山護聖萬歲禪寺語。

侍者惟衍、編す。

1 上堂。龍は吟じ虎は嘯き、斗は転じ星は移る、上古の風規を剷除し、今時の樞要を開闢す。法社自然の号令、斯の文、以て日に新たなるべし。一たび挙げば、当頭、如何んが敲唱せん。妙舞は拍變に誇るを須いはず、三臺は須是らく大家の催すべし。

2 上堂。挙す、臨濟、京に入りて教化し、一家の門首に至りて云く、「家ごと常に鉢を添う」と。婆云く、「太無厭生」と。濟云く、「飯も未だ得ず、何ぞ大無厭生と言う」と。婆便ち門を閉却す。師拈じて云く、「家ごと常に鉢を添う、臨濟は平地に活埋す。太無厭生、婆婆は死して弔わず」と。

3 上堂。挙す、石霜の慈明、或る時、方丈の内水一盆を以て上に一口の劍を劄し、下面に一緇の草鞋を著け、拄杖を以て横に膝上に按ず。僧、門に入れば便ち指し、擬議すれば棒出す。師拈じて云く、「巧笑は倩しく、美目は盼み、素以て絢を爲す」と。

4 顯慈の諾庵和尚至上堂。顯慈の鼻祖、諾庵法兄、機は電掣の如く、辯は河傾に似たり。無心に相相撞著し、分外に人の憎しみを得たり。彼此、種草と爲るに堪えず、先師の道は転た玲竅たり。

5 上堂。山僧、昨夜三更、夢中に一陣の黒風に吹かれ、羅刹鬼國に墮ち、幾乎んど性命存せず。賴いに曉鐘の一動することを得て、驚覺し起き來たる。開眼と合眼と、千頭百緒、胡

千頭百緒、帶累胡達摩釋迦文、祖閣漆桶。堂中上座、總少他一分不得。何故。人義盡從貧處斷、世情偏向有錢家。

6 松源先師塔頭拈香。斷楊岐正脉、壞臨際鋼宗、赤土塗牛妳、密室不通風。身前身後不了、深瘞白雲之中。非父非子、挾路相逢。澗藻溪蘋相鈍置、謝郎錯認釣魚翁。

7 上堂。舉、資福示衆云、隔江見資福利竿便回、脚跟下好與三十棒。何況過江來。時有僧纔出。福云、不堪共語。師拈云、勾賊破家。

8 靈隱石鼓和尚至請上堂。師引座云、宗門中有一千七百則公案、號曰古今、又爲長物。拈起則汚人唇齒、且撥置一邊。衲僧家各有一則公案、籬坍壁倒、塞壑填溝、直是扶持不起。問佛不會、問祖不會、問向來大白無用叔祖不會、問靈隱松源先師不會、道場也不會。幸遇石鼓法叔光訪山間、必爲解粘去縛、抽釘拔楔。使小姪舉衆得箇安樂、也不定。所謂、一東二冬、叉手當智、下坡不走、快便難逢。下座。同伸攀請、願垂開示。

達摩・釈迦文を帶累して、漆桶に祖閣す。堂中の上座、総て他の一分を少き得ず。何が故ぞ。人義は尽く貧処より断じ、世情は偏向有錢の家に向かう。

6 松源先師の塔頭にて拈香す。楊岐の正脉を断じ、臨際りんさいの鋼宗こうしゅうを壊す。赤土、牛妳うしめに塗り、密室、風を通ぜず。身前身後に了ぜず、深く白雲の中に瘞やぶむ。父に非ず子に非ず、挾路にて相い逢う。澗藻・溪蘋、相鈍置す。謝郎錯りて認む、釣魚つりうまの翁。

7 上堂。挙す、資福しきふく、衆に示して云く、「江を隔てて資福利しきふくの利竿せりかんを見て便ち回るも、脚跟下きようこんか、好し三十棒を与うるに。何に況んや江を過ぎ来たるをや」と。時に僧有りて纔かに出づ。福云く、「共に語るに堪えず」と。師拈じて云く、「勾賊こうぞく、家を破る」と。

8 靈隱りんいんの石鼓せきこ和尚わうじやう至りて請う上堂。師、引座いんざして云く、「宗門の中に一千七百則の公案有り、号して古令と曰う、又た長物ちやうぶつ爲り。拈起すれば則ち人の唇齒しんしを汚す、且らく一辺に撥置す。衲僧家なつそうけ、各おの一則の公案有り、籬は坍れ壁は倒れ、壑を塞ぎ溝に填みみ、直是ちきに扶持し起こせず。仏に問えども会せず、祖に問えども会せず、向來の大白たいはくの無用叔祖むようしよくそに問えども会せず、靈隱の松源先師に問えども会せず、道場も也た会せず。幸いに石鼓法叔せきこほふしよくの山間に光訪くわうぼうするに遇う、必ずや爲めに粘を解き縛を去り、釘

9 開山伏虎禪師忌日拈香。老訥今朝死、老岩今日生、二俱無伎倆、有夢不同床。(龜)寅緣繼踵、香火荒涼。肝腸鍊作也須裂、駢屎如何比麝香。

10 元霄上堂。一灯然出百千灯、灯灯無盡。未審、這一灯從甚處出。卓拄杖。且不從者裏出。良久云、竹杖化龍去、癡人屎夜塘。

11 上堂。毀於佛、謗於法、不入衆數、是什麼人。道場賦性匾窄、直是不容。不免與他本分草料攢向他方世界。冷地裏有箇瞥地、終不孤負老僧。

12 冬夜。舉洞山與泰首座喫菓子公案。師云、老洞山玷辱宗風、泰首座埋没自己。雙雙綉出鴛鴦、千古扶持不起。

13 伏虎禪師忌日拈香。四年承乏雲峯寺、暗寫愁腸寄阿誰。每到十一月初五、一狐疑了一狐疑。故我開山伏虎禪師、指柳罵楊、傷龜怨鼈。你死我活、莫說莫說、一盃鹿茶

を抽き楔を抜かん。小姪をして衆を挙げて箇の安樂を得せしむるも、也た不定なり。所謂る、一東二冬、又手当胸、坡を下りて走らざれば、快便も逢い難し」と。下座して「同じく攀請を伸ぶ、願わくは開示を垂れたまへ」と。

9 開山伏虎禪師忌日の拈香。老訥は今朝に死し、老岩は今日に生まる。二り俱に伎倆無し、夢有りて床を同じくせず。寅縁にて踵を継ぎ、香火は荒涼す。肝腸鉄作、也た須らく裂くべし。駢屎、如何んが麝香に比せん。

10 元霄上堂。「一灯は百千灯を然出し、灯灯尽くる無し。未審、這の一灯、甚の処よりか出づ」と。拄杖を卓して「且つ者裏より出でず」と。良久して云く、「竹杖は龍と化し去り、癡人は夜塘を辱む」と。

11 上堂。仏を毀り、法を謗りて、衆數に入らず、是れ什麼人ぞ。道場が賦性は匾窄にして、直に容れず。他に本分の草料を与えて他方世界に攢向することを免れず。冷地裏に箇の瞥地なる有るも、終に老僧を孤負せず。

12 冬夜。洞山と泰首座と菓子を喫する公案を挙す。師云く、「老洞山は宗風を玷辱し、泰首座は自己を埋没す。双双、鴛鴦を綉出し、千古に扶持し起す」と。

13 伏虎禪師忌日の拈香。四年承乏す、雲峯の寺。暗に愁腸を写して阿誰にか寄せん。十一月初五に到る毎に、一狐疑いをりて一狐疑う。故に我が開山伏虎禪師、柳を指して楊を罵り、亀を傷つけ鼈を怨れむ。你是死し、我れは活く。説くこと莫か

一炷香、也勝和盲教訴瞎。

14 除夜小參。千聖不傳底機、填溝塞壑。衲僧道不得底句、戴角擎頭。年窮歲盡、命若懸絲。臘盡春回、石人撫掌。與麼與麼、法出奸生。不與麼不與麼、徐六擔版。如斯告報、且不作佛法商量、又不作世諦流布。只如東村王老夜燒錢、又作麼生。喝一喝。

復舉德山小參不荅話公案。師拈云、德山平生據一條白棒、佛來也打、祖來也打。無端向這僧面前納款、致令千古之下遭人檢點。今夜莫有救得德山底麼。擲下拄杖。

15 松源先師忌日拈香。頸短耳聵、千妖百怪。如是三十季、續東山正脉。我也錯商量、三拜一爐香。一任傍人說短長。

萬歲語終。

法語。

1 示守德禪人。

佛祖之道、如大日輪昇于虛空、無所不燭。只爲情生智隔想變體殊故、勞我黃面老子、四十九并東說西說、未

れ、説くこと莫かれ、「一盃の鹿茶、一炷の香、也た盲に和して教んに訴瞎するに勝れたり」と。

14 除夜小參。「千聖も伝えざる底の機、溝を填め壑を塞ぐ。衲僧も道い得ざる底の句、角を戴き頭を撃ぐ。年窮まり歳尽き、命は懸絲の若し。臘尽き春回えり、石人は掌を撫づ。与麼、与麼、法出でて奸生まる。不与麼、不与麼、徐六担版。斯の如き告報、且つ仏法の商量と作さず、又た世諦の流布と作さず。只だ東村の王老、夜に錢を焼くが如きは、又た作麼生」と。喝一喝す。

復た「德山の小參に答話せざるの公案」を挙す。師拈じて云く、「德山は平生、一条の白棒に拠りて、仏來たるも打ち、祖來たるも打つ。端無くも、這の僧の面前に向かつて款を納れ、千古の下に人の檢點に遭わしむることを致す。今夜、德山を救い得る底有ること莫きや」と。拄杖を擲下す。

15 松源先師忌日の拈香。頸は短く耳は聵れ、千妖百怪たり。是の如く三十年、東山の正脉を續く。我れ也た錯つて商量す、三拜一爐の香。一に傍人の短長を説くに任す。

万歳語、終わる。

法語

1 守德禪人に示す。

仏祖の道は、大日輪の虚空に昇りて、燭さざる所無きが如し。只だ情生じて智隔たり、想変じて体殊なるが為めの故に、我が



後拈華微笑。至於西天此土祖祖聯芳燈燈分燄、無非提持箇事。不妨透頂透底、截鐵斬丁。可謂、一盲引衆盲、相牽入火院。若是箇殺佛殺祖底漢、便乃逆風揚塵、衝波激浪、朝游羅浮、暮歸檀特。羅籠不肯住、呼喚不回頭、於佛界魔界刀山火聚、出沒變通、自由自在。滅卻臨濟正宗、瞎卻正法眼藏。似與麼操志立身、似與麼出家行脚、似與麼提持正令。也只救得一半。況或三咬兩咬咬不斷、依前打入骨董袋裏去。非唯埋沒自己、亦乃鈍置先宗。莫恠壽丘多口、你自冷地相度。

## 2 示龍華會首韋德通。

抱道之士、根器不同、舉措有異、凡出言吐氣、千聖莫知趣向。縱是釋迦弥勒、亦難近傍。至於瞥轉生死去來・淨穢兩境・逆順是非・塵勞煩惱、轉見力量弥著、確乎其不可拔。豈止虛而靈空而妙。如青天轟一箇霹靂、擬擡頭早覓他蹤跡不得。蓋命根一斷、到大安樂之場、了無餘事。日銷萬兩黃金、亦未爲分外。喚什麼作涅槃般若、喚什麼作直指單傳、喚什麼作生死根塵、喚什麼

黃面老子を勞わせて、四十九年、東説西説し、末後に拈華微笑せしむ。西天・此土の祖祖の、芳を聯ね燈燈に焰を分つに至りて、箇の事を提持するに非ざるは無し。妨げず、透頂透底鉄を截り丁を斬ることを。謂つべし、一盲、衆盲を引き、相い牽いて火院に入ると。若し是れ箇の仏を殺し祖を殺す底の漢ならば、便乃ち逆風に塵を揚げ、衝波・激浪、朝に羅浮に遊び、暮に檀特に帰らん。羅籠すれども肯て住まらず、呼喚すれども頭を回らさず、仏界・魔界・刀山・火聚に於いて、出沒變通し、自由自在なり。臨濟の正宗を滅却し、正法眼藏を瞎却す。与麼に似て志を操り身を立て、与麼に似て出家行脚し、与麼に似て正令を提持す。也た只だ一半を救い得るのみ。況んや或し三咬・兩咬して咬不斷ならば、依前として骨董袋裏に打入し去らん。唯だ自己を埋没するのみに非ず、亦た乃ち先宗をも鈍置す。寿丘の多口を恠しむこと莫かれ、你自ら冷地に相い度れ。

## 2 龍華會首の韋德通に示す。

抱道之士、根器同じからず、挙措するに異なり有り。凡そ言を出だし氣を吐くに、千聖も趣向を知ることを莫し。縦い是れ釈迦・弥勒も、亦た近傍し難し。生死去來・淨穢兩境・逆順是非・塵勞煩惱を瞥転するに至りて、転た見ん、力量弥いよ著わられて、確乎として其れ抜くべからざることを。豈に止だ虚にして靈、空にして妙なるのみならんや。青天に一箇の霹靂轟くが如し、頭を擡げんと擬すれば、早や他の蹤跡を覓め得ず。蓋し命根一断して、大安樂の場に到るも、了に餘事無し。日に万

作天堂地獄。大咲一聲、天回地轉。若如是操履、方有少分相應。稍胷中礙膺之物不除、妄相陞沈不歇。要擬向上宗乘、如掉棒打月。若欲易會、一發打辨精神、摒却舊時窠窟、一躍龍門、飛騰雲漢、至不可說不可說香水海、那邊猶有餘地。豈止敵生死者哉。不見、蟾首座問洞山、佛真法身、猶若虛空、應物現形、如水中月、作麼生說箇應底道理。山云、如驢覷井。蟾云、是則是、只道得八成。山云、首座作麼生。蟾云、如井覷驢。看他古德漆桶相挨、便乃生風起草、向未開口以前、捏定咽喉、則彼此有光、堪爲從上爪牙後世龜鑑者也。余丙寅歲季秋、來掃洒是刹、適邊事未寧、米餽湧貴、而會中供辨米麥不輟。蓋會首處士韋德通、正因出家、正因修行、正因操履、留心於法門有年、補於常住者多矣。晚年之間、究竟向上一段光明、爲敵生死照破昏暗超出三際。乃是不虛出家之志、袖軸炷香、求語警策。書此昭示云。

両の黄金を銷すも、亦た未だ分外と爲さず。什麼を喚んでか涅槃般若と作し、什麼を喚んでか直指单伝と作し、什麼を喚んでか生死根塵と作し、什麼を喚んでか天堂・地獄と作さん。大咲一声、天回地転す。若し是の如く操履せば、方めて少分の相応有らん。稍や胸中礙膺の物をば除かざれば、妄りに相い陞沈して歇まず。向上の宗乘に擬せんと要せば、棒を掉いて月を打つが如し。若し易く会せんと欲せば、一発に精神を打辨し、旧時の窠窟を摒却して、龍門に一躍し、雲漢に飛騰し、不可說不可說の香水海に至りても、那邊に猶お餘地有り。豈に止だ生死に敵する者のみならんや。見ずや、蟾首座、洞山に問う、「仏の真法身、猶お虚空の若し、物に応じて形を現ずること、水中の月の如し、作麼生か箇の応ずる底の道理を説かんと。」山云く、「驢の井を覷るが如し」と。蟾云く、「是なることは則ち是なるも、只だ八成を道い得るのみ」と。山云く、「首座、作麼生」と。蟾云く、「井の驢を覷るが如し」と。看よ、他の古德、漆桶相い挨き、便乃ち風を生じ草を起すことを。未だ口を開かざる以前に向かつて、咽喉を捏定せば、則ち彼此に光有らん。從上の爪牙の、後世の龜鑑と爲すに堪えたる者なり。余、丙寅の歳の季秋、来たりて是の刹を掃洒す。適たま辺事未だ寧からず、米餽は湧いて貴けれども、会中にて米麦を供辨して歇まず。蓋し会首の処士韋德通、正因に出家し、正因に修行し、正因に操履し、心を法門に留めて年有り、常住を補う者多し。晩年の間、向上一段の光明を究竟す、生死に敵し、昏

贊佛祖。

1 觀音大士。

草木丘陵、風雷雲氣、具足妙相尊、證入三摩地。萬象森羅從鼎沸。

2 達摩大師。

葦航身險、風急水寒、九年面壁、用尽心肝。大唐人不知、隻履過西天。單傳直指待驢年。

3 百丈大師。

親見馬簸箕、面目甚奇怪、鼻痛野鴨飛、漆桶好不好。只見祥麟一角尖、定知罪犯彌天大。

4 布袋和尚。

山月未出、海雲忽飄、瞑目而坐、歸路迢迢。布袋裏頭無長物、許誰胡蝶夢溪橋。

5 濟顛書記。

毀不得、贊不得、天台出得箇般僧、一似青天轟霹靂。

暗を照破し、三際を超出せんが為めなり。乃ち是れ出家の志を虚しくせず。軸を袖にし香を炷き、警策を語らんことを求む。此れを書して昭示すと云う。

贊佛祖

1 觀音大士。

草木丘陵、風雷雲氣、妙相尊を具足して、三摩地に証入す。万象森羅、鼎沸するに従す。

2 達摩大師。

葦航は身險く、風は急にして水は寒し。九年の面壁、心肝を用い尽くす。大唐の人は識らず、隻履にて西天を過ぐることを。單傳直指、驢年を待つ。

3 百丈大師。

親しく馬簸箕に見えて、面目甚だ奇怪なり。鼻は痛く、野鴨飛ぶ。漆桶、好不好。只だ見る祥麟一角の尖。定んで知る、罪犯の彌天に大なることを。

4 布袋和尚。

山月未だ出でず、海雲忽ち飄る。目を瞑じて坐し、帰路は迢迢たり。布袋裏頭、長物無し。誰にか許す、胡蝶の溪橋を夢みることを。

5 濟顛書記。

毀り得ず、贊し得ず、天台より箇般の僧を出だし得て、一えに

走京城無處覓、業識忙忙、風流則劇。末後筋斗背翻、  
煨出水連天碧。稽首濟顛、不識不識。挾路相逢捻鼻頭、  
也是普州人送賊。

自贊。

1 斷楊岐正脉、滅臨濟綱宗。猿啼碧嶂、月鎖千峯。影落  
于闐國、人在大遼東。應緣淡泊、無分從容。謂是運庵  
真面目、澄潭不許臥蒼龍。

頌古。

1 世尊降生、一手指天、一手指地。  
自謂五更侵早起、誰知更有夜行人。條風塊雨今非昔、  
堯舜垂衣萬國寘。

2 初祖見梁王。

擡頭霹靂不容追、缺齒胡僧陷鏡圍。六合空空風悄悄、  
杜鵑啼月不如歸。

3 心不是佛、智不是道。

月淡江空泛小舟、唱歌和月看江流。更深欹枕夢何處、

青天に霹靂を轟かすに似たり。京城に走りて覓むるに処無し。  
業識忙忙として、風流なることは則ち劇だし。末後に筋斗背  
翻し、水の天に連なりて碧きことを煨き出だす。稽首す濟顛。  
不識、不識。挾路に相い逢うて鼻頭を捻る。也た是れ普州の人  
賊を送る。

自贊

1 楊岐の正脉を断じ、臨濟の綱宗を滅す。猿は碧嶂に啼き、月  
は千峯を鎖す。影は于闐國に落ち、人は大遼の東に在り。縁  
に應じて淡泊にして、從容するに分無し。是れを運庵の真面目  
なりと謂わば、澄潭には蒼龍を臥せしむるを許さず。

頌古。

1 世尊降生し、一手は天を指し、一手は地を指す。  
自ら謂えり、五更に早を侵して起くと。誰か知る、更に夜行の  
人有ることを。條風・塊雨、今は昔に非ず。堯舜 衣を垂れ  
て万国寘う。

2 初祖、梁王に見ゆ。

頭を擡ぐる霹靂、追う容からず、缺齒の胡僧 鉄圍に陥る。六  
合は空空として風は悄悄たり、杜鵑、月に啼きて不如歸。

3 心は是れ仏にあらず、智は是れ道にあらず。

月は淡く江は空しくして小舟を泛べ、唱歌、月に和して江流を

兩岸青霜曉未収。

4 狗子無佛性。

鍊壁銀山幾萬重、有無一字若爲通。斬関豈在攀旗手、枉有虛名落漢中。

5 洗鉢孟話。

洗鉢家家事一同、新羅不在海門東。因行掉臂趙州老、身在烟蘿第幾重。

6 百丈野狐。

搽抔抹粉没人猜、五百生中與麼來。觀體風流有多少、不知何處可安排。

7 趙州因僧問、百骸俱潰散、一物鎮長靈、如何是長

靈底物。州云、今朝風起。

百骸一物臭熏天、風起今朝病一般。酷恨双双醫不得、枕邊空聽鴈聲寒。

8 青州布衫。

等閑提起七斤衫、多少禪和著意參。盡向青州做窠窟、不知春色在江南。

看る。更こは深こけ枕まくらを敬おそつ、夢ゆめは何なにれの処ところぞ。兩岸りょうがんの青霜せいそう、曉あけ未まだ収とまらず。

4 狗子に仏性無し。

鍊壁銀山、幾いくばくくの万重ばんじゆうぞ。無なの一字いちじ有り、若いか爲かんが通とぜん。関かんを斬きること豈いかに攀旗けんきの手に在あらんや。枉まげて虚名きよなの漢中かんちゆうに落おつる有り。

5 洗鉢孟の話。

洗鉢せんぱつは家家けいけいにて事こと一同いつどうなり。新羅しんらは海門かいもんの東ひがしに在あらず。行ゆきに因よんで臂うでを掉おつ趙州老しゆうじゆうらう、身みは烟蘿えんら第幾重だいけいじゆうにか在ある。

6 百丈野狐。

坏くわいを搽ぬり粉こなを抹ぬりて人ひとの猜うたがう没なし。五百生ごひゃくせい中ちゆう、与麼よもにし来きたる。觀體くわんたい風流ふうりゆうにして、多少たうしやうか有ある。知しらず、何なにれの処ところにか安排あんぱいすべき。

7 趙州、因みに僧問う、「百骸俱に潰散し、一物、鎮えに

長靈たり。如何なるか是れ長靈なる底の物」と。州云く、「今朝、風起こる」と。

百骸一物、臭くさくして天あまに熏かる。風起かぜおこりて今朝けさ、病やまい一般いぱんなり。酷くだ恨にくむ、双ふた双ふたの医いし得えざることを。枕邊まくらべにて空そらしく聽きく、鴈声がんせいの寒さきことを。

8 青州の布衫。

等閑たうかんに提起ていす七斤しちきんの衫せん。多少たうしやうの禪和ぜんわ、意いを著きけて參さんず。尽じんく青州せいしゆうに向むかつて窠窟かそくを做なす。知しらず、春色しんしきは江南かんなんに在あることを。

9 芭蕉拄杖子。

洗腸換骨老芭蕉、拄杖拈來價轉高。賣與買人人不買、  
翻令平地起波濤。

10 密庵破沙盆。

如是如何正法眼、驀然突出破沙盆。依稀渭北春天樹、  
彷彿江東日暮雲。

偈頌。

1 大義渡。

孩兒不見棄渾身、可惜婆婆眼不親。白浪洪波無了日、  
至今愁殺渡頭人。

2 大藏主號鏡中。

孤光不墮有無間、碧落衝開萬象寒。撲破果然亡朕跡、  
從教大地黑漫漫。

3 寄天目禮書記闍回。

爪牙消息露三山、勘破曾郎想不難。一嘯歸來千嶂曉、  
菸菟不似舊時斑。

4 寄太白幸首座。

糞花堆頭潦倒身、且無花鳥鬧芳春。口邊白醜心如鏡、

9 芭蕉の拄杖子。

腸を洗い骨を換う老芭蕉、拄杖拈じ來たりて価い転た高し。売  
与して人に買わしむに、人は買わず。翻つて平地をして波濤を  
起こさしむ。

10 密庵の破沙盆。

如是、如何んぞ正法眼。驀然として突出す破沙盆。依稀たり、  
渭北春天の樹。彷彿たり、江東日暮の雲。

偈頌。

1 大義渡。

孩兒見えずして渾身を棄つ。惜しむべし、婆婆、眼の親しから  
ざることを。白浪洪波、了日無し。今に至りて愁殺す、渡頭  
の人。

2 大藏主、鏡中と号す。

孤光は有無の間に墮せず、碧落衝開して万象寒し。撲破すれ  
ば果然として朕跡亡し。從教い大地の黒漫漫たりとも。

3 天目礼書記の闍より回るに寄す。

爪牙の消息、三山に露わる。勘破す、曾郎の想い難からざるこ  
とを。一嘯して帰りに來たる千嶂の曉。菸菟は旧時の斑に似す。

4 太白の幸首座に寄す。

糞花堆頭、潦倒の身。且つ花鳥の芳春に鬧しき無し。口邊の  
白醜、心は鉄の如し。甘んじて叢林不義の人と作る。

甘作叢林不義人。

5 題戢庵居士竹亭。

疎疎綠葉是清風、屈指巡簷數不窮。幽致果然難比况、  
此君未必在其中。

6 送僧見孟侍郎。

三秋月冷半山雲、來謁維摩必有因。特見嶺梅開一朵、  
也應知道不干春。

7 乘禪者歸蜀。

出劔門兮入劔門、眼空寰宇一閑身。杖挑一滴江南水、  
散作西川劫外春。

8 送洪維那。

笑把虚空一口吞、鬮髀瞥轉振乾坤。破沙盆有兒孫在、  
玉笛橫吹出海門。  
運庵和尚語錄終。

5 戢庵居士の竹亭に題す。

疎疎たる緑葉、是れ清風。指を屈し簷を巡つて数えんとするも  
窮まらず。幽致は果然として比況し難し、此君、未だ必ずし  
も其の中に在らず。

6 僧の孟侍郎に見えるを送る。

三秋、月は冷し、半山の雲。来たりて維摩に謁す、必ず因有ら  
ん。特に見る、嶺梅の一朵開くことを。也た応に春に干わらざ  
るを知道るべし。

7 乘禪者、蜀に帰る。

劔門を出でて劔門に入る、眼は寰宇を空す一閑身。杖にて一滴  
の江南の水を挑げて、散じて西川の劫外の春と作す。

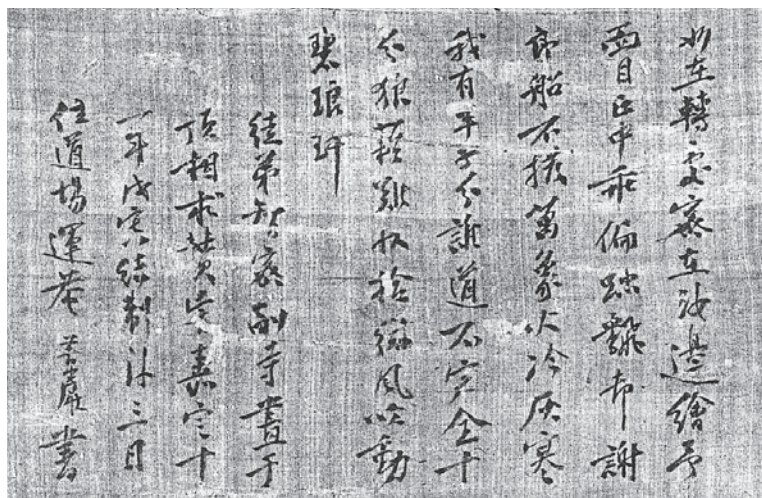
8 洪維那を送る。

笑いて虚空を把つて一口に呑む、鬮髀瞥転して乾坤に振う。破  
沙盆に兒孫有りて、玉笛横に吹いて海門を出づ。  
運庵和尚語録、終わる。



【图1】 運庵普巖自贊頂相（龍寶山大德寺所藏）





【图Ⅱ】 運庵普巖自贊 部分



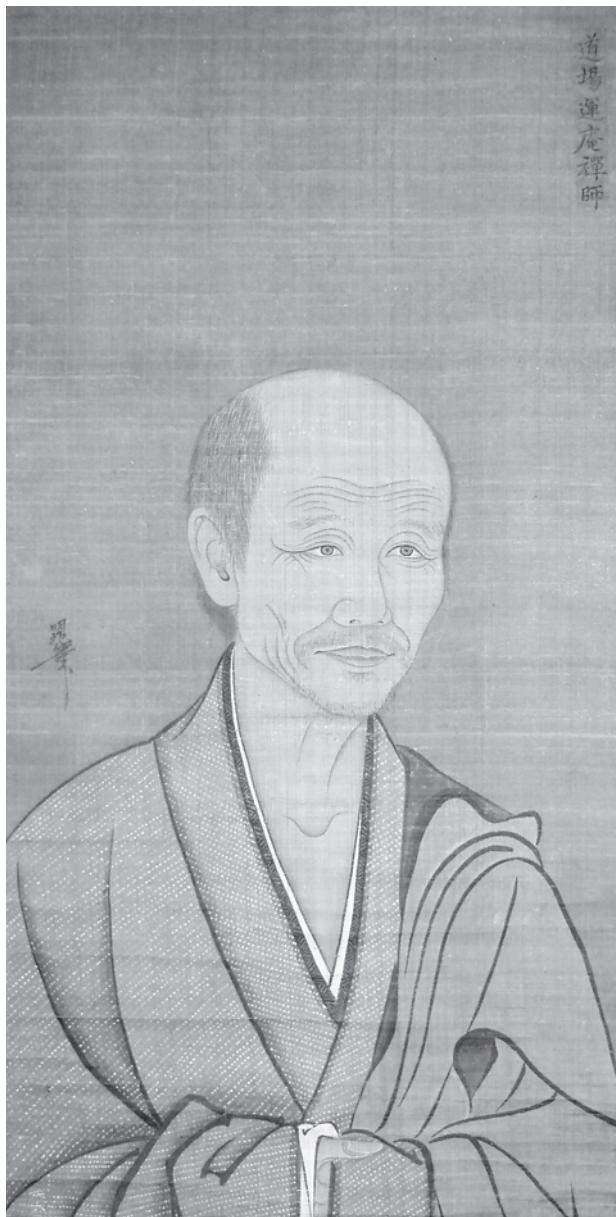
【图Ⅲ】 運庵普巖頂相 部分



【图四】 雪江宗深筆 運庵普巖頂相贊  
 (正法山妙心寺所藏)



【图V】 松源下十祖像 運庵普巖頂相贊  
 (東山建仁寺常光院所藏)



【図Ⅵ】 伝明兆筆 東土二十八祖図所収  
運庵普巖頂相（横嶽山崇福寺所蔵）

運菴禪師肖像



【図Ⅶ】 運菴普巖肖像  
(流布本『運菴和尚語録』所収)